

第3章 オノマトペと反復表現

第2章において述べたように、反復形(疊語形)が豊富に用いられるということは日本語と韓国語のオノマトペに共通に見られる最も顕著な形態的特徴の1つである。本章では反復形オノマトペに焦点を絞り、実際の用例に基づき日韓両語間の類似性を詳細に論ずると共に、そのような高度な類似性を両語が持つに至った背景的要因が何であったかを考察する。

3.1 反復形オノマトペ

第2章において、日本語と韓国語の反復形オノマトペが形態的に高度な類似性をもつことを概説した。ここでは形態面の類似性を更に詳細に論じ、また、日韓両語のオノマトペは形態面ばかりでなく分布や使用頻度、意味の面においても類似することを解説する。

3.1.1 分類

§2.4.1において、日韓両語の反復形オノマトペは、反復のボタンにより完全反復形、類音反復形(不完全反復形)、部分反復形に分類されるとした。以下は、その更に詳しい例証である。

3.1.1.1 日本語の場合

日本語の反復形オノマトペを検討する前に、まず、次の2組の単一形(非反復形)オノマトペの用例を見てみよう。¹

(1) ふと嘉助は目をひらきました。『風の又三郎』

¹ 本章の引用例中の下線はすべて筆者によるものである。

三郎がだまって、やっぱりきつと口を結んでうなずきました。『風の又三郎』

東郷老人は古橋をしばらくじつと見つめていた。『吉里吉里』

耕助が嘉助にそつといいました。『風の又三郎』

みんなはどつとまた笑いました。『風の又三郎』

ハツとして目ざめると、もう何杯食ったのか、食べたのか食べないのかもわからなくなってしまう。『航海記』

上等の風呂敷きを持ってこなくてホツとしたのはこのときだけであった。『航海記』

私も同時にむつとした表情をしたが、これはむろん笑いをこらえるためであった。『航海記』

そのときすうつと霧がはれかかりました。『銀河鉄道』

赤毛の子どもは一向にこわがるふうもなくやっぱりちゃんとすわって、じつと黒板を見ている。『風の又三郎』

ふん、と佐藤は鼻の先で笑った。『吉里吉里』

裁判所はどこかにで一んと鎮座しているものなのだ。『吉里吉里』

古橋はまたもやけろつと忘れてくれるにきまっている。『吉里吉里』

一時はジュースしか飲めず、この通りげっそり痩せてしまった。『航海記』

そこで私は、すっかりこの計画に満足し、早速ノコノコ或る船会社に出かけて行った。『航海記』

日ごろ佐藤に言われているいや味を、古橋はこのときとばかりたっぷりとお返ししておいて…『吉里吉里』

ハンブルクじゃあちつとも姿が見えぬから、てつきり逃げたと思った。『航海記』

電話口の向こうで、さすがにビックリしたような声が叫んだ。『航海記』

ただあんぐりと口を開け、近づいてくるバスとイサム阿部とをかわりばんこに見ているだけだった。『吉里吉里』

小十郎はやっぱりぼんやり立っていた。『なめとこ山』

- (2) 文学の花がぱつと咲いてやがてそれがしっかりと結実する、その時節がやってきたのだよ。『吉里吉里』

ときにはピュツと水を噴射してすばやく逃げる。『航海記』

そのとき店でラーメンを啜っていた数人の女客がきゃーつと叫んで総立ちになった。『吉里吉里』

風が山の方で、ごうつと鳴っております。『祭の晩』

すると俄かに監督が戸をガタツとあけて走って入って来ました。『化物丁場』

電信柱の瀬戸の碇子が、きらつと光ったり…『化物丁場』

その時向う岸ちかくの少し下流の方で見えない天の川の水がきらつと光って…『銀河鉄道』

するといつか馬はぐるつとさっきの小高いところをまわって…『風の又三郎』

あんなにくるつとまわって、前の方へ来た。『銀河鉄道』

…軽機関銃の銃口が自分の方向を捉えているのを見て、そくつとし思わず小さくな

った。『吉里吉里』

腕時計にちらと眼を走らせてから背広男が答えた。『吉里吉里』

鉄道工夫の人はちらっと私を見てすぐ笑いました。『化物工場』

ジョバンニは思わずどきっとして戻ろうとしましたが…『銀河鉄道』

…教室のなかの子はなんだかにやっとわらって、すこしうごいたようでした。『風の又三郎』

馬屋のうしろの方で何か戸がばたっと倒れ…『風の又三郎』

時々なにかの道具が、ピカッと光ったりしました。『銀河鉄道』

…短冊型に切った紙がべたっと貼っつけてある。『吉里吉里』

水はむくっと盛りあがり、それからしばらく、そこらあたりがきいんと鳴りました。『風の又三郎』

いいから、ぐいと一気にやりたまえ。『吉里吉里』

実力は機動隊よりぐんと上なのに日陰者なので世にもてはやされない…『吉里吉里』

女の子はすなおにそこへ座って、きちんと両手を組み合せました。『銀河鉄道』

佐藤はばちんと指を鳴らした。『吉里吉里』

(1)と(2)の例はいずれも単一形のオノマトペであるが、反復形が可能かどうかという点で異なる。² (1)の例はどれも反復することができないものである。例えば、(1)の最初の例の「ふと」は「ふふと」のように反復して用いることができない。これに対して、(2)の例はすべて反復が可能である。例えば、(2)の最初の例の「ばっ」とは「ばっばっ」とのように反復して用いることができる。このように、単一形のオノマトペには反復不能なものと反復可能なものがある。両者の比率をオノマトペの辞典の見出し語で見ると、浅野編(1978)『擬音語・擬態語辞典』の見出し語となっている単一形オノマトペのうち約60%が反復可能なものである。

次の(3)の用例は反復形のオノマトペであるが、いずれも(2)のような反復可能なオノマトペが反復されて派生したものである。言い換えれば、(2)のよう

² 反復可能であるかどうかを判断する際に、オノマトペの末尾の促音「っ」を除いた形も考慮に入れた。引用助詞「と」の前の促音「っ」は、オノマトペの本質部分というよりも音韻環境によって義務的に挿入されている性格が強いためである。したがって、例えば(2)の「きゃーっ(と)」や「がたっ(と)」は「きゃーきゃー」や「がたがた」のような形があるために反復可能であると判断した。

な単一形の対応形をもつものである。

- (3) 古橋が言うと、ユウイチ小松はまた下駄をかたかた鳴して震え出した。『吉里吉里』
 風はまだやまず、窓ガラスは雨つぶのために曇りながら、まだがたがたなりました。
 『風の又三郎』
 …犬が自分の突っかけて来た下駄をがりがりと齧っているのが目に入ったからである。『吉里吉里』
 古橋たちの前を、奇妙な風体をした五人組がきゃっきゃ笑い声を立てながら歩いていく。『吉里吉里』
 彼の左手首の腕時計が…陽に当たってきらきらと光る。『吉里吉里』
 ガラスのマントがギラギラ光りました。『風の又三郎』
くるくるとよく動く目をした小学生である。『吉里吉里』
 少年刑事は店の内部(なか)をぐるぐる小熊のように歩き廻った。『吉里吉里』
 二人はごうごう鳴って汽車のように走りました。『土神』
 …途中で買ったキャンティの葡萄酒をグビグビ飲みながら日記をつけた。『航海記』
 三勇士の肩越しにヘリコプターの編隊がぐんぐんこっちへ近づいてくるのが見えた。
 『吉里吉里』
 イサム安部は、右手の人差し指で自分の頭をこつこつと叩いた。『吉里吉里』
 …そいつが船の傾斜につれてザブンザブンと波打っている。『航海記』
 テストの間、古橋はたらたらと汗を流すだけでなにひとつまじなことを言うことができなかつた。『吉里吉里』
 大気中の水素イオンが酸性になればやはり目がチクチクするはずだ。『吉里吉里』
 …鳥捕りの時々大したもんだというようにちらちらこっちを見ているのがぼんやりわかりました。『銀河鉄道』
 …万引と間違えられはせぬかとドキドキし…『航海記』
 あれやこれやで呆として突っ立っていると、禿おやじがにこにこしながらまたいった。『吉里吉里』
 イサム安部は顔がくずれてばらばらになりそうなほどにやにや笑ってから…『吉里吉里』
 みんなはばたばた鞆をあけたり風呂敷をといたりして通信簿と宿題帳を机の上に出しました。『風の又三郎』
 草の中には、びかびか青びかりを出す小さな虫もいて…『銀河鉄道』
 …いつまた再発するかわからないので私はビクビクしていた。『航海記』
 風が強まり、マストの架線がびゅんびゅん音を立てている。『航海記』
 …一匹の黒い鳥がピョンピョン跳ねて私の行くほうへついてくる。『航海記』
 私はぶらぶらと道ゆく女の子などを観察しながら歩いた。『航海記』
 聞いているうちに古橋は感動のあまりぶるぶる震え出した。『吉里吉里』
 二十人前くらいのサシミのとれる肉片が、惜しげもなくぼいぼいと海中に投げ捨てられる。『航海記』
 佐藤はぼきぼきと指を鳴らしながら…『吉里吉里』

すっかり夏のような立派な雲の峰が、東でむくむく盛りあがり…『風の又三郎』
場内のあちこちからゆらゆらと紫煙が立ちのぼる。『吉里吉里』

一方、次の(4)のような例は、同じ反復形でも(3)の場合とは違って、対応す単一形オノマトペを持たない。つまり、反復という派生過程によって生じたのではなく、本来の反復形であると見なされるべきものである。³

-) …彼女はいそいそと椅子を引寄せ、私のすぐ横に坐ってしまった。『航海記』
ジョバンニはまるでたまらないほどいらいらしながらそれでも堅く唇を噛んでこらえて窓の外を見ていました。『銀河鉄道』
なにしろこの地は第二次大戦中各国のスパイがウヨウヨたむろしていたところなのである。『航海記』
…彼女はいそいそと椅子を引寄せ、私のすぐ横に坐ってしまった。『航海記』
土神は日光を受けてまるで燃えるようになりながら高く腕を組みキリキリ歯噛みをしてその辺をうろうろしていましたが…『土神』
赤ひげの人が、少しおずおずしながら、二人に訊きました。『銀河鉄道』
とうとう木樵はおろおろ泣き出しました。『土神』
みんなははじめてがやがや声をたててその教室の中の変な子を指しました。『風の又三郎』
古橋はぐうぐうと鼾をかいてカメラの前で眠ってしまい…『吉里吉里』
すると三郎は少し面白くなったようでまたくつくつ笑いだしてたずねました。『風の又三郎』
…やはりそのことを気にして本の中でクドクドと注釈しているそうである。『航海記』
古橋は右手で額を押えて、ぐりぐりと揉んだ。『吉里吉里』
佐藤がけたけたと笑い出したが、その笑い声は途中で凍りついたようになって止んだ。『吉里吉里』
そのうちにジャンパー男はしゃくりあげ、目頭から溢れ落ちる涙を手の甲でごしごしと擦った。『吉里吉里』
言い方も、また言っていることも、日向(ひなた)に三日も晒した餅よろしくコチンコチンだ。『吉里吉里』
…こつこつ努力を積み重ねていけばきっといつかは花の咲く時もあると思ひ直し

³ 反復形オノマトペが本来的なものか派生的なものかの判断には、検討の対象となる単純形オノマトペと問題の反復形オノマトペの意味・機能が同じであることを前提とした。例えば、(4)の「ぐうぐうと鼾をかいて」の「ぐうぐう」を本来的反復形であると判断したのは、いびきの擬音語として単純形の「*ぐう」が用いられないためである。しかし、「腹がぐうぐうと鳴る」の「ぐうぐう」は、「腹がぐうと鳴る」ということも可能であるので派生的な反復形である。同様に、(4)の「ごろごろと雷が鳴り」の「ごろごろ」や「どんとどん遠ざかって」の「どんとどん」なども、「ごろつと横になる」の「ごろつ」、「腹にどんとくる」の「どん」とは意味・用法が異なるため本来的な反復形である。

…『吉里吉里』

そのうちに、いきなり上の野原のあたりで、ごろごろと雷が鳴り出しました。『風の又三郎』

寒くなればごわごわの作業ズボンにトックリ首のセーターである。『航海記』

女の子は両手を顔にあててしくしく泣いてしまいました。『銀河鉄道』

三郎はそんなことにはかまわず土手の方へやほりすたすた歩いて行きます。『風の又三郎』

そのうち船はもうずんずん沈みますから…『銀河鉄道』

…目を赤く腫らし、咽喉(のど)をぜいぜい鳴らしながら…『吉里吉里』

私はオーバーのかくしに手を入れて、一人せかせかと獣(けもの)たちを見てまわった。『航海記』

またワインを飲み、そろそろ頭がまわってきて猛烈な勢いでジルバなどを踊った。『航海記』

「どしどしご自分のお考えをおっしゃってくださいませね」『吉里吉里』

…と思ったらすぐそのあとから佐太郎だの耕助だのどやどややってきました。『風の又三郎』

主のない船はどんどん遠ざかってゆく。『航海記』

そいつを取ろうとするといかにも痛そうでなかなかとれない。『航海記』

私はこの言葉に感心し、その夜おそくノコノコ東京に戻ってきた。『航海記』

夕刻やっと走りだし、翌日は丸一日のろのろと動いたり、とまったり、霧笛を鳴らしたりして…『航海記』

…女たちが七、八人ぐらいつ集って橋の方を見ながら何かひそひそ談しているのです。『銀河鉄道』

…幽鬼のごとき中年男がひたひたと接近してくるわけで…『吉里吉里』

古橋は背広の内隠しから乗車券を出し、ジャンパー男の目の前でひらひらと振った。『吉里吉里』

…ひねくりまわしてなにかぶつぶつ言う。『航海記』

けどどすぐ俗語だつてべらべらになった。『航海記』

これはホカホカ湯気のでている奴を辛子(からし)をつけて食べる。『航海記』

甲板では操業の準備がぼつぼつ始められている。『航海記』

…あやしげな英語をわめくのにもほとほと疲れはて…『航海記』

百姓はさっそく鶏肉の空揚げをむしゃむしゃやりはじめた。『吉里吉里』

たばこばたけからもうもうとあがる湯気の向うで…『風の又三郎』

煙突もついていて、そこからはもくもくと黒煙が上がっている。『吉里吉里』

…困ったことにそのポーランド人はドイツ語をちっとも知らず、徒に口をもぐもぐさせるだけである。『航海記』

すると三郎はすっかり顔を赤くしてしばらくもじもじしていましたが…『風の又三郎』

カモが道端にいて、人が近づいても恐れず、ヨチヨチ白い土手を下りてゆく。『航海記』

…老人は私を離さず一緒によぼよぼと歩きだした。『航海記』
 ネクタイはよれよれで服は垢じみ…『航海記』
 …なんだか汚い食物を大勢の連中がワイワイ言いながら食べはじめた。『航海記』
 …これから遠足に出かけようとしている子どもたちよろしくなにかわくわくするよ
 うな表情を浮かべ…『吉里吉里』

例えば、「いらいら」、「ウヨウヨ」、「いそいそ」などは、それぞれ「*いらっと」、「*うよっと」、「*いそっと」のような非反復形では用いることができず、必ず反復形で用いられるオノマトペである。(4)の他の例についても同様である。このように、反復形オノマトペは(3)のような派生的な反復形と(4)のような本来的な反復形とに区分できる。両者の比率は、オノマトペ辞典の見出し語で見ると派生的な反復形が半数以上を占める。浅野編(1978)『擬音語・擬態語辞典』では約60%、阿刀田・星野著(1993)『擬音語・擬態語使い方辞典』では約65%が派生的なものである。

反復形オノマトペが再度反復されることもある。

- (5) 土神は自分のほこらのまわりをうろうろうろうろ何べんも歩きまわってからやっと気がしずまったとみえて…『土神』
 天井がガサガサガサガサいいます。『風の又三郎』
かたかたかたかた、かたかたかたかた。板を棒切れで細かく叩くような音がしはじめた。『吉里吉里』
 みんなはおじぎをする間はちよっとしんとなりましたが、それからまたがやがやがやがやがやいきました。『風の又三郎』
 左眼を軽くつむった瞬間、足の下から、ききききと車輪に急制動のかかる金属音が聞こえ…『吉里吉里』
 見るとそこらいちめん、きらきらきらきらする栗の実でした。『祭の晩』
 僕は、生れてまだまっかに燃えて空をのぼるとき、くるくるくるくる、からだがまわったからね。『火山弾』
 …ところがそうなってもエンジンの奴ゴトゴトゴト一向にとまらないんだね。『航海記』
 …銀いろのすすきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさら、ゆられてうごいて、波を立てているのでした。『銀河鉄道』
 その影は草に落ちてちらちらちらちらゆれました。『土神』
どんとどんとどん汽車は降りて行きました。『銀河鉄道』
 土神はいかにも嬉しそうににやにやにやにや笑って寝そべったままそれを見ている

したが…『土神』

ジョバンニはわくわくわくわくして足がふるえました。『銀河鉄道』

こうした二重反復形のオノマトベは、(5)の例のほとんどが宮沢賢治の童話から採ったものであることからわかるように、子供向けの読み物、語りに多用される文体上の技法であるがゆえに多少子供っぽい感じを与え、多分に話し言葉的ではあるけれども、描写力は非常に強い。

4回反復する二重反復形の他に、次のように3回反復型のものもみられる。

(6) すると佐藤が低い声でくっくっくと笑いだす。『吉里吉里』

空がくるくるくると白く揺らぎ、草がバラッと一度に零を払いました。『風の又三郎』

受話器の向うで笑い声があがった。ふわっふわっふわという特徴のある笑い方である。『吉里吉里』

…シュシュシュとロケット弾みたように煙突口から飛び出してバス会社の営業所の屋根の上にひよいと乗った。『吉里吉里』

空が旗のようにぱたぱた光って翻り、火花がパチパチパチと燃えました。『風の又三郎』

…もう吊り革に掴まっている気力もない、へたへたへたとのってバスの床に坐りこんでしまった。『吉里吉里』

六平はクウ、クウ、クウと鳴って、白い泡をはいて気絶しました。『とっこべとら子』

(3)や(4)の例は、同一の要素を反復する完全反復形であるのに対して、次の(7)の例は反復される要素の1拍目の音を変えて造る類音反復形(不完全反復形)のオノマトベである。

(7) 私は九時のボートで上陸して、あたふたとラッフルズ博物館を捜した。『航海記』

パシフィックとかインターナショナルとかいう名のバーがやっていて、寒い戸外に客を求める女たちの姿もちらほらする。『航海記』

ちやほやもしない代り、親切でもなく、つかず、離れずで、しかも気まずいおもいもさせないのは…『森』

ジョバンニはもうどぎまぎしてまっ赤になってしまいました。『銀河鉄道』

もうすっかり法則がこわれた。何もかもめちやくちやだ。『ガドルフ』

覚悟はきまっている。いまさらじたばたはしない。『吉里吉里』

何かいやなことがあって、むしゃくしゃした気分を抑えるためにショッピングをす

る人がいます。『生きる』

反復形のもう1つの変種として、構成要素の一部だけを反復する部分反復形がある。(8a)のように語頭の要素が反復される場合と、(8b)のように語末の要素が反復される場合とがある。

- (8) a) 三回目は強烈なドライブがかけてありぐぐーんと伸びて来…『吉里吉里』
 そのとき、ずずんという鈍い地響きがし、窓ガラスがびりびりと鳴った。『吉里吉里』
 馬もひひんと鳴いています。『風の又三郎』
- b) 洛陽の紙価を高からしめる、という佐藤の言いまわしがまたも気に入って古橋はうふふと笑った。『吉里吉里』
 それで歌いっぶりのいい文士の先生はもう朝まで帰さないっていう仕掛けになっておましてね。エヘヘ。『吉里吉里』
 先生は呼子をピルルと吹きました。それはすぐ谷の向うの山へひびいて、またピルルルと低く戻ってきました。『風の又三郎』
 馬屋のうしろの方で何か戸がぱたと倒れ、馬はぶるると鼻を鳴らしました。『風の又三郎』

部分反復の回数は2回が普通であるが、(8b)の3つ目の例の「ピルルル」のように3回以上反復された例もある。反復の回数に制限はない。

語中の要素が反復されている例としては「のほほん」がある。しかし、これは例外的で、他には「ずどどん」、「ぶるるん」のように臨時語的に造られるものがあるに過ぎない。

3.1.1.2 韓国語の場合

韓国語の反復形オノマトベも、形態的にほとんど日本語の場合と同様に分類される。まず、単一形のオノマトベが、反復可能であるかどうかに関して、(9a)のような反復不能なもの、(9b)のような反復可能なものとに区分できる。⁴

⁴ 本章の韓国語引用例の日本語訳はすべて筆者によるものである。

- 9) a) 할아버지가 문을 살짝 열고 내다보니… (おじいさんが門をそととあけて覗いてみると…) 『童話』
- 그 때 밖에서부터 무슨 소리가 들리더니 방문이 슬그머니 열렸습니다. (その時、外で何か音が聞こえてきてドアがすつと開きました。) 『童話』
- 과일을 잔뜩 먹었는데도 계속 배가 아프니 어떡하면 좋겠는가? (果物を一杯食べてもお腹がまだ痛いのはどうすればいいのか?) 『童話』
- 도깨비는 피를 흡뻑 뒤집어 쓴 채, 놀란 나머지 '걸음아 날 살려라' 하고 도망쳤습니다. (鬼は血をびっしよりかぶったまま、驚きのあまり「足よ助けてくれ」と言って逃げました。) 『童話』
- '이러다가는 호랑이에게 잡혀 먹히겠구나!' 하고 생각하고는 갑자기 딱 멈추어섰습니다. (「このままでは虎に殺される!」と思って、突然びたつと立ち止まりました。) 『童話』
- b) 남편은 그 때 하마터라면 그 사실을 얘기할 뻔했으나 꼭 참고 입을 다물어버렸습니다. (夫はその時うっかりその事実をしゃべるところでしたがぐつと我慢して口をつぐみました。) 『童話』
- 그것에 대한 두려움보다 우선 문득 느껴지는 죽음의 그림자가 싫었다. (それに対する恐れよりもまずふと感じる死の影が嫌だった。) 『父』
- 벌써 불그스레한 얼굴로 남 박사가 벼럭 고함을 내질렀다. (すでに赤い顔で南博士がわつと声を張り上げた。) 『父』
- 담쟁이덩굴을 꺾입은 두 동의 건물을 빙 둘러싸고 있던 정원이 환유의 놀이터였다. (ツタのからまった二棟の建物をぐるつと囲んでいた庭がファンユの遊び場だった。) 『手紙』
- 도시락 뚜껑을 열고 젓가락으로 밥을 쿵 찔렀습니다. (お弁当のふたをあけて箸でご飯をぶすつと刺しました。) 『童話』
- 송골매는 손뼉을 탁 쳤습니다. (ハヤブサは手のひらをばんと叩きました。) 『童話』
- 두 손으로 턱을 두드리며 펼쩍 뛰었습니다. (両手で顎を叩きながらびよんと跳び上がりました。) 『童話』
- 영감은 물 속에 퐁딩 들어가 목욕을 하고 나왔습니다. (老人は水の中にどぶんと入って体を洗って出てきました。) 『童話』

(9a)의 「살짝」/salcchak/(そつと、するつと)、「슬그머니」/sûlgûmôni/(すつと、こっそり)、「잔뜩」/chanttûk/(いっぱい)などは、それぞれ「*살짝살짝」、「*슬그머니슬그머니」、「*잔뜩잔뜩」などのように反復して用いることができない。⁵これに対して、(9b)의 「문득」/mundûk/(ふと)、「벼럭」/pôrôk/(わつと、かつと)、「빙」/ping/(ぐるつと)などは「문득문득」/mundûng-mundûk/、「빙빙」/ping-bing/な

⁵ ただし、(9a)の最後の用例の「딱」/ttak/のような語は、意味によって反復可能性が異なる。上例のように「びたつと」を意味する擬態語の場合には反復不能であるけれども、「かちん、ほぎん」の意味の擬音語の場合には反復可能である。

どのように反復することが可能である。

次の例は、(9b)のような反復可能なオノマトベから派生的に造られた反復形オノマトベである。

- (10) 우연히 지나치는 보석상마다에서 정수는 그 진주반지와 목걸이를 아내에게 선사하고픈 욕망을 문득문득 느끼곤 했었다. (偶然宝石屋を通り過ぎる度にチョンスはその真珠の指輪やネックレスを妻に送りたい欲望をふと感じたりした。)『父』

각기 상투를 잡고 빙빙 돌았습니다. (それぞれまげをつかんでぐるぐる回りました。)『童話』

이웃나라 임금님은 옆에 앉아 있는 점쟁이를 쿵쿵 찔렀습니다. (隣国の王様は隣りに座っている占い師をちくちく刺しました。)『童話』

담뱃대로 방바닥을 탁탁 쳤습니다. (キセルで床をとんとん叩きました。)『童話』

이 당나귀는 펄쩍펄쩍 도망다니다가 그만 어느 집으로 쏙 들어가 버리고 말았습니다. (このロバはびよんびよん逃げ回って、ある家にすっと入ってしまいました。)『童話』

…옷을 벗어던지고 하나 둘 넷물 속으로 퐁덩퐁덩 뛰어들었습니다. (…服を脱ぎ、一人二人と川の中にどふんどふんと飛び込みました。)『童話』

一方、韓国語にも対応する単一形オノマトベを持たない、本来的な反復形オノマトベが数多く使われている。⁶

- (11) 호랑이의 꼬리는 그만 얼음에 꽁꽁 얼어 붙어버렸습니다. (虎のしっぽはカチンカチンに凍ってしまいました。)『童話』

머리에서 발끝까지 이불을 돌돌 말아감고… (頭から足の先までふとんをぐるぐる巻きつけて…)『童話』

토끼는 고개를 푹 숙이고 벌벌 떨면서 공손하게 말했습니다. (ウサギはがっくりと首を垂れて、ふるふる震えながら丁寧に言いました。)『童話』

땀을 뽀뽀 흘리며 일을 끝내고 나니 주인집에서 이번에는 돼지고기를 주었습니다. (汗をだらだらかきながら仕事を終えると、主人の家で今度は豚肉をくれました。)『童話』

떡보는 배를 살살 문질러보았습니다. (トクボはお腹をそろそろとさすってみました。)『童話』

장 변호사의 애처로운 표정에도 아랑곳없이 그는 그저 실실 객쩍은 웃음만 흘리고 있었다. (チャン弁護士の哀れな表情も気にかけず、彼はただへらへら笑うだけだった。)『父』

⁶ ただし、本来的な反復形のオノマトベでも、「反復」を表わす動詞派生語尾「-거리다」/kòrida/と結びつく場合には単一形が用いられる。例えば、(11)の第4例の「웅얼웅얼」/ùng-òl-ùng-òl/(ぶつぶつ)は本来の反復形オノマトベであるけれども、「-거리다」の添加によって動詞を派生する場合には単一形の「웅얼」/ùng-òl/が語幹となり「웅얼거리다」/ùng-òl-gòrida/(ぶつぶつ言う)のようになる。「-거리다」については§2.5.2.2.1.2を参照。

…아빠의 품에 안겨 엉엉 울며 용서를 빌었을 텐데요. (…お父さんの胸の中でわんわんと泣きながら許して下さいと謝ったのに。) 『父』

도깨비한테 얻어 맞아 퐁퐁 부운 얼굴로… (鬼に叩かれてばんばんに腫れた顔で…) 『童話』

그의 마음속에 정말 그런 훨훨 날고 싶은 마음이 있었던 모양이다. (彼の心の中に本当にそんなふわふわと飛びたい気持ちがあったようだ。) 『父』

바보는 주막에서 시키는 일을 고분고분 잘하며 누가 자신의 흉을 보아도 화내지 않았습니다. (バカは飲み屋での仕事をきちんきちんとやって、誰が自分の悪口を言っても怒りませんでした。) 『童話』

갑자기 하늘이 어두워지더니 하늘에서 무엇인가가 나풀나풀 내려오는 것이었습니다. (突然空が暗くなって空から何かひらひらと降りてくるのでした。) 『童話』

아파트에 도착했을 때는 그 긴 여름해도 어느덧 뉘엿뉘엿 저물어가고 있었다. (アパートに着いた時は長い夏の陽もいつしかだんだんと沈んでいきました。) 『父』

힘겹게 몸을 일으킨 정수는 느릿느릿 공중전화 부스로 향했다. (ようやく体を起こしたチョンスはのろのろと公衆電話ボックスへ向かった。) 『父』

홍부 부부는 너무도 좋아서 춤을 덩실덩실 추었습니다. (フンブ夫婦はあまりにもうれしくてひよひよと踊りました。) 『童話』

어떤 사람이 이렇게 소리치며 데굴데굴 구르자… (ある人がこのように叫びながらごろごろ転がると…) 『童話』

갓나서부터 밥을 먹고 큰 아기는 무럭무럭 자라나 두 달이 지나니 어느 새 커다란 아이가 되었습니다. (生まれたばかりからご飯を食べて大きくなった赤ちゃんは、すくすく育って二ヶ月が過ぎるといつの間にか大きい子供になりました。) 『童話』

이 술이 나한테 부글부글 하며 욕하잖아. (この釜が私にぶつぶつと悪口をうじやないか。) 『童話』

송골매는 주인을 보기만 하면 공연히 죄지은 사람처럼 부들부들 떨었습니다. (ハヤブサは主人に会いさえすれば何となく罪を犯した人みたいにふるふる震えました。) 『童話』

이렇게 생각하고 부랴부랴 산을 내려왔습니다. (こう思い大急ぎで山を下りて来ました。) 『童話』

덕보는 기겁을 하고 일어나 비척비척 냇가에서 나왔습니다. (トクボはあっと驚いて起きあがりふらふらと川辺から出て来ました。) 『童話』

…나뭇잎 떨어지고 바람이 선들선들할 때 상수리나 도토리 따위를 주워 먹으려고… (…葉っぱが落ちて風が涼しい時、クヌギの実やどんぐりなどを拾って食べようと…) 『童話』

호랑이는 배가 몹시 고파 먹을 것을 찾으러 어슬렁어슬렁 돌아다녔습니다. (虎はとてもお腹が空いて食べ物を探しにのそりのそり歩き回りました。) 『童話』

“나는 바다에서 온 거북이라고 한다.” 하고 웅얼웅얼 대답했습니다. (「私は海から来た亀です。」とぶつぶつ答えました。) 『童話』

남박사는 아무런 대꾸도 없이 주섬주섬 책상 위를 정리하고 있었다. (南博士は何も答えずひとつひとつ机の上を整理していた。) 『父』

여기저기서 타닥타닥 하는 소리가 들려왔습니다. (あちらこちらからたばたという音が聞こえて来ました) 『童話』

이렇게 해서 주인 양반과 하인은 둘 다 터벅터벅 걸어서 서울로 향했습니다. (こうして主人と下男は二人ともとほとほ歩いてソウルへと向かいました。) 『童話』

입을 삐죽거리며 투덜투덜 했습니다. (唇をとがらせながらぶつぶつ言いました。)『童話』

…그자리에 주저앉으며 숨을 헐떡헐떡 내쉬었습니다. (…その場に座り込んではあはあ息を切らしました。)『童話』

멀리서 흥얼흥얼 노래를 부르면서 도깨비가 찾아왔습니다. (遠くからふんふんと鼻歌を歌いながら鬼が訪ねて来ました。)『童話』

は、反復形の1変種である類音反復形オノマトペの例である。

- a) 다짜고짜 이 시간이 무슨 시간입니까, 하며 시작된 그 학생의 질문은 그러나 이 시간이 무슨 시간인지를 묻는 것이 아니었다. (いきなり、この時間は何の時間ですか、から始まったその学生の質問はこの時間が何の時間なのかを尋ねるものではなかった。)『手紙』
- b) 둘은 아기자기 참깨 쏟아지듯 극진하게 서로 사랑하며 살고 있었습니다. (二人は仲むつまじく楽しくお互いをこの上なく愛して暮らしていました。)『手紙』
아동바동 아무리 붙잡으려 애쓰고 매달려도 이미 정해진 갈길을 어찌 막을 수 있겠는가. (あたふたとどんなに捕まえようとしてもすでに定められた行く道をどうして遮られようか。)『父』
 이 일이 있은 후, 할아버지와 할머니는 며칠간을 또 아웅다웅 다투었습니다. (この事があった後、おじいさんとおばあさんは何日間かまたああだこうだと喧嘩しました。)『童話』
 그것들은 자작나무의 하얀 수피 사이로, 사탕단풍나무의 줄지어 선 줄기 사이로 올망졸망 모여서 피었다. (それらは白樺の白い樹皮の間に、サトウカエデの並んだ枝の間に、かわいらしく不揃いに多く咲いた。)『手紙』
 관사 앞 너른 마당 한 구석에 앙증맞은 꽃화분들이 웅기중기 모여 있었다. (官舎の前の広い庭の片隅にかわいらしい大きさの不ぞろいな花鉢が集めてあった。)『手紙』
- c) 그리고는 어묵 국물로 매운 입 속을 달래가며 돼지고기 안주접시를 허겁지겁 비워갔다. (そしてスープで辛い口の中を冷やしながらかつまみの豚肉の皿をがつつと平らげていった。)『父』
 여러 날이 지난 후에야 그 소문을 듣고 허둥지둥 찾아왔습니다. (何日か過ぎた後にその噂を聞いて大急ぎで訪ねて来ました。)『童話』

類音反復形の前半部と後半部の並べ方について、日韓両語の間で興味ある共通性がある。(12b)の「아기자기」/agi-jagi/(仲むつまじく楽しく)、「아웅다웅」/aung-daung/(ああだこうだ)、「웅기중기」/ongi-jongi/(大きさの不揃いな物が集まっているようす)、「올망졸망」/olmang-jolmang/(かわいらしく小さい物が不揃いに多く並んでいるようす)、「울긁불긁」/ulgût-pulgût/(色とりどりに)は、いずれも前半部は母音(あるいは半母音)で始まり後半部は子音で始まっている。韓国語の

オノマトペにはこのような配列の類音反復形が非常に多く、上記の他にも次のようなものがある。

- (13) 아득바득(ねちねち) 아장바장(ぶらぶら)
 아롱다롱(点・紋様などが不揃いにちりばめられたようす)
 안달복달(やきもき) 안절부절(そわそわ)
 알뜰살뜰(つましく家事の切り盛りが上手なようす)
 알쏭달쏭(こんがらかってよく分からないようす)
 앙실방실(にこにこ) 어근버근(がたがた)
 어릉더릉(薄い色の線や点が不揃いにまだらなようす)
 어긋버긋(ちぐはぐに) 어정버정(うろろう)
 어쩔비쩔(体の大きい人がよろめきながら歩くようす)
 열기설기(ごちゃごちゃ) 얼룩덜룩(まだらになっているようす)
 열싸절싸(よいやよいや) 열키설키(ごしゃごしゃ)
 엄병덤병(あたふたと) 오글쫄글(しわくちゃ)
 오동포동(まるまるぼっちゃりと) 오락가락(降ったりやんだり)
 오불꼬불(くねくね) 오손도손(仲睦まじく)
 오틀도틀(でこぼこ) 옥신각신(ああたこうだと)
 울강불강(もぐもぐと) 울랑출랑(ちゃぼちゃぼと)
 울룩불룩(でこぼこ) 울쑥불쑥(ぼつぼつと)
 울통불통(でこぼこ) 왈강달강(がちゃがちゃと)
 왜쑥비쑥(ちょっとしたことで腹を立てて口をとがらすようす)
 왜틀비틀(よろよろと) 우걱지걱(ぎしぎしと)
 우글부글(ぶつぶつと) 우글쭈글(くちゃくちゃ)
 우락부락(大柄で人相にすごみのあるようす)
 우물쭈물(ぐずぐず) 우북수북(山盛りに)
 우블꾸블(くねくね) 옥실득실(うようよ)
 울뚝불뚝(かつと) 울렁출렁(たっぷんたっぷんと)
 울먹줄먹(大小さまさまに) 울통불통(でこぼこと)
 울쑥불쑥(山の峰などが高く低く不揃いにそびえているようす)
 알라꿩달라꿩(色がけばけばしくてまだらなようす)
 왈가닥달가닥(がちゃんがちゃん) 똥그랑똥그랑(ちゃりんちゃりん)
 옥시글득시글(うようよ) 이렇성저렇성(あれやこれや)

しかしながら、この逆の配列順序のもの、つまり、前半部が子音で始まり後半部が母音に始まるという構成の類音反復形は1個も見られない。明らかに母音で始まる要素を先行させる規則が働いている。一方、日本語ではこれに該当する類音反復形は、(7)に挙げた「あたふた」の他、「あべこべ」、「いざこざ」、「あ

けすけ」、「うろちよろ」、「やきもき」ぐらいしかないけれども、いずれも母音に始まる要素が先行しており、やはり、逆の順序のものは1例もない。明らかに日韓両語で母音に始まる要素を先行させるという共通の規則が働いていると思われる。なお、韓国語では(12c)に挙げた「히집지집」/hîgôp-chigôp/(あたふたと)、「히둥지둥」/hîdung-jidung/(あたふたと、あわてて)の他に「호지부지」/hûji-buji/(うやむやに)、「헤실바실」/heshil-bashil/(ぐずぐずと)、「흥청망청」/hûngch'ông-mangch'ông/(お金や物をむやみやたらに使ってしまうようす)、「히덕지덕」/hîdôk-chidôk/(あえぎあえぎ)、「호리마리」/hûri-mari/(ほうと)、「호슬부슬」/hûsûl-busûl/(ばさばさ)など/h/で始まる要素も先行させる規則が働いている。しかし、日本語では、(7)に挙げた「ちらほら」や「ちやほや」が示すように、この規則は働いていないようである。⁷

最後に、韓国語の部分反復形オノマトペの例は次の通りである。

(14) a) 두 알갱이가 떼구르르 구르더니 네 알갱이가 됐습니다. (二つの実がごろごろ転がって四つの実になりました。)『童話』

바닥에 나동그라져 거품을 물고 온몸을 바르르 떨던 환유는 그대로 의식을 잃었다. (床に倒れ泡を吹いて全身をふるふる震わせたファニユはそのまま意識を失った。)『手紙』

원님은 갑자기 무슨 생각이 떠올랐는지 혼자 배시시 웃고는 엄숙한 얼굴로 여러 사람들 앞에 나타났습니다. (郡守は突然何を思ったのか一人へらへらと笑ってから、厳しい顔で人々の前に出ました。)『童話』

그제서야 정인이 부시시 몸을 일으키려고 했다. (ようやくチョンインがおもむろに体を起こそうとした。)『手紙』

방문이 스르르 열리면서 커다란 구렁이 한 마리가 혀를 날름거리며 들어왔습니다. (ドアがすすつと開くと一匹の大きいアオダイショウが舌をべろべろしながら入ってきました。)『童話』

…허공에 화분을 내젓는 정인의 몸에서 와르르 무엇인가가 쏟아져 내렸다. (…空に花鉢を放したチョンインの体から何かがらがらと崩れ落ちた。)『手紙』

사람들이 우르르 기차가 진행하는 방향으로 쏠렸다. (人々がわあつと汽車が進む方向に集まった。)『手紙』

찬바람에 몸을 부비며 헐벗은 나뭇가지들이 우수수 밤의 적막을 쓸고 있었다. (冷たい風に体を擦りながら葉っぱの落ちた枝がばらばらと夜の静寂をなでていた。)『手紙』

⁷ この問題について詳しくは、飯田(1993)、田守(1993)を参照。

紙』

정수의 뺨 위로 굵은 물방울이 주르르 흘렀다. (チョンスの頬の上に大粒の涙がつ
つーつとこぼれた。)『父』

푸시시 푸시시 불 꺼지는 소리로 말하면서 올 때는 인적 그친 넓고 깨끗한
하늘로 오라. (히라히라燈が消える音で言いながら来る時は人影の途絶えた広くきれいな天
に來い。)『手紙』

- b) 또르륵 마른 낙엽 하나가 간간이 부는 바람을 따라 그 여자와 두 사람 사이
를 오가며 굴렀다. (ころつと乾いた落葉一つが時々吹く風でその女の人と二人の間を行き
来しながら転んだ。)『手紙』

호랑이는 이를 부드득 갈며 자기의 굴 속으로 들어가 꽁꽁 앓았습니다. (虎
はぎりぎり齒ざしりをして自分の洞窟の中に入ってうんうんうめきました。)『童話』

벌컥벌컥 쉬지 않고 들이켜는 그의 눈자위로 주르륵 눈물이 굴렀다. (ごくご
く一氣に飲み干す彼の目にすすつと涙が落ちた。)『父』

저 멀리 호숫가로부터 새 한 마리가 푸드득 날아오르고 있었다. (あの遠くの
湖の辺から鳥一匹がばたつと飛び上がっていた。)『手紙』

…저 쪽에서 뭔가가 후다닥 뛰어오고 있는 모습이 보였습니다. (...あちら側か
ら何かばたばたつと走ってくるのが見えました。)『童話』

어! 하는 환유의 소리에 이어 후드득, 비가 내리기 시작했다. (あ!というフ
ァニユの声に続いてばらばらつと雨が降り始めた。)『手紙』

글방 선생과 마을 사람들은 찻국을 대접에 나누어 그 뜨거운 국물을 후루룩
마셔버렸습니다. (寺子屋の先生と村人たちはロウソクの汁を平鉢に分けてその熱い汁をず
ずずつと飲み干しました。)『童話』

- c) 흐흐흑, 어머니 용서해 주세요. (しくしく、お母さん許して下さい。)『童話』

(14a)의 「떼구르르」/tegurû-rû/(ごろごろ)、「바르르」/barû-rû/(ふるふる)、「배
시시」/pæsi-si/(へらへら)などのような語末の部分反復形や、(14b)의 「또르륵」
/ttorû-rû-k/(ころつと)、「부드득」/pudû-dû-k/(ぎりぎり)、「후다닥」/huda-da-k/(ば
たばたつと)のような語中の部分反復形はかなり使われているけれども、(14c)의
「흐흐흑」/hû-hûhûk/(しくしく)のような語頭の部分反復形は少ない。青山編
(1991)『朝鮮語象徴語辞典』の見出し語の中では「꼬꼬댁」/kko-kkodæk/(코ッ
코ッ)、「더덩실」/tô-dôngshil/(ふんわり)、「두둥실」/tu-dungshil/(ふわふわ)
の3語しか見られない。

以上に述べた日韓両語のオノマトペの形式的分類を表にまとめると次のよう

になる。

(15)		日本語		韓国語
非反復形	反復不能	ふ、きつ、じつ、そつ、ほつ、ほつ、すうつ、ちやん、ふん、でーん、けろつ、げっそり、すっきり、てつきり、たっぷり、びっくり、あんぐり など		딱(びたつと)、살짝(そつと)、슬그머니(そつと)、잔뜩(いっぱい)、흥뽀(びっしょり) など
	反復可能	ぱつ、びゅつ、きゃーつ、ごうつ、がたつ、きらつ、ぎらつ、くるつ、くるつ、そくつ、ちらつ、どきつ、にやつ、ばたつ、むくつ、ぐい、ぐん、きいん、きちん、ばちん など		푹(ぐつ)、문득(ふと)、버럭(わつ、かつ)、빙(ぐるつ)、쿵(おすつ)、탁(ばん)、펼쩍(びよん)、퐁뽕(どふん) など
反復形	完全	本来	いそいそ、いらいら、うようよ、うろうろ、おすおす、おろおろ、がやがや、ぐうぐう、くつくつ、くどくど、ぐりぐり、けたけた、ごしごし、こちんこちん、こつこつ、ごろごろ、ごわごわ、しくしく、すたすた、ずんずん、せいせい、せかせか、そろそろ など	퐁퐁(かちんかちん)、돌돌(ぐるぐる)、벌벌(ふるふる)、뽀뽀(だらだら)、살살(そろそろ)、실실(へらへら)、영영(わんわん)、툭툭(ばんばん)、휙휙(ふわりふわり)、나폴나폴(ひらひら)、뉘뉘(だんだん)、느릿느릿(のろのろ)、덩실덩실(ひよいひよい)、매굴매굴(ごろごろ)、무럭무럭(すくすく) など
		派生	かたかた、がたがた、がりがり、きゃっきゃつ、きらきら、ぎらぎら、くるくる、ぐるぐる、ぐびぐび、ぐんぐん、ざぶんざぶん、たらたら、ちくちく、ちらちら、どきどき、にこにこ、にやにや、ばたばた、びかびか、びくびく、びゅんびゅん、びよんびよん、ぶらぶら など	문득문득(ふと)、빙빙(ぐるぐる)、쿵쿵(ちくちく)、탁탁(とんとん)、펼쩍펼쩍(びよんびよん)、퐁뽕퐁뽕(どふんどふん) など
	類音反復	あたふた、うろちよろ、かたこと、じたばた、じゃかすか、ちらほら、ちやほや、てきばき、どきまぎ、どたばた、のらりくらり、べちゃくちゃ、むしゃくしゃ、やきもき、めちゃくちゃ など	다짜고짜(いきなり)、아기자기(仲睦まじく)、아들바둥(あたふた)、울망줄망(かわいらしく不揃いに)、아웅다웅(ああだこうだど)、아웅다웅(可愛らしく不揃いに)、웅기중기(可愛らしく不揃いに)、허겁지겁(あたふた)、허둥지둥(あたふた) など	
	部分反復	語頭	ぐぐーん、ずずん、ひひん、だだん など	꼬꼬댁(コッコツ)、더덩실(ふんわり)、두둥실(ふわふわ)、히힝(ひひん)、호호속(しくしく) など
語中	のほほん、ずどどん、ふるるん など	뚜르륵(ころつ)、부드득(ぎりぎり)、주르륵(すつ)、부드득(ばたつ)、후다닥(ぱつと)、후드득(ばらばら)、후루룩(ずずずつ) など		
語末	あはは、いひひ、うふふ、きりり、くるる、びりり、ふるる、えへへ など	베구르르(ごろごろ)、베시시(へらへら)、바르르(ふるふる)、부시시(おもむろに)、스르르(すずつ)、와르르(がらがら)、우르르(わあつと)、우수수(ばらばら)、주르르(つつつ)、푸시시(ひらひら) など		

3.1.2 分布比率と使用頻度

反復形式が日韓両語のオノマトペの最も顕著な形式的特徴であるとされるのは、それが多用されるからである。実際の使用頻度においても、また分布比率つまりオノマトペ語彙全体に占める割合においても、反復形式はオノマトペの典型的形式となっている。まず日本語の場合からみると、大坪(1989:192)は文

学作品に用いられているオノマトペのうち単純反復形(本論文の完全反復形)の占める割合を次のように報告している。⁸

(16)

作家	オノマトペ個数	単純反復形個数	比率
宮沢賢治	381	187	49.1%
坪田譲治	295	133	45.1%
谷崎潤一郎	287	131	45.6%
宮本百合子	261	113	43.4%
林芙美子	274	159	58.0%

いずれも50%前後というかなり高い頻度で反復形が用いられている。オノマトペ語彙全体に占める反復形の割合もほぼ同様である。次の表は、3種のオノマトペ辞典の見出し語全体に占める反復形の比率を示したものである。⁹

(17)

辞典	見出し語数	反復形個数	比率
浅野	806	480	59.6%
阿刀田・星野	737	430	58.3%
天沼	1565	589	37.6%

これをみると、天沼の比率が他のものに比べてかなり低い。これは、同氏が他の2点に比べて2倍ほども多いオノマトペを収録していることによるものと思われる。つまり、より多くのオノマトペを収録するに当たって、単一形式のものを積極的に拾い出した結果であると考えられる。見方を変えれば、反復形オノマトペのほとんどは基本的なものであるということになり、中心的な存在であることを示しているとも言えよう。

一方、韓国語においても、反復形のオノマトペが多様であり、かつ多用されている。김홍범(キム・ホンボム)(1995)によるオノマトペのリストを見ると、総数

⁸ この表は大坪(1989:192)の表を修正したものである。大坪は志賀直哉についても結果を報告しているが、オノマトペ個数186、単純反復形個数159、比率58%となっており計算が合わない。何らかの誤りがあると思われるので除外した。

⁹ 阿刀田・星野については見出し語数ではなく、収録語数である。

4780個のオノマトペのうち2511個(52.5%)が完全反復形である。実際の使用頻度に関しては、筆者の知る限りこれまで調査報告はなされていないので、筆者が『韓国伝来童話(上・下)』を資料として調査をしてみた。その結果、収集できた1986個のオノマトペのうち758個(38.2%)が完全反復形であった。(16)に紹介した日本語の使用頻度と比べてみるとかなり低いようであるが、これは、第2章の§2.3.1.2で述べたように、韓国語には1音節や2音節のオノマトペが多数あり、そのうちのいくつかは頻繁に用いられるという事情によるものと思われる。例えば、資料の中で10回以上用いられているものを挙げると次の通りである(括弧内の数字は使用回数を表わす)。

(18) 감작 /kkamcchak/ (びっくり : 85)	잔뜩 /chanttûk/ (たっぷり : 39)
꼭 /kkok/ (ぐっと : 32)	뜩 /ttuk/ (びたっと : 28)
번쩍 /pônchôk/ (びかっと : 22)	얼른 /ôllûn/ (さっさと : 19)
꿈작 /kkomcchak/ (びくっと : 18)	짹 /cchwak/ (ぎゅっと : 18)
탁 /t'ak/ (ばん : 17)	썩 /ssôk/ (すっと : 15)
벌떡 /pôlittôk/ (ばっと : 14)	푹 /p'uk/ (ぐっすり : 14)
딱 /ttak/ (ばったり : 12)	슬쩍 /sûlcchôk/ (さっと : 12)
가득 /kadûk/ (一杯に : 11)	툭 /t'uk/ (ぶつっと : 11)
버럭 /pôrôk/ (かっと : 10)	

また、第2章の§2.5.2.2.1.2で見たように韓国語には反復動作を表わす用言を作る語尾「-거리다」/kôrida/があり、これは通常、非反復形のオノマトペに付く。そのために、日本語ならば普通反復形オノマトペで表現される様態が韓国語では単一形式で表わされることになる。これも、韓国語で反復形オノマトペの使用頻度が低くなる要因の一つになっていると考えられる。資料の中にも次のような例がかなり含まれている。

(19) 굵신-거리다	ぺこぺこする	꿈벅-거리다	ばちばちする
두근-거리다	ドキドキする	두리번-거리다	きよろきよろする
따끔-거리다	ちくちくする	반짝-거리다	きらきらする

3.1.3 意味

次に、日韓両語の反復形オノマトペを意味の面から検討する。すでに第2章の§2.4.1で、反復形には、同音の繰り返しが音や動作の繰り返しを表わすという形態象徴の働きがあることを指摘した。本節では、反復形の象徴的意味機能をさらに詳しく例証し、この面においても日韓両語のオノマトペは極めて類似していることを示す。

意味を厳密に区分することは難しい作業である。比較的意味区分がはっきりしている例に基づき敢えて《反復・継続》、《複数性》、《強調》に分けるが、境界は曖昧で用例によっては多様に解釈できる場合も多い。

3.1.3.1 反復・継続

同一の要素を単純に反復するという完全反復形の構造が、音や声、動作や事象の反復・継続を象徴的に表わすのはごく自然なことである。完全反復形オノマトペの使用例の大半はこの意味で用いられる。

擬声語・擬音語の場合、反復形は声や音の反復を意味する。

- (20) a) 滅多にゲートルもはかず、朴歯でガラランガランと歩いていた。『青春記』
 …犬が自分の突っかけて来た下駄をがりがりと齧っているのが目に入ったからである。『吉里吉里』
 錆びているせいか、ハサミを動かすたびに、キュッキュと悲しげな音がする。『航海記』
 古橋はぐうぐうと鼾をかいてカメラの前で眠ってしまい…『吉里吉里』
 佐藤がけたけたと笑い出したが、その笑い声は途中で凍りついたようになって止んだ。『吉里吉里』
 出港して二日目、もう新米のボーイが廊下にうずくまってゲロゲロやっており、私はまだ何ともないのでチョッピリ自信がついた。『航海記』
 土から抜いたばかりなのを葉のたわしでごしごしやって、しゃがんだ足ものと竹ざるに放りこむ。『森』
 彼はゴソゴソ腰掛の下を探して救命具をとりだしてくれたが…『航海記』
 …赤黒い血をどくどく吐き鼻をくんくん鳴らして死んでしまうのだった。『なめとこ山』

…そいつが船の傾斜につれてザブンザブンと波打っている。『航海記』

暗いうねりが静かに船体をゆらし、舷側はかすかにピチャピチャいう音を立てている。『航海記』

…目を赤く腫らし、咽喉(のど)をぜいぜい鳴らしながら…『吉里吉里』

…夜ヒュウヒュウという正体のわからぬ妖しき音がしたそうである。『航海記』

…ところがそうなくてもエンジンの奴ゴトゴトゴト一向にとまらないんだね。『航海記』

…右から左へ、あるいはその逆へ、鶏たちがココココと鳴きながら横切る。『吉里吉里』

b) 깔깔 웃으며 깊은 소나무 숲으로 깡충깡충 뛰어갔습니다. (からから笑って深い竹藪へとびよんびよん跳んで行きました。)『童話』

환유도 다른 수건으로 빗물이 똑똑 떨어지는 머리를 닦았다. (ファニユも別のタオルで雨水がぼたぼた落ちる頭をふいた。)『手紙』

아무렇지도 않은 듯이 물을 벌컥벌컥 마셨습니다. (何でもないかのように水ががぶがぶ飲みました。)『童話』

학교 수위들은 물론 교통 경찰까지 나와 차량을 통제하느라 호각을 삑삑 불어대고 있었다. (学校の守衛さんたちはもちろんのこと交通警察まで出て来て、笛をびいびいと吹いて車を規制していた。)『手紙』

그리고는 안경을 벗어 바지에 쓱쓱 문질렀다. (そして眼鏡を外してズボンですっすっとこすった。)『手紙』

정인은 이제 엉엉 소리내어 울기 시작했다. (チョンインはもうわんわんと声を張り上げて泣き始めた。)『手紙』

…총각은 어느 큰 대문을 광광 두드렸습니다. (…若者はある大きな門をどんどん叩きました。)『童話』

환유의 손가락이 발가락 사이를 문지르자 정인이 발가락을 꿈지락거리며 키키 웃었다. (ファニユの指が足の指の間をこするとチョンインは足の指をゆっくりとしきりに動かしながらくすくすと笑った。)『手紙』

멀리서 보니 호랑이가 얼음 위에 주저앉아 움직이지도 못하고 깡깡거리고 있었습니다. (遠くから見ると、虎が氷の上に座り込んで動くこともできずうんうんうなっていました。)『童話』

창밖에 머문 환유의 시선을 쫓던 연구원 성권이 갑자기 호호호 웃기 시작했다. (窓の外に止まったファニユの視線を追っていた研究員のソンゴンが突然ふふふと笑い始めた。)『手紙』

(20a)の「ガランガラン」、「がりがり」、「キュッキュッ」は、それぞれ「下駄ばきで歩く音」、「ものをかじる音」、「錆びたはさみのきしむ音」を表す擬音語であるが、いずれも1回限りの音ではなく何度か反復される音を表している。これを「ガラン」、「がりっ」、「キュッ」のような単一形にしたのでは文脈に合わない。語形の反復回数は2回が基本であるけれども、これは現実の音や声の反復回数

が2回であることを意味するものではない。(20a)の例のどれに関しても現実音の反復回数は2回よりも多いと考えられる。現実音が何度も反復されることを明示あるいは強調する場合には、(20a)の最後の2例のように3回以上の反復形式を用いることもある。韓国語の例についても同様で、(20b)の例はいずれも反復された音や声を表している。「갈갈」/kkal-kkal/(からから)は日本語の「からから」と同様に実際の笑い声との有縁性がかなり低い表現であり、また、決して単一形では用いられない語であるけれども、反復形式に快活な笑い声が何回か繰り返されることを表している。「똑똑」/ttuk-ttuk/(ぼたぼた)と「벌컷벌컷」/pôlk'ôk-pôlk'ôk/(がぶがぶ、ごくごく)は単一形も可能な擬音語であるが、単一形であれば水滴が1回だけ落ちることあるいは水をごくりと一息に飲むことを表し、反復形はその音が何度か反復されることを表す。

人や動物の動作には、歩くこと、走ること、食べること、まばたきをすること、首や手を振ること、体を震わせること、搔いたり摩ったりすることなど、単純なしぐさが反復的に繰り返して構成されるものが多い。また、自然界の事象にも、物が揺らいだり、光などが点滅することなど、反復的なものがある。このような反復的に繰り返される動作や事象の様態を表わすのに反復形の擬態語が効果的に用いられている。

(21) a) ユーイチ小松はすっかり舞い上がってしまい、軀を慄わせ、膝をかくかくさせているのだった。『吉里吉里』

そのとき歯医者(まわり)を落ち着かぬ目付できよるきよる眺めまわしてから小声でこう答えた。『吉里吉里』

…気体とも液体ともつかぬ得体の知れないものが、く、く、くとこみあげてきた。『吉里吉里』

…肩から下げたトランジスタの音楽に合わせてくねくね軀をくねらせながら歩き…『吉里吉里』

…四方の風景を映したシャボン玉がくるくると回ってパッと散ると…『航海記』

少年刑事は店の内部(なか)をぐるぐる小熊のように歩き廻った。『吉里吉里』

そんなちっこい彼女がチョコチョコ店頭の雑踏の中を走りまわっているさまは…『航海記』

…카바のごとく甲板をノソノソ歩きまわり…『航海記』

…一匹の黒い鳥がピョンピョン跳ねて私の行くほうへついてくる。『航海記』

古橋は背広の内隠しから乗車券を出し、ジャンパー男の目の前でひらひらと振った。『吉里吉里』

聞いているうちに古橋は感動のあまりぶるぶる震え出した。『吉里吉里』

二十人前くらいのサシミのとれる肉片が、惜しげもなくぼいぼいと海中に投げ捨てられる。『航海記』

山下蕭雨が駅の売り場で買ってくれたあんパンを、時遅れのお昼飯代りにベンチに並んでむしやむしや食べた時…『森』

カモが道端にいて、人が近づいても恐れず、ヨチヨチ白い土手を下りてゆく。『航海記』

b) 깊은 바다 밑에서 온 의사는 오랜시간 진찰을 하더니 고개를 가웃가웃 했습니다. (深い海の底から来た医者(イ)は長時間診察(ニ)してから首(ヲ)をしきりに傾(カ)げました。)『童話』

홍부는 허리를 굽신굽신 하면서, "형님, 날은 춥고 벌이할 것도 없으니 어디 먹을 것이 있어야지요. (フン(ニ)はぺこぺこしながら、「お兄さん、外(ニ)は寒い仕事(ニ)もないから食べ物(ニ)がありません。」)『童話』

상점 안을 기웃기웃 들여다보다 그 안에 들어가서는 이것저것 주물럭주물럭 했습니다. (店(ノ)の中(ニ)をしきりに覗(ノ)き込んで、中(ニ)に入ってあれこれしきりにいじりました。)『童話』

저 편 싸리덤불 밑으로 무엇인지 깡충깡충 뛰어나는 것을 보았습니다. (あちらの萩(ノ)のやぶ(ノ)の下(ニ)へ何か(ニ)がびよんびよん跳ねていくのを見ました。)『童話』

덕보는 선비의 말을 듣고 고개를 끄덕끄덕 했습니다. (トクボ(ニ)は学者(ノ)のことば(ヲ)を聞いてしきりにうなずきました。)『童話』

그 자리에서 춤을 덩실덩실 추며 그 금덩어리를 들고 어쩔 줄을 몰라했습니다. (その場でひよいひよい踊りながらその金(ノ)の塊(ヲ)を持って非常に喜びました。)『童話』

두리번두리번거리다가, 눈에 잘 띄는 나뭇가지 위에 걸어놓았습니다. (きよろきよろして、目立(ツ)つ枝(ノ)の上(ニ)に掛(ケ)ておきました。)『童話』

눈앞이 캄캄해지며 온몸이 부들부들 떨렸습니다. (目の前(ニ)が真(マ)つ暗(カ)になり全身(ノ)がたがたと震(ユ)えました。)『童話』

정인은 비틀비틀 걸어 침대로 갔다. (チョンイン(ニ)はふらふら歩いてベット(ニ)に行った。)『手紙』

…늙은 생원님 한 분이 뒷마루에 걸터앉아 담배를 빠끔빠끔 피워대며 밖을 내다보고 있었습니다. (…年老(ニ)いた儒者(ノ)が一人(ニ)、縁側(ニ)に座(カ)ってタバコ(ヲ)をぶかぶかふかしながら外(ヲ)を見ていました。)『童話』

그 사람은 도둑질을 하려고 들어 온 도둑으로 성큼성큼 큰 걸음으로 마약 마당에 들어서는데 순간이었습니다. (その人は盗(ヌ)み(ヲ)を働(カ)こうと入(イ)って來(ク)た泥棒(ニ)で、つかつかかと大股(ニ)で歩いてちようど庭(ニ)に入(イ)ってくるころでした。)『童話』

밤이 되자, 호랑이는 먹을 것을 찾으러 어슬렁어슬렁 마을로 내려왔습니다. (夜(ニ)になると、虎(ニ)は食べ物(ヲ)をさがしにのそのそと村(ニ)に下(カ)りて來(マ)ました。)『童話』

그러더니 저벅저벅 방문 앞으로 걸어와서, "영감님, 그럼 함께 얘기나 나눌까요?" (そうしてのっしのっしとドア(ノ)の前(ニ)まで歩いて來(マ)て、「あなた、それ(ニ)じゃ一緒に話(シ)てもしましょうか。」)『童話』

바보는 다시 걸뚝걸뚝 다리를 절며 박서방을 따라갔습니다. (바카は再びびっこを引きながら朴さんについて行きました。)『童話』

인문관 앞 언덕길을 터벅터벅 걸어 거의 다 내려왔을 때쯤이었다. (人文棟の前の坂道をとほとほ歩いてほほ下りきろうとした時だった。)『手紙』

이 당나귀는 펼쩍펼쩍 도망다니다가 그만 어느 집으로 쑥 들어가 버리고 말았습니다. (로바はびよんびよんと逃げ回ってある家にすっと入ってしまいました。)『童話』

例えば、(21a)の「がくがく」、「きよろきよろ」、「ぐ、ぐ、ぐ」は、それぞれ、膝が小刻みに反復的に震えるさま、視線をあちこちに反復的に巡らすさま、胃の中から何かが繰り返して込み上げるさまを反復形式によって象徴的に表している。韓国語の例についても同様で、(20b)の「가웃가웃」/kyaut-kyaut/、「굽신굽신」/kupshin-kupshin/、「기웃기웃」/kiut-kiut/、「깡충깡충」/kkangch'ung-kkangch'ung/は、それぞれ、何度も首を傾げるさま、繰り返してお辞儀をするさま、何度も覗き込むさま、反復的に飛び跳ねるさまを反復形態によって象徴的に表したものである。

(21)の例のように明確に反復とは意識されないけれども、ある音声や動作や現象などが1回限り瞬時的に生じるのではなく継続的、持続的に生じていることを示すのにも、反復形のオノマトペが用いられる。

(22) a) 飯を食べながらいつの間にかトロトロ居眠りをしている。『航海記』

薄まっているので大したことはないが、それでも目がチクチクする。『航海記』

私はオーバーのかくしに手を入れて、一人せかせかと獣(けもの)たちを見てまわった。『航海記』

…ギラギラ照りつける熱帯の太陽の下で何時間も待ちに待ち…『航海記』

夕刻やっと走りだし、翌日は丸一日のろのろと動いたり、とまったり、霧笛を鳴らしたりして、ようやく…『航海記』

…毎日の遠い通学が、めそめそ泣いたりのゆとりを失わせたためともいえるだろう。『森』

二時すぎごろ、ウトウトしていた私は、けたたましい物音で目が覚めた。『航海記』

…一年まえから出戻りで家にぶらぶらしていたのだから、ちよどな仕事と見なされたのである。『森』

ところが家の前には会社にいるはずの佐藤がにやにやしながら立っていたのだ。『吉里吉里』

古橋は口の中でぶつぶつ呟いたが、これは文句をいうほうが間違っている。『吉里吉里』

煙突もついていて、そこからはもくもくと黒煙が上がっている。『吉里吉里』

その岩塩のような砂糖の塊を口の中に入れ、舌先でころころと巧みにころがしながら紅茶を一口すすります。『生きる』

b) 눈물이 글썩글썩하여 애원하였습니다. (目をうるうるさせながら頼みました。)『童話』

자리에서 꾸물꾸물 일어나 나박 김치를 훔쳐 먹을 생각으로 밖으로 나갔습니다. (その場からぐずぐず起き上がってキムチを盗んで食べるつもりで外へ出た。)『童話』

환유가 빙글빙글 웃으며 말했다. (ファニユがにこにこ笑いながら言った。)『手紙』

정인이 방실방실 웃으며 물었다. (チョンインはにこにこ笑いながら尋ねた。)『手紙』

호랑이는 그 때서야 토끼에게 속은 것을 알고 이를 부드득부드득 갈며 도망쳐 나옵니다. (虎はその時ようやくウサギに騙されたのを知って、ぎりぎり齒ぎしりをしながら逃げ出しました。)『童話』

바보의 아버지는 농사일이 너무 바빴기 때문에 일도 할 줄 모르고, 빈둥빈둥 돌아다니며 실수만 저지르는 바보 아들을 대신 보내기로 했습니다. (バカの父は農業があまりにも忙しかったため、仕事もできずぶらぶら歩き回って失敗ばかりしかすバカ息子を代りに行かせることにしました。)『童話』

다른 학생들 또한 이 상황이 재미있는지 생글생글 웃으며 정신의 얼굴을 뻗히 쳐다보고만 있었다. (他の学生もまたこの状況が面白いのかにこにこ笑いながらチョンインの顔をじろじろ眺めるだけだった。)『手紙』

…나뭇잎 떨어지고 바람이 선들선들할 때 상수리나 도토리 따위를 주워 먹으려고 낙엽을 헤치노라면 사나운 길짐승은 주위에서 서성이고… (…葉っぱが落ちて風がそよそよ吹く時、クヌギやどんぐりなどを拾って食べようと落葉をかき分けると…)『童話』

멧돼지는 여우를 보고 싱글싱글 웃었습니다. (イノシシはキツネを見てにこにこ笑いました。)『童話』

그런데 그 다음 날은 반갑게도 굵은 장대비가 주룩주룩 내렸습니다. (ところがその翌日はうれしいことに雨がざあざあと降りました。)『童話』

…전우치는 왕연희의 머리에 개의 피를 획 뿌리고 중얼중얼 주문을 외었습니다. (チョヌチはワンヨニの頭に犬の血をさっかけてぶつぶつ呪文を唱えました。)『童話』

정인은 빼낸 사진을 차곡차곡 묶고는 다시 침대 옆으로 가 티셔츠 옆에다 그것을 놓았다. (チョンインは取り出した写真をきちんきちんと束ねて再びベッドのそばに行きTシャツのそばにそれを置いた。)『手紙』

겨울 숲에 핑핑 눈이 쏟아져 내렸다. (冬の林にしんしんと雪がふりそそいだ。)『手紙』

(22a)의 최초의 예의 「とろとろ」는 居眠りをしている 様子を 表す 擬態語 である が、「こっくりこっくり」のように 反復的な 動作を 伴う のでも 「ぐうぐう」 のように 反復的な 音(いびき)を 伴う のでも なく、ただ、 気持ちよさそうに 眠っている

状態を表したものである。第2例の「ちかちか」は痛みを表すオノマトベの1つである。同じ痛みを表すオノマトベでも「ずきずき」、「ずきんずきん」、「がんがん」、「しくしく」などは脈拍の影響で強弱が感じられ反復的だと意識される痛みを表すのに対して、「ちかちか」や「ひりひり」、「きりきり」などは反復的というよりは持続的と感じられる痛みを表している。反復性と持続性・継続性は周期性や強弱のアクセントのあるなしという点で異なるけれども、一回性・瞬時性に対立するという点では共通点がある。この共通点に従って、反復形式が持続・継続の意味にまで拡大して用いられていると考えられる。

韓国語の例についても同様である。(22b)には「빙글빙글」/pinggûl-binggûl/、「방실방실」/pangsil-bangsil/、「생글생글」/sængûl-sængûl/、「싱글싱글」/singgûl-singgûl/など日本語の「にこにこ」に該当する擬態語が含まれているが、¹⁰ これらのオノマトベが表わす意味はにこやかに微笑んでいる状態であって、決して動作や状態の反復ではない。微笑みが反復的に行われるとしたら非常に不気味なものになるであろう。にこやかに微笑んだり真顔になったりの繰り返しを「にこにこ」やそれに該当する韓国語のオノマトベで表わすことはない。1度だけ瞬時的ににこやかに表情を崩す場合には、日本語では「にっこり」や「にこっ」、韓国語では「빙그레」/pinggûre/や「방시레」/pangsire/などのような単一形オノマトベで表わされる。

さらに、つぎのような気分や感情など精神的状態を表わす擬情語も、反復形によって継続・持続が象徴されているものと考えることができる。

- (23) a) …いつまた再発するかわからないので私はビクビクしていた。『航海記』
 …万引と間違えられはせぬかとドキドキし…『航海記』
 馴れないうちは加根は吐きそうにむかむかした。『森』

¹⁰ これらの変異形については、第2章の§2.6.2を参照。

…ばあやのむらむらは年齢にはかかわりなく、いっその点にあった。『森』

コラ船、これ以上傾きやがったらそれこそ只ではおかないぞ。今でさえ俺はもうカンカンだぞ。『航海記』

- b) 큰아들은 너무도 놀라 가슴이 두근두근해서 말에게로 다가가 보았습니다.
(長男はとても驚いてときどきしながら馬に近づいてみました。)『童話』

학기중이면 학생들이 여기저기 테이프로 선을 그리고는 족구며 농구 따위를 하느라 늘 시끄러웠고, 그래서 아슬아슬 다닐 수밖에 없던 곳이었다. (学期中であれば学生があちこちにテープで線を引いてサッカーやバスケットなどをしていつもうるさく、そのためはらはらして通わざるを得なかった所だった。)『手紙』

어안이병병해진 정수가 쭈뼛쭈뼛 뒷걸음질로 자신의 방을 향했다. (呆氣にとられたチョンスがもじもじ後ずさりで自分の部屋に向かった。)『父』

最後に、《反復・継続》から派生する意味として、動作や事象が進行するという意味を表わす場合がある。

- (24) a) 三勇士の肩越しにヘリコプターの編隊がぐんぐんこっちへ近づいてくるのが見えた。『吉里吉里』
甲板では操業の準備がぼつぼつ始められている。『航海記』
またワインを飲み、そろそろ頭がまわってきて猛烈な勢いでジルバなどを踊った。『航海記』
- b) 우리가 사랑하는 만큼 그 나무들도 쑥 쑥 자라날 거예요. (我々が愛すれば愛するほどその木々もすくすく育つでしょう。)『手紙』
영훈이는 무럭 무럭 잘 자라고 있다. (ヨンフンはすくすく育っている。)『手紙』

3.1.3.2 複数

《反復・継続》は同一主体による動作や事象などが時間的に反復・継続されることを意味するのであるが、複数の主体による動作・事象を表わすのに反復形オノマトペが使われていると解釈できる場合がある。

- (25) a) するとみんなぼちゃんぼちゃんと一度に水にすべって落ちました。『風の又三郎』
古橋たちの前を、奇妙な風体をした五人組がきゃっきゃつ笑い声を立てながら歩いていく。『吉里吉里人』
…一人が吐きだすと安心してしまい、我も我もとゲロゲロやるそうだ。『航海記』

クラスじゅうが声をそろえ、がやがや叫んだ。『森』

泡立つ白波の間にちかちかと夜光虫が燐光をちりばめている。『航海記』

そのたびに彼等の頭上に白い紙切れが、あるときは蝶のようにひらひらと、またあるときは花瓣(はなびら)のようにはらはらと舞った。『吉里吉里』

パリにはもっと変ちくりんな連中がウヨウヨしているから、少々のことでは誰もおどろかない。『航海記』

あちらこちらからそろそろと蟻のように人間が出てくる。『航海記』

今の世でこそ男だか女だかわからない連中はごろごろしているが…『青春記』

…十数匹がばらばらと群がって飛びたつときは…『航海記』

- b) 주먹밥을 다 꽃아놓고 멀리서 바라보니 주렁주렁 달린 것이 꼭 열매처럼 보였습니다. (おにぎりを全部付けて遠くから見ると、鈴なりにぶら下がっているのがまるで実のように見えました。)『童話』

…멧돌에서는 하얀 소금이 꾸역꾸역 나오기 시작했습니다. (…石臼から白い塩がぞくぞくと出て来ました。)『童話』

그 시절에는 산마다 호랑이들이 우굴우굴 했습니다. (その時分には山に虎がうようよいました。)『童話』

옛날 도깨비가 득실득실 하던 시절의 이야기입니다. (昔、鬼がうじゃうじゃいた時の話です。)『童話』

질은 안개 사이로 희끗희끗 키 큰 나무들의 머리가 나타났다가는 사라지곤 했다. (濃い霧の間から白く点々と大きい木々の頭が現われては消えたりした。)『手紙』

…어디선가 많은 사람이 지껄이는 듯한 시끌시끌한 소리가 들려왔습니다. (…どこからか多くの人が騒ぐがやがやとした声が聞こえて来ました。)『童話』

박이 평하고 갈라지면서 뽀죽뽀죽한 몽둥이를 들은 도깨비들이 튀어나왔습니다. (瓢箪がぱーんと割れてつんつん尖った棒を持った鬼たちが出て来ました。)『童話』

땀에 젖어 번득이는 정인의 뺨과 이마 위에는 흘러내린 머리칼이 찍찍 달라붙어 있었다. (汗が滲んで光るチョンインの頬と額の上には落ちて来た髪の毛がべたべたくっ付いていた。)『手紙』

허리를 펴고 곧게 쭉쭉 뻗은 나무들이 숲을 가득 매우고 있었다. (腰を伸ばしてまっすくにすっと伸びた木々が森を一杯に埋めていた。)『手紙』

쓰러진 돌부처가 서 있었던 자리 밑에 번쩍번쩍 빛나는 금은보화가 잔뜩 숨겨져 있었습니다. (倒れた石仏が立っていたところの下にぴかぴか光る金銀寶貨がたくさん隠してありました。)『童話』

《反復・継続》と《複数》は全然異なる意味のようであるが、明確に区別できない場合が多い。(25a)の最初の例の「ぼちゃんぼちゃん」は水に飛び込む音だけに注目するならば《反復・継続》ということになるであろうが、飛び込む主体に注目すれば《複数》を表わすと解釈できる。続く2例の「きやつきやつ」、「ゲロゲロ」についても同様である。次の例の「がやがや」は主体が単数である場

合には使いにくく、《複数》と解釈するのが妥当であると思われる。第5例の「ちかちか」は夜光虫が1匹だけならば《反復・継続》の意味にしか解釈できないが、文意から多数の夜光虫が主体となっていることは明らかであるから、《複数》を表わすと解釈することも可能である。第6例についても同様に、頭上に舞う紙切れが1枚だけならば《反復・継続》の意味にしか解釈できないけれども、文脈から察することができるように紙ふぶきの意味であれば《複数》の意味にも解釈できる。続く「ウヨウヨ」、「そろそろ」、「ごろごろ」、「ばらばら」は《複数》に解釈するのが最も妥当であろう。

韓国語の例(25b)は、ほとんどすべて《複数》の意味に解釈できると考えていいものである。ただし、最後の例の「번쩍번쩍」/pônchôk-pônchôk/(びかびか)は、日本語の「びかびか」の例と同様に《反復・継続》の意味にも解釈できる。

3.1.3.3 強調

また、次の例のような場合は《強調》の意味であると解釈できよう。

(26) a) 喋べる言葉にびりびりと毒がある。『吉里吉里』

学生時代、ラグビーで鍛えたという佐藤のごつごつした広い肩へ古橋は顎をしやくって…『吉里吉里』

すると受話器の向うから、きびきびした声でこう名乗るのが聞えてきた。『吉里吉里』

…犬もへとへとにつかれ小十郎も口を横にまげて息をしながら、半分くずれかかった去年の小屋を見つけた。『なめとこ山』

…やはりそのことを気にして本の中でクドクドと注釈しているそうである。『航海記』

ここまできの汽車は埃だらけの上にガタガタでかなり参ったという。『航海記』

…選りに選って耶蘇教の学校にいたでは、申訳がない、とくどくどいうのに対して、加根は精いっぱい理屈をこねた。『森』

このまま放っておくと泥鰌髭の主人の顔が茹で過ぎでぐちゃぐちゃになってしまう。『吉里吉里』

その代り憎しみをこめてズタズタに切り裂き、海に捨ててしまう。『航海記』

寒くなればごわごわの作業ズボンにトックリ首のセーターである。『航海記』

ぼさぼさの頭の瘡せた中年男がよく透る声で若い男を元気づけている。『吉里吉

里』

従ってこんなものは早く溶かしてしまっ、もっと巨大な小便小僧を鑄造し、ガチガチの婦人教師を颯颯(ひんしゆく)させた方がどれほどマシかわからない。
『航海記』

…兵隊の方は大変ガツガツしていて、一人でパンなどをとり寄せてむさぼり食っている。『航海記』

コラ船、これ以上傾きやがったらそれこそ只ではおかないぞ。今でさえ俺はもうカンカンだぞ。『航海記』

こちらは汽車の時間がぎりぎりだし、言葉は通ぜぬし、気が気でなかった。『航海記』

この三日間でクタクタの上に少し酔っぱらっている私には感慨なんて起りようがなかった。『航海記』

その紙片はもうずいぶんクシャクシャで…… 『航海記』

焼きたてのほやほやを届けなければならないから。『森』

b) 이것은 뜨끈뜨끈한 아랫목에 이불을 썬워, 한 삼십일 가량 그대로 놔두면 저절로 깨어납니다. (これはほかほかのオンドルの部屋にふとんをかぶせて、30日くらい置いておくといつてかえります。) 『童話』

…무우와 배추를 납작납작하게 썰어놓고 국물 맛이 시콤새콤한 것이 무엇이야? (…大根と白菜を平べったく切ってあって、スープの味が酸っぱいのは何だね。) 『童話』

조카 앞에 풀어놓았던 금덩어리를 보자기에 꼭꼭 찌습니다. (姪の前に出した金塊を風呂敷きにぎゅうぎゅうに包みました。) 『童話』

비실비실한 것들만 골라 사자에게 보냈습니다. (よろよろしたものだけ選んでライオンに送りました。) 『童話』

이렇게 생각하고 부랴부랴 산을 내려왔습니다. (そう考えて大急ぎで山を下りて来ました。) 『童話』

정말 어마어마하게 큰 호랑이군! (本当にものすごく大きい虎だな。) 『童話』

번질번질한 머리가 깜깜한 밤에 보면 마치 목침같이 보였습니다. (びかびかする頭が真っ暗な夜に見ると、まるで木枕のように見えました。) 『童話』

어느 새 이 바보는 물렁물렁하다는 말을 잊어버린 것입니다. (いつの間にかこのバカはぶよぶよだという言葉을忘れてしまったのです。) 『童話』

호랑이의 꼬리는 그만 얼음에 꽂꽂 얼어 붙어버렸습니다. (虎のしっぽはかちかちに凍ってしまいました。) 『童話』

박박 밀어 둥그런 환유 머리 위에는 눈으로 셀 수 있을 만큼 적은 수의 머리칼이 이끼처럼 돌아나 있었다. (髪を短く刈って丸いファニユの頭の上には数えられるくらい少ない髪の毛がこけのように生えていた。) 『手紙』

《強調》というのは多少注意を要する概念である。これは本来、強調形と非強調形(普通形)との対立を前提とする概念である。つまり、ある形式が強調形であると言うためには、それと意味を同じくする別な形式が存在し、前者は後

者の意味を何らかの点で強めているという関係が成立しなければならない。このような観点から(26a)の例を見ると、最初の2例の「びりびりっと」と「ごつごつした」は明らかに強調形である。これらは、それぞれ、「びりっと」と「ごつごつした」に対応し、ある意味でその意味内容を強めていると考えられるからである。一方韓国語の例(26b)の中では、最初の3例の「뜨끈뜨끈하다」/ttûkkûn-ttûkkûn-hada/(ぽかぽかとしている)、「납작납작하게」/napchak-napchak-hage/(平べったく)、「꼭꼭」/kkok-kkok/(ぎゅうぎゅう)は明確な強調形である。これらはいずれも派生的な反復形であり、それぞれ、「뜨끈하다」/ttûkkûn-hada/(非常に熱い)、「납작하게」/napchak-hage/(平たく)、「꼭」/kkok/(ぎゅうつと)のような単一形に対応し、その意味を強めた表現であると考えられるからである。しかし、(26a, b)のその他の反復形オノマトペには対応する単一形式のオノマトペはないから、これらを明確に強調形であるとは言い難い。しかしながら、これらの表現が反復形という形式を取っている背後には何らかの象徴的意味が感じられることも否定できない。その意味が《反復・継続》や《複数》であるとは考えにくいし、特別な意味範疇を設けることも適当であるとは思われない。そして、明確な強調形の場合と象徴的意味の点で大きく異なっているようには思われない。したがって、対応する非強調的表現を欠いてはいるけれども、これらもすべて《強調》の意味を表わすものとして分類することにする。言わば、架空の非強調形(普通形)に対する強調形とみなすのである。

3.1.3.4 類音反復形

(7)に挙げたような類音反復形の象徴的意味についても日韓両語のオノマトペは類似性が高い。類音反復形は同一の要素を反復するのではなく音の一部を変えて反復するものであるから、「多様であること」、「均質でなく不揃いであること」、「整然としていないこと」などの象徴的意味が生じると考えられる。

日本語では、「ちらほら」、「ぎくしゃく」、「ちぐはぐ」、「あべこべ」、「べちゃくちゃ」、「つべこべ」、「うろちよろ」、「のらくら」、「どたばた」、「てきぱき」、「めちゃくちゃ」、「ちやほや」などが何らかの点でこのような語感を伴っている。韓国語では「울긁불긁」/ulgût-bulgût/(色とりどりに)をはじめとして(12)、(13)に挙げた類音反復形の多くが同じ象徴的意味を持っている。

類音反復形は、何らかの意味で混乱した心的状態を表わすのにも用いられる。日本語の「あたふた」、「やきもき」、「どぎまぎ」、「へどもど」、「むしゃくしゃ」などがこの類である。韓国語にも、「허겁지겁」/hôgôp-chigôp/(あたふたと)、「허둥지둥」/hôdung-jidung/(あたふたと、あわてて)の他に、「안달복달」/andal-boktal/(やきもき)、「안절부절」/anjôl-bujôl/(そわそわ)、「옥신각신」/okshin-kakshin/(あだこうだと)、「엄병덤병」/ômbông-tômbông/(あたふたと)、「외쭉비쭉」/wæchuk-pitchuk/(ちょっとしたことで腹を立てて口をとがらすようす)、「우글부글」/ugûl-bugûl/(ぶつぶつと)などがある。

以上、日本語と韓国語の反復形オノマトペを形態、分布・使用頻度、意味の観点から検討したが、いずれの面においても両者は非常によく似ている。形態的には、共に完全反復形、類音反復形、部分反復形に区分される。反復形はオノマトペ語彙の中心的地位を占め、使用頻度も非常に高い。意味の面では、《反復・継続》、《複数》、《強調》に用法が区分される。第2章の末尾に述べたように、体系全体を見れば、日韓両語のオノマトペはほとんど同型であると言っても差し支えないほどに酷似している。そこで当然生じる疑問は、なぜ似ているのかということである。反復形オノマトペの類似性に関して、この疑問に迫る鍵はオノマトペ以外の表現、一般表現の反復形にあると考えられる。

3.2 一般表現の反復形

日本語においても韓国語においても、反復という表現形式はオノマトペだけに限られるものではない。一般表現の中にも反復形式が多様かつ豊富に用いられている。そして、反復形オノマトペの種々の性格は、この一般表現の反復形と密接な関係があると考えられる。

本章の趣旨を最も端的に表わしていると思われる資料の引用から議論を始めたい。

- (27) そのときのことをすこしく詳説するに、仙台平野をどンドン走っていたわが急行列車が急にがたんがたんと停車したのが事件のはじまり。すぐに車内に吉里吉里国の税関吏と称する連中がどやどやと入ってきて、私どもがあれあれと驚いている間に、ものものしくも鉄砲などを擬し、きらきらと目を輝かせて、ぐちゃぐちゃとわけのわからぬ言葉で、

「どぐりつどぐりつ」

と言ったから仰天してしまった。

私どもががたがた震えていると、吉里吉里人たちは、「さあさあ 降りる降りる。みんなを出入国管理令違反で逮捕逮捕」

と叫び、ばんばんと鉄砲さえもぶっぱなした。

私どもはそこから吉里吉里の中心地にある密入国者収容所までてくてく歩かせられ、そこでひとりひとり調べられた。

この間における私どもの気持ちといたら、それはそれは 不安で不安で、頭は がんがん痛み、冷汗は たらたら流れっぱなし。そのほか心臓は ときどき、足の裏は ずきずき、睡眠不足で 俺はびくびく、口のなかは からから、腹は ぺこぺこ。おのおのがみなどともに、おずおず、おどおど、おろおろ、がたがた、がちがち、がやがや、恐々兢兢、くよくよ、ぐずぐず、けんけん、かくかく、こわこわ、さわさわ、しおしお、しくしく、そわそわ、うろうろ、ちよろちよろ、びくびく、ぶつぶつ、といった有様で、この、おずおず、おどおど、おろおろ、がたがた、がちがち、がやがや、恐々兢兢、くよくよ、ぐずぐず、けんけん、かくかく、こわこわ、さわさわ、しおしお、しくしく、そわそわ、うろうろ、ちよろちよろ、びくびく、ぶつぶつは、いまだに継続しているのである。

このあと事件がどういう進展をとげるのか、私は神ではないから せんせんわからない。ただ、一人の作家として、吉里吉里の すみすみまで こまこまと目を配るつもりである。そのためには 歩きまわらねばならぬ。いそいそと、ぐんぐんと、すたすたと、こそこそと、ちょちょと、つかつかと、てくてくと、どかどかと、のそのそと、ばたばたと、ばたばたと、ふらふらと、またぶらぶらと、東へ西へと歩きまわって、すべてをこの目でたしかめなくてはならぬ。

そしてこの目でたしかめたことを、どンドン すらすら すいすいと書かねばなら

ぬ。そこにしか作家としての自分の生きる道はないと思うからである。
これからの私の書くものについて、ぜひぜひご注目をいただきたい。¹¹

この引用箇所は、主人公の三文文士が書いた新聞記事の原稿という設定で、作家井上ひさしが持ち前の語彙力とユーモアの感覚を発揮して、大いに面白おかしく誇張して書き上げているくだりである。ここにはオノマトベ(下線部)がふんだんにちりばめられている。数えてみると実に48種65個に及んでおり、そのすべてが反復形式である。もちろんこれは通常の文章ではなく、あくまでも誇張された文章ではある。しかしながら、何が誇張されているのかと言えば、オノマトベが豊富であるという日本語の特徴が誇張されているのである。

引用例(27)が端的に示しているように、反復形式はオノマトベの重要な特徴の1つであるけれども、それは決してオノマトベだけの特徴ではない。一般表現、つまりオノマトベ以外の表現においても反復形式が頻繁に用いられている。韓国語においても事情はほとんど同じで、以下に示すように、一般表現の反復形式が日本語とほぼ同様の文体的効果と意味機能を担って頻繁に使われている。しかも重要なことは、一般表現の反復形式と反復形式のオノマトベは、文体的効果においても意味機能においても、かなり重なり合っているという事実である。(27)の引用例は、一流作家の感性が両種の反復表現が性質上同質のものであることを敏感に感じ取った結果ではないかと考えられる。従来、この点が見過ごされていたとは言えないにしても、少なくとも、オノマトベの発達との関連でその事実の意味が論じられたことはなかったように思われる。

以下、日本語と韓国語の一般表現に見られる反復形式を意味別に分けて検討する。反復形オノマトベの場合と同様、一般表現の反復形式の持つ意味を明確に分類することは容易ではない。しかしながら、すべての反復表現が不可分の

¹¹ 井上ひさし『吉里吉里人』pp.131-2；下線及び網掛けは著者

同じ意味であるとは思われない。典型的な場合を考えてみれば、明らかに幾つかの異なる意味機能に分類することが可能であると考えられる。したがって、同じ表現が文脈によっては異なる意味機能を持ち得ること、範疇間にある程度重複があること、あるいはどの意味に属するか明確ではない場合があることなどをことわった上で、一般表現の反復形式の意味機能を《反復・継続》《個別・分散・多様》《複数》《強調》の4通りに区分することにする。

3.2.1 反復・継続

日本語の一般表現に見られる《反復・継続》を表わす反復形式の例を資料から拾ってみると次のようなものがある。

- (28) …一本の樺の木がおれに何のあたいがあると毎日毎日土神は繰り返して自分で自分に教えました。『土神』
- 私のほうは、山城屋の屋根裏部屋に住み、毎度毎度、ドンブリに山盛りの飯を与えられた。『青春記』
- そして、夜な夜な裏山に登って行って、おおきな焚火を作り…『青春記』
- こどもがいるとこの通りですからね。いくら片附けたって、そばからそばからで。『森』
- 小十郎は谷に入って来る小さな支流を五つ越えて、何べんも何べんも右から左、左から右へ水をわたって溯って行った。『なめとこ山』
- …と後年になって母親は彼によく言い言いしていたものだが、真偽のほどは判明しかねる。『吉里吉里』
- …と前置きして、突っかえ突っかえ文面を読み上げた。『吉里吉里』
- 犬はもう息をはあはあし、赤い舌を出しながら走ってはとまり走ってはとまりして行った。『なめとこ山』
- だから何度もかわるがわる手にとって思案しているんじゃないの。『吉里吉里』
- 古橋と佐藤にトラキチ老人がおいでおいでをしている。『吉里吉里』
- これが太平洋だと堂々とした巨大な波が一定の方角から次々と押し寄せてくるそうである。『航海記』
- 煙草を一本ずつやっても、あとからあとから手がでてキリがない。『航海記』
- …一人が吐きだすと安心してしまい、我也我とゲロゲロやるそうだ。『航海記』

最初の3例は、それぞれ、「毎日」、「何べんも」、「言っていた」というように

単一形にしても、意味は変わらない。反復することによって「反復」の意味を強調しているものと解釈できよう。他の例は単一形式に置き換えることはできない。反復形オノマトペにも単一形式の交替形を持つものと持たないもの、つまり派生的反復形と本来的反復形とがあったが、一般表現の反復形にも同様のことがあるのは興味深い。

反復形が単なる反復や継続ではなく、次第に程度が増していくという「進行」の意味を表わす場合もある。

- (29) 土神はいろいろ深く考え込みながらだんだん樺の木の上に参りました。『土神』
次第々々に暑くなってくる。『航海記』
 これからは一年一年、おつきあいの範囲を狭めていこうと思っているのです。『生きる』
 よだかは、どこまでも、どこまでも、まっすぐに空へのぼって行きました。『よだかの星』
 …その小鹿のようだった彼女が日本に連れかえったころから見る見る太りだすのは見るも怖ろしいくらいである。『航海記』

最後の例は、後に述べる《強調》の意味であるとも解釈できる。

一方、韓国語では次のような例が《反復・継続》を表わす。

- (30) 정인의 두 눈이 조금씩 조금씩 젖어가고 있었다. (チョンインの両目が少しずつ 少しずつ濡れていった。)『手紙』
 휴지통에 처박히는 머리칼과 함께 내 몸 속의 생명이 한 움큼씩 한 움큼씩 빠져나가고 있는 거야. (ごみ箱に捨てられる髪の毛とともに私の体の中の命が一握りずつ 一握りずつ抜け出していくのだ。)『手紙』
 우리가 매일 매일 먹는 것들이 다 우리처럼 숨쉬고 아파하는 생명체라는 걸 생각하면 끔찍해. (我々が毎日毎日食べているものが全て我々のように息し痛みを感じる生命体だということを考えるとむごたらしい。)『手紙』
 인생은 거들 거들 새롭게 시작할 수 있어야 한다. (人生は何度も何度も新たに始められなければならない。)『山に花が』
 흐느낌에 파묻힌 그녀의 음성이 끊어질 듯 끊어질 듯 이어졌다. (すすり泣く彼女の声が消えるように消えるように続いた。)『父』
 어느새 또 자란 잡초처럼, 깎아도 깎아도 자라나는 성장의 의지는 슬프도록 위대한 것일세. (いつの間にかまた育った雑草のように、刈っても刈っても育つ成長の意思は悲しいほど偉大なものである。)『ことば』
 정인의 입가에는 터질 듯 터질 듯 웃음이 배어 나오고 있었다. (チョンインの口

元にはこぼれそうにこぼれそうに微笑みがにじんていた。)『手紙』

유리구슬의 투명한 색채와 필통 속의 연필과 가을이면 몇 번이고 몇 번이고 노랗게 물들다가 떨어지는 은행잎들… (ガラス玉の透明な色彩と筆箱の中の鉛筆と秋になれば何度も何度も黄色に染まって落ちる銀杏の葉っぱ…)『ことば』

하루 하루 한 달 한 달 쌓은 행의 축적이 마침내는 깨달음으로 드러나는 것이다. (一日一日、一ヶ月一ヶ月と積み上げた行の蓄積がついには悟りとして現れるのである。)『山に花が』

환유는 조심 조심 깨진 화분을 쓸어 담아 한쪽에 놓았다. (ファニユは氣を付けてながら割れた鉢を集めて隅に置いた。)『手紙』

韓国語の反復表現にもやはり、単一形に置き換えが可能なものとそうでないものがある。(30)の最初の2例では、「～ずつ」に対応する「-씩」/sshik/という接尾辞を含むので、「조금씩」/chogûm-ssik/(少しずつ)、「한 움큼씩」/hanumk'ûm-sshik/(一握りずつ)のように単一形にしても意味はほとんど変わらない。ただ、引用例のように反復形を用いれば反復の意味が強められるだけである。これに対して、(30)の残りの例は、単一形に置き換えられないか、置き換えれば反復の意味は持たなくなる。

次の例は、「進行」を表わす場合である。

(31) 정인의 두 눈이 조금씩 조금씩 젖어가고 있었다. (チョンインの両目が少しずつ少しずつ濡れていった。)『手紙』

얼굴을 덮은 정인의 두 손바닥이 차츰 차츰 붉어졌다. (顔を覆ったチョンインの両手がだんだん赤くなった。)『手紙』

정인은 관사에 있는 것이 점 점 불편하게 느껴졌다. (チョンインは官舎にいること가次第に気まずくなった。)『手紙』

나날이 변해갑니다. (日々変わっていきます。)『父』

《反復・継続》の意味で用いられるその他の反復表現を補うと、日本語については次のようになる。

- (32) a) 泣き泣き 泣く泣く 休み休み (汗を)かきかき
 書いては消し書いては消し 食っちゃ寝食っちゃ寝
 ちぎっては投げちぎっては投げ
- b) 毎度毎度 毎回毎回 毎月毎月 毎年毎年

- | | | | | |
|----|-------|--------|------|------|
| c) | 間間に | 合間合間に | 次々に | 道々 |
| | 度々 | 先へ先へと | 少しずつ | 少しずつ |
| | これでもか | これでもかと | | |

(32a)は動詞の連用形(あるいは終止形)が反復された形式である。ここに挙げた例はほとんどが慣用的な表現であるが、反復できる動作を表わす動詞であれば、原則としてこのパターンを使うことができる。(32b)は「毎」という造語成分を含む表現である。この種の語は単一形式でも《反復・継続》の意味を表わすが、反復形式になると反復性・継続性が強められることになる。ただし、「毎日毎日が大切です。」のような表現では、後述の「個別」の意味になると思われる。その他(32c)のような表現が《反復・継続》の意味に用いられる。

一方、韓国語については、他に次のような反復表現が《反復・継続》を表わすのに使われることが多い。

- | | | |
|---------|---------------|-------------------|
| (33) a) | 조금조금 (少しずつ) | 금방금방 (休みなく、立て続けに) |
| | 내리내리 (ずっと続けて) | 매일매일 (毎日毎日) |
| | 거꾸거꾸 (重ね重ね) | |
| b) | 차차 (しだいに) | 겹겹이 (幾重にも) |
| | 첩첩이 (重なり合って) | |

(33a)は単一形式でも副詞として用いられる表現である。ただし、単一形式と反復形式とでは意味が多少異なる場合がある。例えば、「금방금방」(休みなく、立て続けに)は《反復・継続》の意味であるが、単一形式の副詞「금방」は「たった今」あるいは「すぐ」の意味である。(33b)は対応する単一形式を持たない表現であるが、これも意味の点から考えて《反復・継続》の中に含めることができよう。なお、日本語の(32a)のように連用形の繰り返しで反復の意味を表す反復表現形式は韓国語では用いられない。

3.2.2 個別・分散・多様

- (34) a) それがすむと先生はまた教壇をおりて一年生と二年生の習字を一人一人見てあ
るきました。『風の又三郎』
土塊のひとつひとつに、苗の一本一本に、農民の汗が滲み込んでいるような感
じがする。『吉里吉里』
…その界隈の商店やアパートを一軒一軒たずねて…『吉里吉里』
しかし、日本ではその都度、一杯一杯碗に盛って食べます。『縮み志向』
もっとも私の言うことをいちいち聞きいれていた日には…『航海記』
…三度三度の食事にかかさなしいしみ汁に飽き飽きしていた。『森』
- b) 船には港々で検閲官やパイロットなどにやるミヤゲ物をかなり積んである。『航
海記』
タデもカヤツリグサも、根元々々にかほそい虫の音をひびかせながら…『青春
記』
…生きるために汲々と日々の労働を強いられることになる。『生きる』
- c) 冷たい風が、草を渡りはじめ、もう雲や霧が、切れ切れになって目の前をぐん
ぐん通り過ぎて行きました。『風の又三郎』
半数はむこうの港でチリチリになったという。『航海記』
ときどき低くビュッと潮を吹きながら、船なんか眼中になく悠々として泳ぎ去
った。『航海記』
ところどころ街頭がおぼろなかほそい光を投げかけている。『航海記』
…屋根代りの幕のはしに飛び飛びに吊されているのを…『森』
- d) …ここ十日ばかりのうちにも海はさまざまに変貌してみせた。『航海記』
…その上に生ずるありとある諸々の事象が…『航海記』
…この白鳥座の星のなかにはいろいろと記憶すべき事柄があり…『航海記』
しかしこの梅干の餞別は大出来というべきで、種類もとりどりあり、皺くちや
なのから紫蘇の葉で巻いたのまで数種類揃っている。『航海記』

(34a)は数の「1」に係わる表現であるが、これらは「個別」の意味を表わすのが普通である。(34b)の「港々で」は「港毎に」の意味であると解釈されるから、「個別」の意味を表すものと考えられる。(34c)は「分散」の意味を表す例である。「ときどき」は「反復」の意味ともとれるが、「ところどころ」が空間的な分散を表すのに対して時間的な分散を意味すると解釈する。(34d)は「多様」を表す例である。

「個別」、「分散」、「多様」は互いに重複するところがあり明確に区別しがたい場合もあるので、《個別・分散・多様》というようにまとめた。他の例としては次のようなものがある。

- (35) a) 色々 各々(おのおの) 思い思いに 折々 口々に
 自分自分で 好き好き それぞれ 月々 手に手に
 年々 めいめい
- b) 離れ離れに 別々に 別れ別れに 粉々に 散り散りに
 途切れ途切れに

(35a)は「個別」あるいは「多様」に解釈される例であり、(35b)は「分散」を意味する例である。

韓国語で《個別・分散・多様》を意味する反復表現には次のようなものがある。

- (36) a) 그런 사소한 하나 하나가 정수에게는 모두 신기했고, 그녀와 함께하는 그 순간들은 더없이 행복했다. (そのような些細なこと一つ一つがチョンスにはみな物珍しく、彼女と一緒にいるその瞬間はこうえなく幸せだった。)『父』
- 출석 체크를 하는 것도 잊은 채 선생님이 아이들 얼굴을 하나 하나 물끄러미 바라보기 시작했다. (出欠を取るのも忘れて先生が子供の顔を一人一人じっと見始めた。)『手紙』
- 한 방울 한 방울의 기름 속에는 무수한 불씨들이 떠다니고 있다. (一滴一滴의 油の中には無数の火種が浮いている。)『ことば』
- 우리 한 사람 한 사람이 세상의 한 부분이다. (我々の一人一人が世の中の一部分である。)『山に花が』
- 그래도 힘든 줄 몰랐고 그것을 지켜내는 하루 하루가 더없이 행복했다. (それでも大変なこととも知らずそれを守る一日一日がこの上なく幸せだった。)『父』
- b) 자연으로부터 얻어듣는 것, 그것이야말로 근본적인 것이고 그때 그때 우리에게 많은 깨우침을 준다. (自然から得られるもの、それこそ根本的なものであり、その時その時に我々に多くの悟りを与える。)『山に花が』
- 다 때에 맞춰 쓰신 편지던데, 그때 그때 사모님이 받아 보시면서 위로를 얻고 또 고인을 추억하시는 게 바로 남편께서 바라는 바일 겁니다. (全て時に合わせて書かれた手紙なので、その時その時興さんが受け取ってお読みになって慰められ、また故人を思い出されるとというのが、まさに御主人がが願っておられることでしょう。)『手紙』
- 그날 그날 감사하면서 나눠 가지면서 삶을 산다. (その日その日に感謝しながら分かち合う人生を生きる。)『山に花が』
- 그러나 살아 숨쉬는 그 순간 순간은 누구도 빼앗을 수 없는 그분의 것입니다. (しかし、息をするその瞬間瞬間は誰も奪うことのできないあの方のものです。)『父』

마음을 맑게 하고 자연 속에서 많은 생명체들과 교감하며 나누면서 사는 기쁨, 그것을 내가 날날이 다 알리지는 못하지만 나는 그렇게 살고 있다. (心を清くし、自然の中で多くの生命と交感し、分かち合いながら生きる喜び、それを私が一々知らせることはできないけれども私はそうやって生きている。)『山に花が』

사이 사이에 신문지를 끼면 깨지진 않을 거예요. (間に新聞紙を挟めば割れないと思いますよ。)『手紙』

혹은 살아가야 할 날이 많은 내가 어느 한 시절을 되새김질함으로써 삶의 구비 구비에 놓인 무수한 만남을 외면할 수도 있다는 경고를 담고 있는 것이기도 하다. (または生きていく日が多い私がある時節を反芻することで、生の曲がり角に置かれた無数の出会いに背を向けることもできるという警告を込めているものでもある。)『手紙』

모두들 오서방이 하는 말을 들어보니 마디 마디 옳은 말이었습니다. (皆おさんが言うことを聞いてみると一言一句正しい話でした。)『手紙』

당신 살내음이 너무 좋아 강아지처럼 내 몸 구석 구석을 킁킁거리곤 했지. (あなたの体臭がとても好きで小犬のように私の体の隅々をくんくんにおいをかいだりしたんだね。)『手紙』

두사람은 각 각 왼손을 내밀어 딱! 부딪쳤다. (二人はそれぞれ左手を出してばん!とぶつけた。)『手紙』

- c) 응, 그렇잖아도 내일부터는 틈틈이 알아보려 다닐 거야. (うん、ちょうど明日からは時々調べてみるつもりだ。)『父』

가랑이 사이로 바라본 逆倒된 풍경, 어렸을 적의 그 풍경을 우리는 詩를 통해서 때때로 확인해야 되는 것이다. (股の間から眺めた逆立ちした風景、幼い頃のあの風景を我々は詩を通して時々確認しなければならないのである。)『ことば』

환유와 정인이 앉아 있는 연못가 맞은편에는 몇 그루의 나무들 사이로 정사 각형의 대리석이 군데 군데 놓여 있었다. (ファニユとチョンインが座っている池の辺の向い側には何本かの木々の間から正方形の大理石が所々置かれてあった。)『手紙』

교정 곳곳에 심어진 단풍나무 잎새들이 한낮의 더위에도 아랑곳 않고 빨강계 물들고 있었다. (校庭の所々に植えられた紅葉の葉っぱが真昼の暑さにも関わらず、赤く染まっていた。)『手紙』

- d) 제비꽃은 이름도 가지 가지였다. (スミレは名前も様々だった。)『手紙』

…갖가지 색깔의 꽃들이 겹겹이 피어 우아한 자태를 뽐내고 있었다. (…様々な色の花々が重ねて咲いて優雅な姿を見せていた。)『手紙』

환유와 정인의 머리 위로 색색의 꽃가루가 뿌려졌다. (ファニユとチョンインの頭の上に色取り取りの花がまかれた。)『手紙』

(36a,b)는「個別」を表す例である。このうち(36a)は「1」という数に係わるものであり、日本語の(34a)に対応する表現である。(36c)は「分散」の例である。反復形式の「때때로」/ttæ-ttæ-ro/(時々)と単一形式の「때로」/ttæ-ro/(時に)との違いは、日本語の「時々」と「時に」の違いと平行している。最後の例の「각각」/kak-kak/(各々)は漢字語の「各各」であるが、固有語のように感じられるので

ここに含めた。(36d)は「多様」を表す例である。「갓가지」/katkaji/(様々)は「가지가지」/kaji-kaji/の縮約された形である。最後の例の「색색」/sæk-sæk/は漢字語「色色」の韓国語読みであるが、これも先の「각각」と同様漢字語とは意識されていない。

《個別・分散・多様》を表わすその他の反復表現としては次のようなものがある。

- (37) a) 구석구석(隅々) 거리거리(町々) 가닥가닥(筋ごと)
 가지가지(いろいろ) 갈피갈피(あいだあいだ) 끼리끼리(仲間同士で)
 골목골목(路地ごと) 그날그날(その日その日) 손에손에(手に手に)
 집집마다(家ごとに)
- b) 한개씩 한개씩(一個ずつ一個ずつ) 한걸음 한걸음(一步一步)
 한마디 한마디(一言一言)
- c) 날날이(いちいち) 층층이(階ごとに) 푼푼이(1錢2錢と)
 철철이(季節ごとに) 줄줄이(列ごとに) 쌍쌍이(対になって)
 알알이(粒ごとに) 달달이(月ごとに) 달달이(月ごとに)
 곳곳이(至る所に)
- d) 따로따로(別々に) 토막토막(切れ切れに) 갈래갈래(別れ別れに)

(37a)は主として名詞の反復によるものである。(37b)は数の「1」にかかわる表現の反復である。(37c)は副詞形成語尾「-이」/i/を持つもので、対応する単一形式を持たない。「달달이」/tadar-i/(月ごとに)と「날날이」/nanar-i/(日ごとに)では「달달」及び「날날」から音の脱落が生じている。(37d)は「分散」の意味を表すものである。

反復形オノマトペについては《個別・分散・多様》の意味を区別しなかった。それは、そのように解釈される反復形オノマトペの数が少ないためである。しかし、非常に少ないけれどもないわけではない。例えば、「仕事をきちんきちんと片付ける」の「きちんきちん」やその韓国語訳「일을 꼬박꼬박 처리한다」

/irûl kkobak-kkobak chôrihanda/(仕事をきちんきちんと片付ける)の「꼬박꼬박」/kkobak-kkobak/(きちんきちんと)などの反復形オノマトペは、「個別」の意味を表しているとは解釈できるし、「ずたずたに裂く」の「ずたずた」、「ぶつぶつに切る」の「ぶつぶつ」、「갈기갈기 찢다」/kalgi-kalgi tchitta/(ずたずたに裂く)の「갈기갈기」/kalgi-kalgi/(ずたずたに)、「토막토막 자르다」/t'omak-t'omak charûda/(ぶつぶつに切る)の「토막토막」/t'omak-t'omak/などは「分散」の例と考えてもよい。反復形オノマトペと一般反復表現との意味的整合性を重視するならば、例は少ないけれども前者にも《個別・分散・多様》の意味範疇を設定してもよい。あるいは、一般反復表現の《個別・分散・多様》に属する例を《反復・継続》《複数》《強調》のどれか適当な範疇に振り分けるということも不可能ではない。しかしながら、本節の目的は反復形オノマトペと一般反復表現とが意味的に同型であることを示すことにあるので、両者が完全に整合している必要はない。元々異なる部類の表現であるのだから独自性があっても不思議ではない。

3.2.3 複数

- (38) a) …まっ黒な頁いっぱい白に点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした。『銀河鉄道』
 …いつとはなしに星々がまたたきだし…『航海記』
 現在ではかような架空の島々はみんな消失してしまったから……『航海記』
 この暗愁にみちた人生をはげましてくれるものは、日々のよろこびです。『生きる』
 …実技は抜群なのに学科でお悩みの方々のため…『吉里吉里』
木々の間にクリーム色の建物が認められた。『吉里吉里』
 …それは活字であるより、なにか印刷機から飛びちった鑄鉄の粒々そのものように加根の眼を打った。『森』
- b) 少しも動かず、ほそべったい奴が何本も何本も…つるされたように逆立ちしている。『航海記』

名詞の反復表現は、日本語では(38a)の例のように《複数》を表わすことが多い。しかし、どのような名詞でもこのような反復が可能であるというわけではなく、かなり語彙的に限定されている。引用したものの他には次のようなものがある程度である。

(39) 家々 神々 国々 品々 人々 村々 峰々 面々 山々
方々(ほうぼう、かたがた)

いずれも1拍語か2拍語の反復であり、3拍以上の語の反復はない。(38b)の「何本も何本も」は、(38a)や(39)の反復表現とは異なり、単一形の「何本も」でも《複数》の意味を表わすことができる。《反復・継続》に分類した(28)の「何べんも何べんも」とともに、後述の《強調》の例として扱うのが適当であるかもしれない。

韓国語では、(38a)、(39)のような名詞の反復が《複数》の意味を表わすこととはない。それは、韓国語では、生物名詞にも無生物名詞にも自由に複数の接尾語「-들」を付けることができることにもよると思われる。その代り、韓国語には、日本語にないタイプの《複数》の反復形式がある。次のように疑問詞の反復が《複数》の意味を表わすことができるのである。

(40) 어디 어디를 구경했습니까? (何と何を買いましたか?)
누구 누구를 만났습니까? (誰と誰に会いましたか?)
뭐 뭐를 샀습니까? (何と何を買いましたか?)

日本語では疑問詞の反復は不定表現にしかない。¹² これについては次節

¹² 「何々を買い揃えたらいいですか?」とか「誰々を招待しましょうか?」のように「何々」や「誰々」を複数の意味を持つ疑問詞として使うことができるのではないかという日本語話者の指摘があった。しかし、これらの文は不自然だとする日本語話者の方が多い。前者は「何を買い揃えたらいいですか?」とするのが自然であり、後者も「誰を招待しましょうか?」で十分であり、特に複数性を強調したい場合には「どのような人々を招待しましょうか?」とするのが自然だという判断であった。

で述べることにする。

3.2.4 強調

反復形オノマトペの場合と同様、一般反復表現にも《強調》の意味と解釈されるものがある。

- (41) a) 見ると、その白い柔らかな岩の中から、大きな大きな青じろい獣の骨が、横に倒れて潰れたという風になって、半分以上掘り出されていました。『銀河鉄道』
 こっち側の窓を見ますと汽車はほんとうに高い高い崖の上を走っていてその谷の底には川がやっぱり幅ひろく明るく流れていたのです。『銀河鉄道』
- b) 痛くて痛くて、あのときも三日三晩、泣き通したな。『吉里吉里』
 私はホールの二十五歳の中国の娘と、店がすんでから、はるかにはるかにドライブをし……『航海記』
いつまでもいつまでも、そのぶなの木を見上げて立っているのです。『度十公園林』
 少年の怖るべき博識ぶりにただただ気を吞まれているばかりである。『吉里吉里』
 …まだまだ生粋の純朴さを失っていないらしい。『航海記』
 そんな暇があったら、もっともっとしたいこと、しなければならぬことがやまほどあった。『森』
決して、決して話してはならなかった。『森』
 何回も何回も、何に対しても「たいへんたいへんおいしかった」と記している。『青春記』
- c) 翌朝早くろくろく寝ないというTに起されて、渋々汽車に乗った。『航海記』
おそろおそろ値を問えば7万5千円もするという。『吉里吉里』
 …教師はこわごわ遠くからそのさまを眺め…『青春記』
 ふとそんなことを思い、思った瞬間、知らず知らず眼をつぶった。『森』
 お里はつねづね不親切ではなかったが、べつに親切らしいことをいたり、したりもしなかった。『森』
 その場所で私は、のちのちまで忘れることのできない、滑稽で同時に怖ろしい体験をした。『青春記』
 …京橋の新聞社に山下蕭雨を訪ねに行かされた時のことは、あとあとまで忘れずにいた。『森』
- d) …普通サメを撃退するときに用いる荒々しい身ぶり…『航海記』
 …などと書くのもバカバカしいから私は治療簿にこう記入した。『航海記』
 このふてぶてしい海のギャングも、砂糖水を飲ませればコロリと死ぬという。『航海記』

このセリフは実に憎々しかった。『青春記』

…はなばなしい女性遍歴にもかかわらず、どこからどう手を廻し、どこをどう抑えるのか…『吉里吉里』

- e) …人間はオセッカイはやかめからトゲトゲしくも感じられるし…『航海記』
 いまさらことごとしく説明されなくとも旅券がどういうものだらう知っておる。『吉里吉里』
 …幼い頃に読んだ冒険物語のかもしれないが幻想のようにふしぎな生生しさを伴ってくるものだ。『航海記』
 …踊りの上手な踊子にありがちな事務的なよそよそしい感じもない。『吉里吉里』
 …警官を銭湯に警防団員がものものしく登ってきた。『青春記』
 赤沢まつが忌々しげに語るいきさつをいっそ面白がっていた久米たみは…『森』
 …男まえもちょっと小意気だとされたもとの板前さんを思い浮かべているような馴れ馴れしさがあった。『森』
- f) …すぐにその手を抜き出して宙に高々と差しあげる…『吉里吉里』
 …昼の楊(やなぎ)の木をありありと見ました。『ガドルフの百合』
 氷山にぶつかったらしく、ドイツの新聞が絵入りでデカデカと書きたてていた。『航海記』
 …私たちはその分工場をうまうまと脱出し、元の本工場へ戻ることに成功した。『青春記』
 …などということを長々と書かねばならないし、とても理解しがたいであろう。『航海記』
 …風速計は船の速度と相まって二十メートルの線を易々(やすやす)とこえている。『航海記』
 よろこびをともなつてこそ、指は人の生命をいきいきとよみがえらせるのだと思います。『生きる』
 娘はまるまると肥った餅肌の持ち主である。『吉里吉里』
- g) …すぐさま連想したのは、草の芽もふかめ寒々とした河原の光景である。『青春記』
 日本のひろびろとした焼跡と比べて…『航海記』
 …信州のひえびえとした大気の中にひろがる美しい山脈(やまなみ)である。『青春記』
 岡野の言葉はしみじみとして、どこか詠嘆的であった。『森』
 …黄疸にはよいお薬だとして、三度三度の食事に欠かさないしじみ汁に飽き飽きしていた。『森』
 アナウンサーがほれほれしたように頷いたとき…『吉里吉里』
 胸に垂れた青白い顔はいっそ静かに浄らかで、なにか雲のあいだのお月さまみたいに冴え冴えしていた。『森』
うきうきした声をあげ、机の抽出しから書物を一冊とりだした。『吉里吉里』

- h) …船はようやく岸壁を離れ、狭い水路すれすれに動きだす。『航海記』
 …とんでもない急勾配の石段を意識もタエダエに登りつめると…『航海記』
- i) あとから思い返してみると単に何々を見たというにすぎないことになりかねぬから…『航海記』

(41a)は形容詞の連体形の反復による《強調》の例であり、(41b)は副詞あるいは副詞的要素の反復による《強調》の例である。いずれも単一形が可能であり、《強調》の意味の反復形としては最も典型的な場合である。(41a,b)の反復形とそれに対応する単一形とを比較してみれば、反復形が《強調》の意味を持つことは明らかである。

これに対して、(41c)の反復形は対応する単一形を持つとは必ずしも言えない例である。「ろくろく」は「ろくに」に対応する反復形であると見なせるだろうが、「渋々」、「おそるおそる」、「こわごわ」、「知らず知らず」に対応する単一形はない。「知らずに」は「知らず知らず」とは意味が異なる。「知らずに」は「知らないで」の意味であるが、「知らず知らず」は「知らないうちに」、「思わず」、「無意識的に」の意味である。同様に「つねづね(常々)」も「常に」とは意味が多少異なる。「常々」は「日頃」、「普段」の意味であり「常に」が強調のために反復されたものとは考えられない。また、「のちのち」、「あとあと」はそれぞれ「のち」、「あと」の反復形であることには間違いないけれども、意味的にはその強調形であるとは断定できない。少なくとも引用例の「のちのち」、「あとあと」を「のち」、「あと」で置き換えることはできない。このように、(41c)の反復形は単純に《強調》の意味を持つとは考えにくい例である。しかし、これらの反復形が《反復・継続》、《個別・分散・多様》あるいは《複数》の意味に属するとするにはさらに抵抗がある。他に適当な意味区分も考えられず、強いて分類するとすれば《強調》に属するとするのが適当ではないかという理由でこれに含めることにした。この種の反復表現には他に「無理無理」(「無理矢理」の意味で)、「嫌々」、「薄々」、「内々(ないない、うちうち)」、「先々」、「元々」などがある。

(41d,e)は、「反復形語幹+しい」の構造を持つ形容詞の例である。(41d)の例は、それぞれ「荒い」、「馬鹿らしい」、「太い」、「憎い」、「華やかだ」、「重い」のような単一形の形容詞あるいは形容動詞に対応し、その強調形であると考えても不自然ではないけれども、(41e)の例にはそのような対応する非反復表現がない。しかしながら、上で(41c)の反復形を《強調》の意味に属させたのと同じ理由で、これらも一律に《強調》の意味を表わすものとして扱う。この種の形容詞には他に次のようなものがある。

- (42) 痛々しい かいがいしい 軽々しい 空々しい 毒々しい
神々しい すがすがしい

(41f)は「反復形語幹+と」の形式の副詞表現である。「～しい」の形容詞の場合と同様、「高々と」に対する「高く」のように非反復形の対応表現を持つ場合もあるし、「ありありと」のように非反復形の対応表現がない場合もある。しかし、上と同じ理由で一律に《強調》の意味を表わすものとして扱うことにする。この種の表現には他に次のようなものがある。

- (43) 青々と 赤々と 黒々と 軽々と 寒々と 早々と 深々と
楽々と 細々(こまごま、ほそぼそ)と

(41g)は「反復形語幹+(と)する」の形式の動詞表現である。「～(と)している」の形で用いられるものもここに含めた。多くは(41g)のように副詞形としても用いられる。他に「けちけちする」などもこの種の表現である。

(41h)の「すれすれに」と「タエダエに」は、それぞれ「反復形語幹+だ」の形式の形容動詞「すれすれだ」、「絶え絶えだ」の副詞形である。その他の例を挙げると次のようなものがある。

- (44) 熱々(あつあつ)だ 懲り懲りだ しわしわだ そこそこだ
近々だ 見え見えだ まあまあだ まだまだだ

まずまずだ

この種の表現も対応する単一形表現を持たないものが多いが、上に述べたのと同じ理由で、便宜的に《強調》を表わすものとみなす。

(41i)の「何々」のように疑問詞が反復される表現があり、他に「いくらいくら」、「いついつ」、「誰々」、「どこどこ」、「どれどれ」などが挙げられる。このような疑問詞の反復形が、韓国語では(40)のように《複数》の意味で用いられることを上に見たけれども、日本語では《複数》の用法はない。「いついつにどこどこで何々をいくらいくらで買ったとメモしておきなさい。」のような使い方の場合には、「個別」の意味を表わすとも解釈できるが、この種の反復表現は、基本的には(41i)の「何々」のように一種の不定表現であると解釈できる。通常の不定表現の「何か」、「いくらか」、「いつか」、「誰か」、「どこか」、「どれか」などに比べると表現を明確にしようという意図が感じられるので、これも《強調》に含めることができよう。また、疑問詞の反復表現は次に述べる一語文の反復と解釈される場合もある。

《強調》の意味の最後のタイプとして、次のように一語文が反復される場合がある。

- (45) 「何だ。何だ。何だ。」とすぐみんな走って行ってのぞきこみました。『風の又三郎』
 …内心これはこれはと思っていたが、まだそのような気配はどこにもない。『航海記』
 憎たらしい私の相棒はユカイ ユカイと喜んでいる始末…『航海記』
まてまて、こんなことで貴重なマルクを費やしてはならぬと思いなおし…『航海記』
 お前さん、乱暴な真似はやめろ、やめろ。『航海記』
 このようにして思いがけなく古橋は記憶を取り戻すことができた、めでたしめでたし…『吉里吉里』
 おっと、も少し遠くから掘って。いけない、いけない。なぜそんな乱暴をするんだ。『銀河鉄道』
 ああそうそう、ありました、ありました。『虔十公園林』
 店のものがそれを見て飛びだし、こら、どいた、どいた、と馬を鞍ごと押したり…『森』

呼びかけ、問い、指示、応答など相手に積極的に働きかけたり感情を強く表現する場合に口語でよく用いられる。働きかけを念入りにしようという意図が感じられるので《強調》に含めることができると思われる。この種の反復表現としては他に次のようなものがある。

(46)	暑い暑い	あらあら	あれあれ	いいよいいよ
	いやいや	うまいうまい	えらいえらい	おやおや
	勝った勝った	がんばれがんばれ	来た来た	食った食った
	こまったこまった	ごめんごめん	こらこら	これこれ
	これはこれは	賛成賛成	すまんすまん	そうだそうだ
	その調子その調子	大変だ大変だ	でかしたでかした	どうしたどうした
	どうぞどうぞ	どうもどうも	どれどれ	何の何の
	はいはい	馬鹿馬鹿	ほらほら	見て見て
	もしもし	やったやった	よしよし	よせよせ
	弱った弱った	わかったわかった		

韓国語でも一般表現の反復形式が《強調》の意味で用いられることが多い。まず典型的な例から挙げると次のような例がある。

- (47) a) …때로는 높이 높이 산 위로 솟아오르고 때로는 깊이 깊이 바다 밑에 잠기라는 교훈이었다. (時には高く高く山の上にそびえたち、時には深く深く海の底に沈めようという教訓であった。)『山に花が』
- 갑자기 멀리 멀리 도망쳐버리고 싶은 진한 유혹이 느껴졌다. (急に遠くへ遠くへ逃げてしまいたい強い誘惑が感じられた。)『父』
- 정수는 곱게 곱게, 정말 소중한 보물처럼 또 한 통의 편지를 가슴 속에 갈무리했다. (チョンスは大事に大事に、本当に大切な宝のようにもう一通の手紙を胸の中にした。)『父』
- 옛날 옛날, 오궁두리라는 곳에 오서방이라는 사람이 살고 있었습니다. (昔々、オグドゥリという所に呉さんという人が住んでおりました。)『手紙』
- 그인 나무를 너무 너무 좋아해요. (彼は木がとてもとても好きです。)『手紙』
- 농부도 안심하고 그 외딴 집에서 오래 오래 살았습니다. (農夫も安心してその離れで末永く住みました。)『童話』
- 당신에게 영영 편지 한통 써 보낼 줄 모르는 재미 없는 남편으로 남아 있을 수 있다면 얼마나 좋을까. (あなたに永遠に手紙一通も書けない面白くない夫でいられるならどんなにいいだろう。)『手紙』
- 어차피 남남인데 정은 왜 들어. (どうせ他人なのになぜ情が移ったの。)『父』
- 이 한겨울에 추운 것은 더더욱 참을 수 없는 일이었습니다. (こんな真冬に寒いのはさらに耐えられないことでした。)『童話』

호랑이는 더욱더 놀라 힘을 더 내어 마구 달렸습니다. (トラは一層びっくりしてさらに力を出して一所懸命走りました。)『童話』

- b) 마음이 겹 겹으로 닫혀 있기 때문에 그런 씨앗을 내 자신이 지니고 있으면서도 그걸 펼쳐 보이지 못하는 것이다. (心が幾重にも閉じられているために、そのような種を自分自身が持っているながらそれを広げて見せないのである。)『山に花が』

품 속을 살 살이 뒤진 나무꾼은 그 나라 임금님의 품 속에서 조그만한 은장도를 발견했습니다. (懷の中を隈なく探した木こりはその国の王様の懷の中から小さな銀の刀を見つけました。)『童話』

그럼 나도 학교 안 갈 땐 내 내 여기서 당신하고 같이 있어도 되는 거야? (それじゃ、私も学校行かない時はずっとここであなたと一緒にいてもいいの。)『手紙』

(47a)の例は、いずれも対応する単一形の表現があり、その意味を強調するために反復されていると解釈できるものである。最初の7例は副詞の反復である。韓国語では副詞の反復形が日本語の場合よりも頻繁に用いられ、日本語では普通反復されない「미리」/miri/(あらかじめ)、「거의」/kôi/(ほとんど)、「대강」/tægang/(ざっと)、「대충」/tæch'ung/(おおまかに)、「자꾸」/chakku/(しょっちゅう)、「가끔」/kakkûm/(時たま)などのような副詞も「미리미리」/miri-miri/、「거의거의」/kôi-kôi/、「대강대강」/tægang-tægang/、「대충대충」/tæch'ung-tæch'ung/、「자꾸자꾸」/chakku-chakku/、「가끔가끔」/kakkûm-kakkûm/のように反復されることが多い。これらも《強調》の意味である。第8例の「남남」/nam-nam/(他人)は名詞が反復された珍しい例である。単一形の「남」/nam/だけでも「他人」の意味であるが、反復することにより「他人」という意味が強調されていると考えられる。最後の2例の「더더욱」/tô-dôuk/と「더욱더」/tôuk-tô/はいずれも副詞「더욱」/tôuk/(さらに、一層)の反復形が縮約された例である。純然たる反復形ではないがここに含めることにした。(47b)の例は対応する単一形を持たない例であるが、日本語の(41c)などの例の場合と同じ理由で《強調》の意味に分類する。

前節で、韓国語では疑問詞の反復が(40)のように《複数》の意味を表わす場合があることを指摘したが、疑問詞の反復は日本語と同様不定表現となること

もある。

- (48) 몇몇 학생들도 정인을 따라 눈을 감았다. (何人かの学生もチョンインに続いて目を閉じた。)『手紙』

어찌어찌 넘겨 받은 원고도 정인이 밤을 새워가며 교정을 봐야 하는 경우가 대부분이었다. (なんとかかんとかで受け取った原稿もチョンインが徹夜して校正しなければならぬ場合が大部分だった。)『手紙』

…예전에 어느어느 도시에 가니까 아주 맛있는 제과점이 있더라. (…以前どこそこの都市へ行ったらとてもおいしい菓子屋さんがあった。)『山に花が』

깃발마다에는 얼마얼마하는 가격이 굵은 글씨로 쓰여져 있었다. (旗ごとにいくらいくらという価格が太い文字で書かれてあった。)『手紙』

一語文が反復されて《強調》の意味を表わすことも日本語の場合と同様である。

- (49) 그렇게 잘났으면 왜 진작에 몰랐어? 왜! 왜!… (そんなに偉いならどうして早くわからなかったの? どうして! どうして!)『父』

그래 그래. 신랑이 눈이 빠지게 기다릴 텐데 빨리 가 봐야지. (そうそう。新郎が首を長くして待ってるんだらうから早く行かなくちゃ。)『手紙』

類例を挙げると次のようなものがある。

- (50) 네 네(はいはい) 불이야 불이야(火事だ火事だ)
 비켜라 비켜라(退け退け) 뭐야 뭐야(何だ何だ)
 기다려 기다려(待って待って)

《強調》の意味の反復形に関して日本語の場合と異なる点は、日本語では(41a)の「高い高い崖の上」のように形容詞の連体形を単純に反復することによって強調の意味を表せるのに対して、韓国語では普通それができないことである。

- (51) 택시는 철도 건널목을 지나 긴 긴 다리를 건너서야 국도로 빠져나올수 있었다. (タクシーは鉄道の踏み切りを過ぎて長い 長い橋を渡ってやっと国道に抜け出せた。)『手紙』

(51)では形容詞「길다」/kilda/(長い)の連体形「긴」/kin/が反復され意味が強調

されているが、このような例は例外的である。韓国語で形容詞を強調する主な方法として次の3通りがある。

- (52) a) 길다+길다 → 길고길다
 b) 길다+길다 → 길디길다
 c) 길다+길다 → 기나길다

いずれも同じ形容詞を重ねる形式であるけれども、単純に反復するのではなく第1要素を(52a)では「語幹+고/ko/」に、(52b)では「語幹+디/ti/」に、(52c)では「語幹+나/na/」に変えている。ただし、「길다」/kilda/(長い)や「멀다」/molda/(遠い)など語幹が「ㄷ」/d/終わる場合には、「나」が付くとき「ㄷ」は脱落する。形容詞の連体形を強調する場合には、次のようにこのような派生形式の連体形を用いるのである。

- (53) a) 전화기가 길고 긴 울음을 끝도 없이 토해내고 있었다. (電話が長い長い音をずっと出していた。)『手紙』

1979년, 70년대의 길고 긴 나날들이 비단실이 되어 우리들 새로운 생의 의상을 지을 수 있게 하려면 당신은 부지런히 그 고치의 마지막 마무리를 하기 위해 노동을 하십시오. (1979年、70年代の長い長い日々が絹糸となって私たちの新たな人生の衣装を作れるようにその繭を仕上げるため熱心に労働を하십시오。)『ことば』

창문 틈을 사이에 두고 서로를 부둥켜 안은 환유와 정인은 길고도 긴 키스를 나누었다. (窓を間に抱き合ったファニユとチョンインは長い長いキスを交わした。)『手紙』

편지의 발신인을 찾아 이리저리 헤메느라 정작 그 편지 속에 담겨 있는 환유의 깊고 깊은 마음을 잃어버리고 있는 건지도 몰랐다. (手紙の差出人をあちこち探しまわって本来その手紙の中に込められているファニユの深い深い心を忘れているのかもしれない。)『手紙』

- b) 깊디 깊은, 꿈조차 말라버린 잠에 빠져들고만 싶었다. (深い深い、夢さえ乾いてしまった眠りに陥りたかった。)『手紙』

일치감치 연하디 연한 새순을 내미는 것은 참나무류였다. (いち早く弱々しい新芽をつけるのはチョウセンブナ類だった。)『手紙』

그 나무들에는 또 환유와 정인의 짧디 짧은 사랑의 추억이 서려 있었다. (その木々にはまたファニユとチョンインの短い短い愛の思い出が秘められていた。)『手紙』

- c) 정인을 향한 환유의 필사적인 사랑이 만들어낸 크나큰 선물이었다. (チョンインへのファニユの命をかけての愛が作り出した大きな大きなプレゼントだった。)『手紙』

連体形の場合だけではなく、終止形においても日本語と韓国語の違いが見られる。(45)、(46)に挙げた日本語の一語文の反復の例の中に、「ゆかいゆかい」、「いけないいけない」、「よしよし」、「ごめんごめん」、「暑い暑い」など平叙形の反復が多く含まれていた。韓国語でもこのような平叙形の反復は可能であるが、次のような非反復的形式を用いることが多い。

- (54) 좋다 좋아. (よしよし。)
 싫다 싫어. (嫌だ嫌だ。)
 괜찮다 괜찮아. (いいよいいよ。)
 덥다 더워. (暑い暑い。)
 미안하다 미안해. (ごめんごめん。)
 안 된다 안 돼. (だめだめ。)
 잘 했다 잘 했어. (よくやったよくやった。)
 바쁘다 바빠. (忙しい忙しい。)

同じ用言を重ねるのであるが、単純に反復形にするのではなく第1要素を「한다体」と呼ばれる文末形に、第2要素を「좋아」/choa/、「싫어」/shirô/、「했어」/hæssô/、「바빠」/pappi/など連用形にするという形式である。

以上、一般語の反復表現を意味の観点から日韓両語の反復形の一般表現を比較対照してみたのであるが、いずれの言語においても反復表現は《反復・継続》、《個別・分散・多様》、《複数》、《強調》の意味に区分することができ、どのような表現が反復されるかについても、若干の相違点はあるにしても、非常に類似性が高いことを示した。

3.3 反復形オノマトペと反復表現

以上、日韓両語の反復形オノマトペおよび一般表現の反復形を比較対照した。その結果次のことが明らかになった。

- ① 日韓いずれの言語においても反復形オノマトペがオノマトペの中心的存在となっており、その形態、分布、使用頻度、象徴的意味のいずれの点においても両語間の類似性が高い。
- ② 日韓いずれの言語においても一般表現の反復形が頻繁に用いられており、反復形の持つ形態象徴的意味の点において両語間の類似性が高い。
- ③ 日韓両語の反復形オノマトペと一般表現の反復形の形態象徴的意味は互いに類似性が高い。

この結果から、反復形オノマトペと一般表現の反復形とが密接に関係したものであることは疑いようもない明らかな事実である。

筆者は、反復形オノマトペに関して次のように解釈したい。日韓両語のオノマトペは異なる特殊な語彙カテゴリーであると考えられがちであるけれども、決して両者は無関係ではない。日韓いずれの言語においても、両者の境界に位置する表現が多いことはすでに指摘した通りである。そればかりでなく、少なくとも反復形オノマトペに関しては、一般表現の反復形が持つ「音楽的特性」を昇華した形で発達してきたのではないかと考えられるのである。「音楽的特性」とは、言い換えれば、それぞれの言語に特有のリズムやテンポに関わる特性であるが、そのような特性に基づいて各言語で口調のいい表現、聞こえのいい表現というものが自然と定まって来る。日韓両言語においては反復という形式がそうした音楽性の観点から好ましく感じられ、それがオノマトペという語彙類において凝縮された形で好んで用いられているのではないか。といっても、まず一般表現に反復形式が発達し、次いで反復形式のオノマトペが発達したということを主張するのではない。長い言語の歴史的発達の過程で両者は互いに影響しあいながら、反復形式が両語にとって口調がよく感じられる表現であるという言語的特徴を発達させてきたと考えるのである。

では、なぜ両語において反復形式が口調がいいと感じられるのか。どの言語においても反復形式が好まれるとは限らず、言語によっては反復形式は幼稚さ

と結び付けられる場合もあるようである。日本語や韓国語において、反復形式が好まれる理由は2つあるのではないかと思われる。1つは音声的理由で、日韓両言語のような音節やモラをリズム単位とするような言語では、同じ音(群)を繰り返すことが、口調のよさ、聞こえのよさに貢献するのではないかと思われる。もう1つの理由は、日本語も韓国語も接続要素を用いない並列構造で等位構造を表すことが可能であるという、統語的な理由ではないかと考えられる。いずれの理由も、日本語と韓国語の共通性から推測されたものに過ぎず、今後の検討課題として、同様の特徴を持つ他の言語についても妥当であるかどうかを調べてみる必要がある。本研究では、第2の統語的理由について以下に詳しく検討することにする。

3.4 並列構造

並列構造とは、統語機能的に等価な要素を一切の明示的結合要素なしに結び付ける構造のことである。日本語や韓国語で並列構造が許されることが両語において反復表現や反復形オノマトペが好まれることと密接な関係があると考えられる。本節では、名詞の並列(§3.4.1)、連体修飾語の並列(§3.4.2)、副詞の並列(§3.4.3)、節の並列(§3.4.4)の場合に分けて日韓両語の並列構造を比較検討する。また、日韓いずれの言語においても、並列表現の中には慣用句化して繰り返し用いられるものがあり、それらの表現の持つ「口調の良さ」、「語呂の良さ」は反復表現や反復形オノマトペの発達に大きな影響を与えたと考えられる。§3.4.5でこのような日韓両語の慣用句的並列表現を検討する。

3.4.1 名詞の並列

日本語では、名詞と名詞を等位的に結合する場合、次のように「と」、「や」、「とか」などの助詞、あるいは、「そして」、「あるいは」、「または」などの接続

副詞を使うのが基本的な方法である。

- (55) がらんとした家の中に、母と私と妹だけが暮っていた。『青春記』
生産する人と消費する人、売る人と買う人、情報を流す人とそれを受ける人、現代の社会において…『縮み志向』
木や水に、ある形と運動と空間を与える構造は石です。『縮み志向』
 そんな中で、いま宗教や科学や医学も大いに惑っています。『生きる』
花や、草や、森の木や、鳥や、魚や、いろんな命がこの世界に充ち満ちていますが…『生きる』
 …ウマとかロバに似ているような角ばった顔だちの人がいて…『生きる』
 柴田参謀長はポケットから、ナイフ、フォーク、罐(かん)切り、錐(きり)、小さな鋸(のこぎり)、栓抜き、爪切、やすり、スプーン、そして、小さな鋏(はさみ)の付いた便利ナイフを取り出した。『吉里吉里』
 …言葉やしぐさ、あるいは物で<飾る>ことによって…『生きる』

しかしながら、このような等位接続形式は基本的な形式ではあっても、一般的な表現であるとは限らない。一般的には次のように、「と」や「や」のような接続の要素を置かずに名詞を単に並べるだけの形式、つまり、並列形式が使われるのがむしろ多い。

- (56) 世間で持てはやされている新しい流行、時代の息吹き、社会の旬を買うのです。『生きる』
 そこで人工的に処理されたユダヤ人、ポーランド人、ロシア人、ジプシー、レジスタンスのひとつの数は、六百万人とも九百万人とも言われます。『生きる』
未知なるもの、超自然的なもの、絶対的なもの、人知のおよばぬもの、そういうものに対する畏敬の念を持ち…『生きる』
白、黄、緑、うす桃と色々な色のターバンをしている。『航海記』
 広告の話ではなく、乗客に対する案内、注意、要望事項のことです。『縮み志向』
 それで私は、朝、昼、夜の飯をわざと全部食わず、少しずつとっておいて…『青春記』
バナナ、オレンジをうず高く積みあげている。『航海記』
 …深い海中に巨大なタコ、イカが棲むことは事実だが…『航海記』
 ソーセージの好きな人間には概して分裂気質、癲癩気質が多く、ハムのほうが好きな人間には循環気質、ヒステリー気質が多い。『航海記』
 彼は英語、少々あやしいドイツ語、カタコトの日本語をしゃべる。『航海記』

このような並列形式は、(55)の接続形式と比較すると、要素間の意味的な結

びつきは弱いように感じられる。つまり、接続形式は意味的に緊密なまとまりを持った名詞句を構成するのに対して、並列形式は、単純に事物を数え上げる、羅列する、例示知るといような感じである。このことを端的に示すのが(55)の2番目の例である。「生産する人と消費する人」、「売る人と買う人」、「情報を流す人とそれを受ける人」という表現は、それぞれ、対照的な関係にある人の部類を「と」で結合することで、さらに大きな人の部類を表わしている。そして、そのようにつくられた大きな部類が、今度は羅列的に並列されているのである。並列形式には、羅列的、例示的意味があるためか、次のように「など」を伴うことが多い。

- (57) よくインド洋の藍、紅海の深緑、地中海のライト・ブルー、ビスケー湾の浅緑などというが、ごく大ざっぱの比較であろう。『航海記』
 夜店で果物、雑貨、靴下、ピーナッツなどを商っている。『航海記』
 彼らはまた馬、犬、猫などを大切にす。『航海記』
 更に海中で危険視されているものに、タコ、ウツボ、カマスなどがあるが、いずれも人を向こうから襲うことはない。『航海記』
 …車中で会った変てこな行商人の相棒になり、ロシア、アルメニア、中国などを行商して歩いた。『航海記』
 …私はわざわざ金属製のコップ、灰皿などを買いこんだ。『航海記』

例示的並列表現とは逆に、要素の意味的結びつきが強いことを示す並列構造がある。次のような「名詞＋名詞」の構造の合成語である。

- (58) a) 朝晩 朝夕 足腰 後先(あとさき) 雨風
 雨露(あめつゆ) 雨霰 色恋 色艶 上下(うえした)
 嘘偽り 内外(うちそと) 海山 裏表 枝葉(えだは)
 甥姪(おいめい) 奥底 雄しべ雌しべ 雄雌(おすめす)
 親子 陰日向(かげひなた) 神仏(かみほとけ) 草木(くさき)
 塩胡椒 上手下手(じょうずへた) 手足縦横(たてよこ) 田畑
 血肉(ちにく) 常日頃 塵芥(ちりあくた) 月日(つきひ) 敵味方
 時所(ときところ) 野山 昼日中(ひるひなか) 笛太鼓
 紅白粉(べにおしろい) 骨身 右左 目鼻 山川
 湯水 弓矢 夜昼 わびさび

b) 上げ下げ	上げ下ろし	開け閉め	当たり障り	当たり外れ
暑さ寒さ	ある無し	行き帰り	行き戻り	行き来
生き死に	浮き沈み	移り変わり	売り買い	送り迎え
貸し借り	切り貼り	立ち居	積み下ろし	出入り
煮炊き	寝起き	昇り降り	飲み食い	見聞き
やり取り	やりくり	やりもらい	ゆすりたかり	読み書き
分け隔て				

(58a)は名詞を要素とする合成語であるが、「朝晩」、「雨風」は「朝と晩」、「雨と風」のような等位接続形式より意味的に緊密な結合である。(58b)は用言の名詞形を要素とする合成語である。やはり、「上げ下げ」、「暑さ寒さ」は「上げることと下げること」、「暑さと寒さ」よりも緊密な結合である。

例示的な表現は、(56)や(57)のような単純な並列形式だけに限られるわけではない。次のように、様々な助詞やそれに準ずる要素が「名詞～名詞～」の形で繰り返して使われる表現形式がある。

(59) しかし、夜中とか、旅先とか、日常の時間の流れが変わったとき、<とまどう><惑う>という感じを強くもつものですね。『生きる』

仮面とはその民族の深層にある心の顔ですから、白人とか黄色人とか外面の顔の皮膚の色で判断するより、仮面でもってそうするほうがずっと有効だと思われまます。『縮み志向』

…腹くだしとか風邪ひきとか、出港の日には必ず病人が多いとのこと。『航海記』

侯爵とか男爵とか貴族の位でわけてあるフクロウやミミズクがいましたが…『航海記』

…それも今は商業的拡大主義によって、貿易摩擦やら、技術摩擦やら、いろいろな試練に直面しているのです。『縮み志向』

…彼らは実に無数の数字を手帳やら石板やらに書き…『航海記』

ピアノだけではない。絵を描く人だって、ロクロをひく人だって、みんな長生きで元気です。『生きる』

イギリスだのロンドンだの北アメリカだのって、いろいろな国があるようなことを言うけれど…『航海記』

富士山であれ、木曾谷であれ、立田川や和歌浦であれ、特定の名勝地の風景が絵巻のように描かれます。『縮み志向』

四本の指にはダイヤモンドだかルビーだかが光っているのだった。『吉里吉里』

留学生にはたいてい大なり小なり憂鬱症にとりつかれる時期があるらしい。『航海記』

この種の形式も並列構造であることは一見して明らかであろう。

等位結合の助詞「と」も、結合の緊密さを表わすためにこの「名詞～名詞～」の並列構造で使われる場合がある。

- (60) ですから、茶の湯には日本人の人と人の関係とともに、人と物(道具)の関係も読み取ることができるのです。『縮み志向』
 それほどものすごい勢いで才能とエネルギーを消耗していく。『生きる』
 ちょっと前まで癌と気の関係があるという一笑に付された。『生きる』

このように「と」が反復して使われると、やはり並列構造となる。

副助詞「も」はこの種の並列構造を形成する力が最も強い助詞であるが、単独あるいは他の助詞と結合して様々な並列構造を造り出す。

- (61) 茶の歴史も、精神も、茶の道具できめられるのです。『縮み志向』
絵を描くのも、ロクロをひくのも、みんな創造的なよろこびがある作業です。『生きる』
 たとえ嘘つきでも、浪費癖のある女性でも、ひとりよがりの女性でも、やきもちやきの女性でも、ひとつ素晴らしくチャーミングな部分があれば、その輝きがすべてを消してしまうことがあるからです。『生きる』
 古橋は育ちが悪かったせいか意地が汚く、貰うものなら夏でも小袖、冬でも浴衣という主義、無料(ただ)なら地震でも雷でも火事でも有難がる性質があるから…『吉里吉里』
 遊ばすといっても、足でも腕でもやたらに搦んでぶらさげるのである。『航海記』
 それは刀でもソロバンでもない、琴のような楽器、万人に共感を与えうる生命の響きでなければなりません。『縮み志向』
 いや、その音を弾く人にも、聞く人にも、喜悅の共感、分ければ分けるほどその共感が強くなる力があるのです。『縮み志向』
 海はぐっと狭まり、右にも左にも陸が見える。『航海記』
 「ハレルヤ、ハレルヤ」前からもうしろからも声が起りました。『銀河鉄道』
 舞台は観客席に突出していて、正面からも側面からも観賞することができます。『縮み志向』

次のように格助詞に導かれる文節も並列的に並べられることがある。

- (62) かつて、本で、映画で、写真で見たりした風景が、博物館の化石のようにそのまま残っている。『生きる』
 かつてあの辺は、立っていると、世界の流れの、時代の流れの、渦巻きの中心に

いるようなエキサイティングな感じを受けたものですが…『生きる』

さらに、自分以外の外の世界を、他人を、他の生命体を、どうにかしてよろこばせることができたらどんなにいいだろうと思わずにはられません。『生きる』

破けた障子の小さい穴を通じて、空を、天の川を見ようとするとときに、俳句が生まれてくるのです。『縮み志向』

机上の物品は船のローリングにつれて、右に左に猛烈な勢いですべて行ってぶつかりあい、床の上に散乱する。『航海記』

また、概数を表すのに、次のような数詞の並列構造がよく用いられている。

- (63) …すでに日本のマグロ漁船は遠く大西洋に二、三十隻も出漁しているのである。『航海記』

さらにサメの不気味なかげが二つ三つと光のとどかぬ海中にうごめく。『航海記』

…二、三日街をぶらついているとなんとなくこの都会のモノノケにつかれてしまふのだから…『航海記』

私はコモ湖に行き、そこで十五、六の清純そのものの少女に会った。『航海記』

韓国語の場合について論じると、名詞の結合の基本的形式は、「와」/wa/、「과」/kwa/(と)、「하고」/hago/(と)などの助詞や、「그리고」/kûrigo/(そして)、「및」/mit/(及び)、「혹은」/hogûn/(あるいは)、「또는」/ttonûn/(または)、「아니면」/animyôn/(あるいは)などの接続のための要素を用いるものがある。

- (64) 그 단순함과 간소함 속에서 생의 기쁨과 순수성을 잃지 않고 있다면 그것이 바로 삶을 살 줄 아는 것이다. (その単純さと簡素さの中から人生の喜びと純粋性をなくさないでいるならば、それが正しく人生を生きることができるのである。)『山に花が』

온갖 종류의 부정과 비리, 사기와 속임수, 그 밑바탕에는 간교한 머리가 작용하고 있다. (すべての種類の不正と非利、詐欺とトリック、そのベースには悪賢い頭が働いている。)『山に花が』

동서고금을 물을 것 없이 그 시대와 후세에까지 모범이 된 신앙인들은 가난과 어려움 속에서 믿음의 꽃을 피우고 그 열매를 맺었다. (東西古今を問わず、その時代と後世にまで模範となった信仰人達は貧しさと困難の中から信仰の花を咲かせ、その実を結んだ。)『山に花が』

옛날 어느 마을에 술 잘 먹는 사람하고 떡 잘 먹는 사람이 살고 있었습니다. (昔、ある村に酒をよく飲む人と餅をよく食べる人が住んでいました。)『童話』

오늘은 포도하고 딸기 주세요. (今日はブドウと딸기주세요。)『父』

시를 만든다는 것, 그리고 그 시를 맛본다는 것, 그것은 일상의 그 요리법과 똑같은 법칙을 가지고 있다. 물과 불처럼 영원한 대립, 끝없는 모순의 생이 어느 한 쪽을 제압하지 않고 융합되었을 때 한 편의 시는 빛어진다. (詩を創ること、そしてその詩を吟味すること、それは日常のその料理法と同じ法則を持っている。水と火のように永遠

의 대립, 종리의 없는 모순의 생이 둘 중 어느 한쪽을 억압하지 않고 융합할 때, 하나의 시는 만들어진다.) 『ことば』

히말라야의 등반대들은 멘룬 빙하의 부근에서 혹은 마나슬루봉 근처에서 이따금 이 雪人들의 발자국을 발견하여 세상을 놀라게 했다. (ヒマラヤの登板隊はメルン氷河付近であるいはマナスル峰付近で時々この雪人達の足跡を発見して世の中を驚かせた。) 『ことば』

당신의 가슴이 깃발처럼, 혹은 출항하는 배의 돛처럼 부풀어 오르는 것을 느낄 겁니다. (あなたの胸が旗のように、あるいは出港する船の帆のように膨らんでくるのを感じるでしょう。) 『ことば』

사람의 몸에 병이 생기게 하거나 혹은 죽게 만드는 모든 나쁜 귀신을 발견할 뿐더러 그 귀신을 쫓는 방법도 잘 알고 있었습니다. (人間の体を病気にさせたりあるいは死なせるすべての悪い鬼神を発見するばかりでなく、その鬼神を追出す方法もよく知っていました。) 『童話』

꽃 모양이 씨름할 때의 자세 같다고 해서 씨름꽃 혹은 장수꽃이라 부르기도 했다. (花の形が相撲取る時の姿勢のようなので、「相撲花」あるいは「将師花」と呼んだりした。) 『手紙』

「와」/wa/와「과」/kwa/는日本語의「と」에当たる助詞であるが、先行する名詞の構造によって使い分けられる。「단순함」/tansunham/(單純さ)、「기쁨」/kippûm/(喜び)、「부정」/pujông/(不正)、「가난」/kanan/(貧しさ)などのように終声(音節末子音)で終わる語には「과」が付き、「사기」/sagi/(詐欺)や「시대」/shidæ/(時代)など母音で終わる語には「와」が付く。

しかしながら、日本語の場合と同様に、このような結合のための要素を使わずに単純に並列することも可能である。

(65) 식수 문제, 공기 문제, 오염된 음식 문제, 이 모든 것이 인과관계이다. (食水問題、空気問題、汚染された食べ物の問題、このすべてのものが因果関係である。) 『山に花が』

보는 것, 배우는 것, 듣는 것, 그 자체만 갖고는 대단한 것이 아니다. (見るもの、習うもの、聞くもの、それだけでは大したことではない。) 『山に花が』

말이 적은 사람, 침묵을 소중히 여길 줄 아는 사람에게 신뢰가 간다. (口数が少ない人、沈黙を重んじる人は信頼できる。) 『山に花が』

생의 극치, 빛의 극치, 열기의 극치, 녹색의 극치…죽음과 마찬가지로 존재하는 것의 극치 속에도 정적이 있다. (生の極致、光の極致、熱気の極致、緑の極致…死と同じように存在するものの極致の中にも静寂はある。) 『ことば』

그러나 한결같이 그들은 고향이라는 말, 아버지라는 말, 어머니라는 말, 누나와 동생이라는 말, 그러한 말들 앞에서는 실어증에 걸려 있을 것이오. (しかし、一樣に彼らは故郷ということば、父ということば、母ということば、姉と妹ということば、そのようなことばの前では失語症にかかっているでしょう。) 『ことば』

당신은 그 때 살아 있다는 말, 움직인다는 말, 추구하고 받아들이고 창조한다

는 말이 하나의 시선이었다는 것을 느끼게 될 것이다. (あなたはその時生きているということば、動くということば、追求して受け入れて創造するということばが一つの視線だったということを感じるようになるだろう。) 『ことば』

닫혀진 시선, 이미 아무것으로도 향해 있지 않은 시선, 더 정확하게 말한다면 죽음이란 곧 빼앗겨 버린 시선인 것이다. (閉じられた視線、すでに何処にも向けられていない視線、もっと正確に言うと死というすぐ奪われてしまった視線なのである。) 『ことば』

사람들은 그 불을 상실한 뒤 인공의 불, 세속의 불, 우리들이 지금 사용하고 있는 그런 문명의 불을 만들어 냈다. (人々はその火を失った後、人工の火、世俗の火、私たちが今使っているそんな文明の火を作り出した。) 『ことば』

そして、やはり日本語の場合と同様、合成語の形で結合されることもある。

(66) 가위·바위·보(ジャンケンポン)	강·산(山川)	
눈·밭(田畑)	눈·코(目鼻)	물·불 (안 가리고) (水火(をいとわず))
밤·낮(夜昼)	비·바람(雨風)	손·발(手足)
아들·딸(息子と娘)	아침·저녁(朝夕)	아래·위(上下)
안·속(内心、心中)	안·밖(内外)	암·수(おすめす)
암술·수술(雄しべ雌しべ)		앞·뒤(前後)
오른쪽·왼쪽(右左)	위·아래(上下)	잘·잘못(よしあし、是非)
치마·저고리(チマチョゴリ)		바지·저고리(바지チョゴ리)
팔·다리(手足)		

中点(·)は構成要素間の切れ目を示すために付けたものであって正書法によるものではない。(66)のうち「강·산」/kang-san/(山川)の構成要素である「강」/kang/(川)と「산」/san/(山)はそれぞれ漢語の「江」と「山」である。しかし、現代韓国語ではこれらに相当する固有語は存在せずどちらも固有語のように意識されているので、ここに含めた。また、「가위·바위·보」/kawi-bawi-bo/(ジャンケンポン)は「가위」/kawi/(はさみ)、「바위」/pawi/(石)、「보」/po/ 風呂敷)の合成語である。この種の合成語は日本語に比べると少ない。また、(58b)に相当するような用言の並列による合成語は韓国語にはない。しかしながら、例は少ないけれども合成語のタイプとして並列構造があることは確かである。

名詞だけの並列ではなく何らかの助詞を伴う文節の並列もかなり自由に行われる。日本語の「も」に当たる副助詞「도」/to/は並列表現を導きやすい。

(67) 나는 지금 문패도 번지수도 없는 곳에 살고 있다. (私は今表札も番地もないところに住んでいる。)『山に花が』

특히 팔도 다리도 처음부터 소멸되어 있는 達磨像에 이르러서는 더 말할 것이 없다. (特に腕も足もはじめからなくなっている達磨像に至ってはさらに言うまでもない。)『ことば』

꿈도 희망도 모두 잃어버린 그에게 새삼 무슨 두려움이 있겠는가. (夢も希望もすべてなくした彼に今更何が怖いのか。)『父』

그래서 어제도 오늘도 내내 사무실을 지켰다. (だから昨日も今日もずっと事務室の席を離れなかった。)『父』

당신도 아이들도 모두가 그랬어. (あなたも子供達も皆がそうだった。)『父』

결국엔 아무런 정리도 준비도 못한 채 아쉬워하며 후회하며… (結局は何の整理も準備もできないまま惜しみ後悔しながら…)『父』

피로감도 거북함도 오늘은 훨씬 덜했다. (疲労も違和感も今日はかなりよくなった。)『父』

욕실문도 방문도 모두 열려 있었다. (風呂のドアも部屋のドアも全部開いていた。)『父』

책상도 의자도 책장도 아무것도 없이 행하니 비어 있었다. (机も椅子も本棚も何にもなくがらんとしていた。)『父』

영혼도 육체도 하얀 구름처럼 허공 위에 뜬다. (魂も肉体も白い雲のように空の上に浮かぶ。)『ことば』

また、副助詞「이나」/ina/(も、でも)、「이든」/idûn/(でも)、「이랑」/irang/(や、やら)などで導かれる例示のための表現も並列構造をとることが多い。¹³

(68) 부처나 보살이나 내 자신이나 똑같다. (釈迦だって菩薩だって私自身だって同じだ。)『山に花が』

우리들은 깨어 있었고 천 번이나 만 번이나 여름 태양이 출혈을 하는 그 뜨거운 빛의 세례를 보고 있었다. (我々は目覚めており、千回も万回も夏の太陽が出血をするその熱い光の洗礼を見ていた。)『ことば』

초가지붕이든 기와지붕이든 우리들의 그리운 그 옛집들도 다 그렇지 않은가! 우선 눈앞에 떠오르는 집들은 기둥이 아니라 대문이 아니라 하늘과 맞닿은 지붕의 그 형태이다. (藁屋根であれ瓦屋根であれ我々の懐かしいその昔の家々も全部そうじゃないか!まず目の前に浮かぶ家々は柱ではなく門ではなく空と接する屋根のその形態である。)『ことば』

나 아닌 타인에게, 내 가족이든 친구이든 남모르는 사람에게까지 동정과 이해심을 지니는 것이다. (私でない他人に、私の家族であれ友達であれ、知らない人にまで同情と理解心を持つことである。)『山に花が』

지금까지 우리가 절에서든 교회에서든 보고 듣고 배운 것이 얼마나 많은가. (今

¹³ 助詞の「이나」、「이든」、「이랑」はいずれも、母音で終わる語の後では「이」/i/が落ちて、「나」/na/、「든」/dûn/、「랑」/rang/となる。

まで我々がお寺でにしろ教会でにしろ見て聞いて学んだものがどんなに多いことか。)『山に花が』

머루랑 다래랑 먹고 青山에 살으리랴다와 나마조개 구조개랑 먹고 바라(바다)래 살으리랴다는 표현은 다같이 문화적 공간에 대응되는 자연 공간을 의미하고 있는 것이다. (山ブドウとかサルナシの実とかを食べて青山に住みなさいと生貝と牡蠣を食べて海に住みなさいという表現は両方共文化的空間に対応する自然空間を意味している。)『ことば』

その他に、「은」/ûn/、「는」/nûn/(は)、「을」/ûl/、「를」/rûl/(を)、「(에서)」/(e)sô/(から、で)、「(으)로」/(û)ro/(へ、で)等の助詞に導かれる表現も並列されることがある。

(69) 그러므로 출가자들, 수도자들 우선 가난해야 한다. (したがって、出家者は、修道士は、まず貧しくなければならない。)『山に花が』

사물의 실상을 조용히 지켜보고 내 내면의 흐름을, 내 생각의 실상을 조용히 지켜보는 일이다. (物の実像を静かに眺め、自分の内面の流れを、自分の考えの実像を静かに眺めることだ。)『山に花が』

낡은 생각에서, 낡은 생활 습관에서 떨치고 나오라는 것이다. (古い考えから、古い生活習慣から手を切れということだ。)『山に花が』

왜냐하면 한 뿌리에서, 생명의 커다란 한 뿌리에서 나누어진 가지가 바로 이웃이기 때문이다. (なぜなら、一つの根から、生命の大きな一つの根から分けられた枝がまさに隣人だからである。)『山に花が』

우리가 너무 거창한 데서, 큰 데서, 야단스러운 데서 행복을 찾으려고 하기 때문에 우리에게 주어진 그런 행복도 놓치고 만다. (我々があまりにも大變なところに、大きいところに、騒がしいところに幸せを求めようとしているので、我々に与えられたそんな幸せも逃してしまう。)『山に花が』

그대가 원하는 곳이면 어디든지 가보라고. 이 도시로 저 산속으로. (あなたが願う所ならどこでも行ってみると。この都市へあの山中へと。)『山に花が』

그 의지로, 그 분노로 유다의 악을 징벌해야 한다. (その意思で、その怒りでユダの悪を懲罰しなければならない。)『ことば』

以上の例から明らかなように、日本語と韓国語の名詞および名詞を中心とする表現は、ともに並列が可能であり、また、並列構造をめぐる事情はほぼ同じである。

3.4.2 連体修飾語の並列

名詞に2つ以上の連体修飾語が付く場合、次の例のように、末尾のものだけ

が連体形となり他は連用形あるいはいわゆる「テ形」となるのが、日本語における基本的な文法構造である。名詞の結合の場合のようにつなぎの言葉を用いるのではなく、結合される要素の一方を活用させるという形で結び付けるのである。

(70) 階段を登り切ると、そこには長く暗い廊下が走っており…『吉里吉里』

つまり、文学者としての先生の、鋭く深い洞察力をもってして綴られた真実の報告手記を…『吉里吉里』

実際、この世で高校生くらい清く正しい存在はないとまで私たちは思っていた。『青春記』

機械の力で耕された田には、なんとなく凸凹し、どことなく寒々とした感じがつきまとうものだが…『吉里吉里』

…人々の実際の暮らしというものは、そんな風に実質的で、地味で、なにか素朴な感じがする。『生きる』

そのことによって歌の世界が、貧しく、そしてせまく、そしてさびしいものになりつつあるという気がするのです。『生きる』

最初の例の「長く暗い廊下」の「長く」は、「長く伸ばす」の「長く」のような「長い」の副詞形ではない。「廊下」を修飾する2つの連体形形容詞「長い」と「暗い」が結合される過程で、前に位置する「長い」が連用形に活用されたものである。形容動詞が結合される場合には、同じ過程により、連用形「実質的で」、「地味で」などのようになる。最後の例のように「そして」などの接続副詞が随意的に用いられることもある。

しかしながら、連体修飾語の場合も、活用変化という明示的な結合方法をとらずに、連体形を単純に並べるだけという並列構造で表現することも多い。

(71) ここが一番安い四階の席に行くには、横手の狭い汚らしい階段を天まで昇りつめるかと思われるほど登らねばならぬ。『航海記』

夜、月光皓々と照り、静かなくろい運河にさざ波が光った。『航海記』

そのかほそい陰気な感じは日本の冬の夕日の比ではない。『航海記』

ところどころ街頭がおぼろなかほそい光を投げかけている。『航海記』

いや、ひよっとするともっとグロテスクな、もっと逆説的な深味を含んだ言葉でしょう。『生きる』

これらの例のように2個の形容詞や形容動詞の結合の場合には、型通りの結合形式を用いて「狭くて汚らしい部屋」、「静かでくろい運河」、「かぼそく陰気な感じ」などのようにしても、あまり違いが感じられないけれども、次のように並列される要素が3個以上であったり要素の構造が複雑な場合には、印象がかなり異なるというのが日本語母語話者の判断である。

- (72) あの耳のながい、脚のほそい、小さな愛すべき動物、ロバ。『生きる』
 青春とは、明るい、華やかな、生気に満ちたものであろうか。『青春記』
 私にわかることは、その男にしてもふだんは、まともな、健全な、むしろ善良な
 一般市民だということである。『青春記』
 ジョバンニが、なんだかあたりまえのような、あたりまえでないような、おかし
な気がして問いました。『銀河鉄道』

つまり、「あの耳が長く、脚がほそく、小さくて愛すべき動物」、「明るく、華やかで、生気に満ちたもの」、「まともで、健全で、むしろ善良な一般市民」のようにすると、あまりにも型にはまりすぎていて面白くない表現になるという。また、最後の例は、「あたりまえのようで、あたりまえでないようで、おかしな気」とすると不自然な感じのする文章になるという。

次に韓国語の例を検討しよう。韓国語では形容詞の連体形を並列することは普通は許されない。次の例のように「-고」/ko/や「-거나」/kôna/のような接続語尾を用いて結合しなければならない。

- (73) 행복의 비결은 결코 크고 많은 데 있지 않다. (幸せの秘訣は決して大きくて多いところにあるのではない。)『山に花が』
 행복의 조건은 결코 크거나 많거나 거창한 데 있지 않다. (幸せの条件は決して大きいとか多いとか立派なところにあるのではない。)『山に花が』
 따라서 내 자신의 어떤 잠재력, 원시적이고 야성적인 잠재력이 마음껏 드러난다. (したがって、私自身のある潜在力、原始的で野生的な潜在力が存分に現われる。)『山に花が』
 그 만남을 통해 비로소 그의 사랑은 높고 큰 것이 되었으며, 아름다운 삶을 벗어날 수가 있었다. (その出会いを通してはじめて彼の愛は高くて大きいものとなり、美しい人生を作り上げることができた。)『手紙』
 관상수원의 계수나무는 하트 모양의 작고 앙증맞은 잎새를 노랗게 물들이고 있었다. (觀賞樹園のトンキンニッケイはハート型の小さくてかわいらしい葉っぱを黄色に染めて

いた。)『手紙』

편지의 발신인을 찾아 이리저리 헤매느라 정작 그 편지 속에 담겨 있는 환유의 크고 깊은 마음을 잃어버리고 있는 건지도 몰랐다. (手紙の差出人をあちこち探し回って実際にその手紙の中に込められているファニユの深い深い心をなくしてしまっているのかも知れない。)『手紙』

물 위에는 또 여름이면 가지 속에서 작고 고운 보랏빛 꽃송이를 피우는 가지연꽃이 있었고, 마름과 애기마름, 애기가래 등이 살고 있었다. (水の上にはまた夏になればトゲの中から小さくてきれいな紫色の花を咲かせるオニバスの花があり、ヒシと小さいヒシ、小さいヒルムシロなどが生きていた。)『手紙』

그런데 어둡고 굳은 표정의 그가 ‘자네 집사람’이라는, 그들 사이에서는 생경한 호칭을 갑작스레 사용한 것이었다. (ところが暗くかたい表情の彼が‘君の家内’という、彼らの間では生硬な呼び方を急に使ったのである。)『父』

언제나 술취한 모습, 그리고 비틀거리고 흔들리고 나약하고 불품없는 모습. (いつも酔っ払っている姿、そしてよろよろしてふらふらして弱くみつともない姿。)『父』

最初の例の下線部「크고 많은」/k'ûgo manûn/(大きくて多い)は、形容詞「크다」/k'ûda/(大きい)と「많다」/mant'a/(多い)の結合であるが、これがまず接続語尾「-고」/ko/によって結合されて「크고 많다」/k'ûgo mant'a/となり、それが連体形となったものである。この形容詞の両方とも連体形にして「*큰, 많은 데」のような並列構造にすることはできない。ただし、「큰 데, 많은 데」/k'ûn de manûn de/(大きいところ、多いところ)のように名詞句にすれば並列構造も可能である。第2例の「크거나 많거나 거창한 데」/k'ûgôna mank'ôna kôch'anhan de/(大きかったり多かったり立派なところ)は接続語尾「-거」/kô/による結合の例であるが、これも、「*큰, 많은, 거창한 데」のように連体形を並列することはできない。第3例の下線部は「원시적이다」/wônshi-jôg-ida/(原始的)と「야생적이다」/yasæng-jôg-ida/(野生的)の結合である。これらの表現は名詞の「원시적」/wônshi-jôk/(原始的)と「야생적」/yasæng-jôk/(野生的)に指定詞の「이다」/ida/(である)が付いた表現である。それぞれ、日本語の形容動詞「原始的だ」、「野生的だ」に相当する意味を持っていることからわかるように、意味的には1個の形容詞と同等であると見なすことができるため、ここに含めた。この場合には、上の例のように、接続語尾「-고」/ko/を用いて「원시적이고 야

생적인」/wônshi-jôg-i-go yasæng-jôg-in/(原始的で野生的な)とするのが自然であるけれども、十分なポーズを置けば「원시적인, 야생적인」/wônshi-jôg-in yasæng-jôg-in/ (原始的な野生的な)のように連体形の並列構造も可能である。

単独の形容詞の場合には連体形の並列には厳しい制約があるけれども、連体修飾要素の構造が複雑になると、並列表現が自由になる。

(74) 선禪이라고 음각이 되어 있는, 아주 작고 감쪽한 물건이었다. (禪と陰刻された、とても小さくてかわいい物だった。)『山に花が』

오늘 날 우리는 얼마나 허약한가. 옛날 농사짓고 살던, 흙을 던고 살던 시절에는 흙으로부터 많은 기운을 받아들일 수 있었다. (今日我々はどんなに弱いのか。昔、耕して生きていた、土を踏んで生きていた時分には土から多くの氣運を受け入れることができた。)『山に花が』

이웃은 나와 무관한, 전혀 인연이 없는 타인이 아니다. (隣人は私と関係のない、全く縁のない他人ではない。)『山に花が』

행복할 수 있는, 행복을 받아들일 수 있는 따뜻한 가슴을 잃어 가기 때문이다. (幸せでいられる、幸せを受け入れられる暖かい胸をなくしていくからである。)『山に花が』

最初の例は「선禪이라고 음각이 되어 있다」/sônirago ûmagi tœô itta/(禪と陰刻されている)と「아주 작고 감쪽하다」/aju chakko kkamtchik'ada/(とても小さくてかわいい)がそれぞれ連体形(「있는」/innûn/、「감쪽한」/kkamtchik'an/)となって並列されたものである。その他の例も同様に下線部がそれぞれ連体形になっている。

以上に述べたように、多少条件の違いはあるけれども、日本語においても韓国語においても連体修飾語句の並列が可能である。

3.4.3 副詞の並列

副詞もまた並列される場合がある。日本語の例としては次のようなものがある。

(75) a) 昼間、たしかに船は小さく安っぽく見える。『航海記』

雲は暗澹とたれさがり、その下に海は冷たく暗くわきかえっている。『航海記』

- b) …空腹だったからこそ、山々はひとときわ清浄に崇高に目に映じたものようだ。
『青春記』
- c) …別な時期に、別な年代で、ちがう状況のもとで、その作品と出あったときは、
なにげなく通りすぎてしまうこともあるはずなのです。『青春記』

ただし、(75a)は構造的に曖昧である。例えば、最初の例の「小さく安っぽく」は「小さく」と「安っぽく」の並列であるとも解釈できるけれども、「小さい」と「安っぽい」の結合形である「小さく安っぽい」の副詞形とも解釈できるからである。しかしながら、(75b)についてはそのような曖昧さはない。明示的結合形の副詞形であるならば、「清浄で崇高に」となるからである。(75c)は副詞句の並列の例である。

一方韓国語では、2つ以上の派生副詞で同一の用言を修飾しようとするとき、(76a)のように接続語尾「-고」/ko/により結合する場合と、(76b)のように副詞を並列的に用いる場合とがある。

- (76) a) 아름다운 얼굴을 가지려면 영혼을 맑고 아름답게 가꿔야 한다. (美しい顔を持つには魂を清く美しくしなければならない。)『山に花が』
그러면 정말 자신이 더없이 초라하고 천하게 보여질 것 같았다. (そうすれば本当に自分がこの上なくみすほらしく下品に見えるようだった。)『父』
- b) 사람이 어떻게 무한히, 끝없이 경쟁만 할 수 있겠는가. (人間がどのように無限に、果てしなく競争だけできるのか。)『山に花が』
이 소나무처럼 늘 푸르게, 씩씩하게 잘 자라야 한다고. (この松のようにいつも青々しく、勇ましく育たなければならないと。)『手紙』

(76a)の下線部は、「맑다」/makta/(清い)と「아름답다」/arûmdapta/(美しい)を接続語尾「-고」/ko/によって結合し「맑고 아름답다」/malkko arûmdapta/(清く美しい)とし、それ全体を副詞語尾「-게」/ke/の添加によって副詞化したものである。(76b)の例と同様、これを「맑게, 아름답게」/malkke arûmdapke/のように副詞形の並列にすることも可能である。

以上の例から明らかなように、日韓両語とも副詞を並列構造で用いることが

可能である。

3.4.4 節の並列

用言の文末形が結合される場合には、特殊な表現効果をねらう場合は別として、並列されることはなく何らかの明示的な結合形式をとらなければならない。(77a)のように、最後の用言を除いて残りのすべての用言を連用形にするというのが最も一般的な結合形式であるが、(77b)のように接続助詞「し」によって結合することもある。

- (77) a) 生存ということがすでに激しい戦いであり、労働なのです。『生きる』
 朝は五時六時に起き、そして昼はビジネスランチで会議をやり、午後中働いて、八時からは次の打ちあわせに行く。『生きる』
 偶数と奇数と比べてみると、偶数は、割り切れて合理的で儒教に近い。『生きる』
 彼らが何を悲しみ、何を嘆いたか。『生きる』
 自分には自分流の感じかたがあり、見かたがあります。『生きる』
 京都にあるのは日本の心ではなくて、その飾りの下にあるものは、国際的なものへまっすぐつながっていく国際的な精神であり、美の構造であり、様式である。『生きる』
- b) 人間の文化も行動も、言葉によって表現されるわけですし、思考や哲学や、あるいは経済生活も、ことばによって行われていきます。『生きる』
 九州大学の池見酉次郎先生の心療内科などもそうですし、キリスト教系の病院のホスピスなどもそうでしょう。『生きる』

疑問文の場合には、次のように例外的に文末用言が並列構造で現れることがある。

- (78) これは個人の罪であるか社会の罪であるか。『青春記』

しかしながら、このような例は例外的なものであり、必ずしも文末用言の並列構造であると解釈する必要はない。2つの疑問文が句点なしに並べられたただけだと解釈することもできるし、あるいは、後述の疑問名詞節の主文が省略さ

れた表現と取ることもできる。例えば、上の例は「これは個人の罪であるか。(それとも)社会の罪であるか。」の正書法的変種と見ることもできるし、あるいは、「これは個人の罪であるか、社会の罪であるか、判断に迷うところである。」とか「これは個人の罪であるか、社会の罪であるか、どう考えたらいいであろうか。」の省略のようにも考えられるのである。

用言が文末以外の場所で節の中心として機能する場合には並列が可能である。その1つの場合である連体修飾節の場合は、上に§3.4.2で扱った。ここではその他の節の場合を挙げよう。

まず、次のような引用節がある。平叙文、感嘆文、疑問文、命令文といった様々な文種のもものが、引用節となって文中に置かれると並列が可能である。

- (79) センチメンタルであるとか、感傷的であるとか、そんな表現もおおむね批判の言葉として使われているようです。『生きる』
 ああ、ニューヨークは迷っているんだな、とまどっているんだな、ということを強く感じました。『生きる』
いいところを見せよう、上品に振る舞おう、気のきいた味のあることを喋べつてやろうと…『吉里吉里』
 集まり、そこで、宗教的、哲学的な、つまり極楽とは何だ、本当に念仏の力はあるんだろうかといった、信仰について語り合うことをはじめたのです。『生きる』
 <知る>ということは、じつは悲しいことではないか、つらいことではないか、ふっとそんなふうに思う。『生きる』
 …自分の人生を振り返り、こういう選択があったんじゃないか、自分の人生はこれでよかったのか、と、思い悩んだり…『生きる』
 …牛馬のような底辺の大衆に対して、集まれ、喋れ、語り合え、大声で話せと呼び掛けた最初の宗教家です。『生きる』

疑問文が名詞節となる場合にも、次の例のように並列構造で現れる場合がある。

- (80) …料亭へ仕事に来たのか 飲み食いをしに来たのか まったくわからない…『航海記』
 果して自分が船に 強いのか弱いのか全然わからない。『航海記』

副詞節の場合は最も多様で、様々な形式の表現が並列される。

- (81) どんなに苦しくても、どんなにつらくても、人間には笑いが必要だ。『航海記』
 毎日の新聞を読んでもテレビを見ても、そう思わない日はありません。『生きる』
坐っても立っても歩いても、何をしていてもそこに意識を集中させてまさぐっている。『生きる』
 だからパリでは、色が黒かろうが斑(まだら)だろうが、タバコを耳からふかそう
が、ポーシを足にはいて歩こうが、丸ハダカで逆立ちしようが、誰もふりむいたり
 はしない。『航海記』
 …開けてあった扉を誰かがうっかり閉めてしまい、もう叫べども叩けども外に聞
えず、まさに窒息せんとしたところを救出されたのであった。『航海記』
 道は松林と水田との境を兼ねていて、右に折れ左に曲りしつつ北に向っている。
 『吉里吉里』
 日本の方角は雲がたむろし、島があるようでないようで判然としない。『航海記』

最初の3例の「～しても～しても」の表現は、並列構造でなく「～しても」という単一構造でも用いられるが、他は並列構造が前提となっているような表現である。特に、「叫べども叩けども」の「～すれど(も)」は多少古風な表現で、このような並列構造か、あるいは「行けども行けども」のような反復表現(これも並列表現であるが)でしか現代語では用いられない。単独でならば「～しくも」で表わされる。

節の並列で最もよく見られるタイプは「～したり～したり」の表現である。

- (82) 長い時間をかけて、人びとは物を売ったり買ったりすることを単なる経済行為から、ひとつの文化的な芸にまで向上させていきました。『生きる』
 …そのまっ白な広い河原を小さなトロがせわしく行ったり来たりし…『化物丁場』
 だれもそのために血を流したり泣いたりしてはいません。『縮み志向』
 それをほぐしたり並べたりしていると早くも時間である。『航海記』
 生の肉が一番飽きにくいもので、煮たり焼いたりしてはすぐ鼻についてしまう。
 『航海記』
 そこで泣いたり喜んだりすることで、日々の暮らしの中で失われた記憶を再びよみがえさせる。『生きる』
 …本を読んだり、花をつくったり、絵を見たり、物を書いたりしながら、人生の収穫期を、じっくりあじわうべきだと思うのです。『生きる』

次に韓国語の例を見ると、韓国語でも日本語の場合と同様、文末用言は何ら

かの活用によって結合されるのが普通である。「-고」/ko/がこの目的に最もよく用いられる接続語尾である。書き言葉では「-며」/myô/も用いられる。

- (83) 그렇지 않으면 우리들 일상이 진부하고 지루하고 따분해진다. (そうしなければ我々の日常が陳腐で退屈でつまらなくなる。)『山に花が』
- 새벽은 3월이고 시인이고 반쯤 열린 꽃이고, 가지를 떠나는 새이다. (夜明けは3月であり詩人であり、半分くらい開いた花であり、枝を離れる鳥である。)『ことば』
- 아무리 세상이 미쳐 버렸다 해도, 그래 네 말대로 내가 그렇게 불품없고 무능하고 나약하고 천박했다 할지라도, 네가 어떻게 나에게... (どんなに世の中が狂っても、そう君の言う通り私がそんなにみすぼらしくて無能で脆く下品だったとしても、君がどうして私に...)『父』
- 그래도 그렇게 즐겁고 행복하고 뿌듯할 수가 없었다. (それでもあんなに楽しくて幸せで心強く思った。)『父』
- 청빈은 절제된 아름다움이며 사람을 사람답게 만드는 기본적인 조건이다. (淸貧は節制された美しさであり、人間を人間らしく作る基本的な条件である。)『山に花が』
- 그러기에 주먹은 거부이며 도전이며 징벌의 의지를 나타낸다. (したがって、こぶしは拒否であり、挑戦であり、懲罰の意志を表わす。)『ことば』
- 우리가 욕심내는 그 시인의 모습은 밀실과 광장을 동시에 살고 있는 시인이며, 글을 쓰며 동시에 말을 하는 사람이며, 앉아 있는 것과 서 있는 것을 한꺼번에 할 수 있는 그런 시인이다. (私達が欲しい詩人の姿は密室と広場に同時に住んでいる詩人であり、文章を書きながら同時に話せる人であり、座っていることと立っていることを一度にできるそんな詩人である。)『ことば』
- 불순한 세속의 불과는 달리 그것은 연기 없는 불이며, 소리없는 불이며 화재없는 불이다. (不純な世俗の火と違って、それは煙のない火であり、音のない火であり、火災のない火である。)『ことば』

例外的に、疑問文では次のような並列構造の文末形を持つものがある。

- (84) 그 옷이 아직 거기에 있는지 없는지. (その服がまだそこにあるのかないのか。)『山に花が』

このような例は、日本語の(80)と同様に、疑問名詞節を含む文の省略として考えることができよう。

従属節の場合には、韓国語でもかなり自由に並列構造が用いられる。まず、次の例は、引用節が並列されたものである

- (85) 욕망을 끊는다, 번뇌를 끊는다, 말로는 끊을 것 같지만 끊을 수 있는 성질의 것이 아니다. (欲望を断つ、煩惱を断つ、言葉では断てそうだけど、断てる性質のものではない。)

『山に花が』

또 일단 전기가 들어와 보라. 이제 냉장고다, 텔레비전이다, 오디오다, 비디오다, 그밖에 무슨 빵 굽는 기계다, 세탁기다, 이게 다 곁들여 올 것 아닌가. (また、いったん電気が入ってくるとなると、こんどは冷蔵庫だのテレビだのオーディオだのビデオだの、そのほかに何かパンを焼く機械だの洗濯機だの、これらがみな入ってくるであろう。)『山に花が』

자비를 베풀라, 사랑해라, 여러 말이 있지만 친절하다는 것, 이것이 인간의 미덕이다. (慈悲を施しなさい、愛しなさい、いろんな言葉があるが、親切であるということ、これが人間の美德である。)『山に花が』

그분을 만날 때 우리 사이에는 자신이 무슨 승려라거나 상대방이 사제라거나 하는 의식이 전혀 없다. (あの方に会うと我々の間には自分がどこかの僧侶とかか相手が司祭とかいいう意識が全くない。)『山に花が』

また、次のように疑問文が従属節となる場合にも並列構造が頻繁に用いられる。

- (86) 환경학자들은 21세기까지 이 지구가 이대로 존속할 수 있을까 없을까를 염려하고 있다. (環境学者は21世紀までこの地球がこのまま存続できるか どうかを心配している。)『山に花が』

그런 책을 통해서 과연 나는 남으로부터 매력을 느낄 수 있는 삶인가 아닌가 하는 것을 돌아볼 수 있다. (そのような本を通して果たして私は他人から魅力を感じることができる人生なのかどうかを振り返ってみることができる。)『山に花가』

얼굴에 기미가 끼었는가 말았는가, 체중이 얼마나 불었는가 줄었는가에 최대 관심을 기울인다. (顔にシミができたかできなかったか、体重がどれぐらい増えたか減ったかに最大の関心を注ぐ。)『山に花가』

어제보다 오늘이 더 행복한지 아닌지, 수시로 따져 봐야 한다. (昨日より今日の方が幸せであるかどうか、随時考えてみなければならない。)『山に花가』

副詞節の場合は、次のように実に多様な種類のものが並列構造を形成する。

- (87) 작고 미미한 것일지라도, 남이 알아 주지 않을지라도, 그것을 행해야 한다. (小さく微々たるものでも、人がわかってくれなくとも、それを行わなければならない。)『山に花가』

소유하고 싶은 것이 있더라도, 필요한 것이 있더라도 절대적으로 필요한 생활 필수품이 아니면 자꾸 뒤로 미뤄 보라. (所有したいものがあっても、必要なものがあっても、絶対に必要な生活必需品でなければ何度も後回しにしてみなさい。)『山に花가』

자연을 하나의 수단으로 생각했기 때문에, 정복의 대상으로 생각했기 때문에 오늘과 같은 문제가 생겼다. (自然を一つの手段と考えたために、征服の対象と考えたために今日のような問題が生じた。)『山に花가』

우리가 무엇인가를 가졌다고 할 때 크건 작건 그것의 노예가 된 것이다. (我々が何かを持った時、大きかれ小さかれその奴隷になったことである。)『山に花가』

우리는 보이든 보이지 않든, 혈연이든 혈연이 아니든 관계 속에서 서로 얽히고 설켜서 이루어진 것이다. (我々は見えても見えなくても、血縁であっても血縁でなくても、

関係の中で互いに絡み合ってきたものである。)『山に花が』

헛눈 파느라고, 불필요한 데 신경쓰느라고 제 빛을 발하지 못할 뿐이다. (よそ見して、不必要なところに神経を使って自分の光を発することができないだけである。)『山に花が』

생명은 늘 새롭다. 생명은 늘 흐르는 강물처럼 새롭다. 그런데 틀에 갇히면, 늪에 갇히면, 그것이 상하고 만다. (生命はいつも新しい。生命はいつも流れる川のように新しい。しかし、枠にはまったら、沼にはまったら、それは腐ってしまう。)『山に花が』

모든 것을 포기할 때, 한 생각을 버리고 모든 것을 포기할 때 진정으로 거기서 영혼의 메아리가 울린다. (すべてを諦めるとき、一つの考えを捨ててすべてを諦める時、本当にそこから魂がこだまする。)『山に花が』

사물을 향해서 눈을 뜰 때, 새롭게 눈을 뜰 때, 宇宙는 천지 창조의 첫째날처럼 빛을 발한다. (物に向けて目を開ける時、新しく目を開ける時、宇宙は天地創造の初日のような光を発する)『ことば』

작고 미미한 것일지라도, 남이 알아 주지 않을지라도, 그것을 행해야 한다. (小さくて微々たるものでも、人がわかってくれなくても、それを行わねばならない。)『山に花が』

그것은 이웃을 향한 행을 통해서 가능한 것이지, 경전을 많이 봤다고 해서, 법문을 많이 들었다고 해서 행해지는 것은 아니다. (それは隣人に対する行を通じて可能なものであって、経典をたくさん読んだからといって、法話をたくさん聞いたからといって行われるものではない。)『山に花が』

이웃집에 나들이를 가듯이, 짚신 짚을 끌고 늘 다니던 동리길을 걸듯이 그렇게 신들린 세계로 이를 수는 없을 것이다. (隣りの家に遊びに行くように、草鞋をはいていつも歩く町を歩くように、そのように神がかりの世界に辿り着くことはできないであろう。)『ことば』

태양은 깨어 있는 불꽃이지만, 혼자서도 타오르는 불꽃이지만, 우리들 지상의 불꽃들은 그렇지가 않다. (太陽は覚めている炎だけど、一人でも燃える炎だけど、我々の地上の炎はそうではない。)『ことば』

3.4.5 慣用句的並列表現

以上、様々な要素が並列構造の形で用いられることを見たのであるが、このような並列構造の中には、くり返しくり返し用いられて慣用表現化した例が日本語でも韓国語でも少なくない。

日本語でもっとも目につく慣用的並列表現としては、次のようなものがある。

(88a) …場内のあちこちからゆらゆらと紫煙が立ちのぼる。『吉里吉里』

次に世界地図をひらいてあれこれと空想にふける。『航海記』

あちらこちらからぞろぞろと蟻のように人間が出てくる。『航海記』

波は一定せずあちらからもこちらからもほしいままにやってくる。『航海記』

それであっちこっちの雑誌にたくさん穴をあけてしまった。『吉里吉里』
 空のあっちでもこっちでも、雷が素敵に大きな咆哮をやり…『ガドルフ』
 波は一定せずあちらからもこちらからもほしいままにやってくる。『航海記』

- b) 聞いているうちになんだかなにもかもが莫迦らしくなり…『吉里吉里』
 それでもとうとう、十二月中には、雪の中で何とかかんとか、もとのような形
 になったんです。『化物丁場』
- c) ああ、おれにもどうやらこうやら生きて行く方策(みち)が立ってきたようだ。
 『吉里吉里』

(88a)は「あ／こ」の交替を含む並列表現で、(88b)は「な／か」、(88c)は「ど／こ」の交替によるものである。それぞれ、他に次のような形がある。

- | | | | |
|---------|--------------------------------|--------------------|--------------------------|
| (89) a) | あれもこれも
ああしろこうしろ | あれやこれや
ああだこうだ | あれやらこれやら
ああでもないこうでもない |
| b) | 何だかんだ
何とかかんとか | 何のかんの
何ともかんとも | 何やかや
何となく |
| c) | どいつもこいつも
どうのこうの
どうやらこうやら | どれもこれも
どうにかこうにか | どうこう(する)
どうにもこうにも |

(88a)と(89a)の「あ／こ」、(88c)と(89c)の「ど／こ」はいずれもいわゆる「コソアド」に係わるものであるが、(88b)と(89b)の「な／か」の正体が明確ではない。「な」が疑問詞「何」の一部であることは明白であるけれども、「か」が何であるのか不明である。古風な指示詞「かの(あの)」、「かなた(あなた)」の「か」に由来するとも考えられるが、(a)や(c)に倣って単に語呂合わせのために付け加えられた要素とも解釈できる。

その他のタイプの慣用化された並列表現には次のようなものがある。

- (90) 土神はもう居ても立ってもいられませんでした。『土神』
 私はしばらくの間寝ても覚めても殺人の方法を考案したが……『航海記』
瘠せても枯れてもわたしは作家だ。『吉里吉里』
 それでも彼らは有能な専門家たちだから、寄ってたかって治る病気は治してしま

う。『航海記』

いま川の流れているところに、そっくり塩水が寄せたり引いたりもしていたのだ。
『銀河鉄道』

…モスクワやサンクトペテルブルグの町角の残像が、行きつ戻りつする中で思う
ことは…『生きる』

留学生にはたいてい大なり小なり憂鬱症にとりつかれる時期があるらしい。『航海
記』

それは見ていると、足が砂へつくや否や、まるで雪の融けるように、縮まって平
べったくなくて…『銀河鉄道』

その他、実に多様な表現が慣用的に用いられている。

- | | | | |
|---------|-------------|--------------|-------------|
| (91) a) | 明けても暮れても | 洗いざらい | 行くも止まるも |
| | 痛しかゆし | いたれりつくせり | 入れ代わり立ち代わり |
| | 多かれ少なかれ | 押し合い圧し合い | 押せども引けども |
| | 遅かれ早かれ | 照ろうが降ろうが | 飛んだり跳ねたり |
| | 泣いたり笑ったり | 飲めや歌えや(の大騒ぎ) | のるかそるか |
| | 持ちつ持たれつ | 良かれあしかれ | 良きにつけ悪しきにつけ |
| | 呼べど叫べど | | |
| b) | いちかばちか | 一も二もなく | 今も昔も |
| | 言わず語らず | 嘘か誠か | 鵜の目鷹の目 |
| | 恨みつらみ | 縁もゆかりも(ない) | 老いも若きも |
| | 大波小波 | 口八丁手八丁 | 幸か不幸か |
| | 蝶よ花よと | 手かせ足かせ | 手も足も(出ない) |
| | なりふり(かまわず) | 猫も杓子も | 根も葉も(ない) |
| | (たとえ)火の中水の中 | 身振り手振り | 破れかぶれ |

韓国語の場合に話を移すと、韓国語にも慣用的に用いられる並列表現が様々存在する。その中で最も頻繁に使われるタイプは、日本語の(88a)や(89a)の「あ／こ」に当たる次のような表現である。

- (92) …소주병과 잔을 내놓고는 이것저것 안주거리를 장만하기 시작했다. (…焼酎と杯を出してはあれこれおつまみを作り始めた。)『父』

떡볶이를 우물거리며 길가에 나온 가구들을 이것 저것 살피던 두 사람의 눈이 어느 순간 한 곳에 멎었다. (トッポッキをもぐもぐ食べながら店の外に出ている家具をあれこれ見ていた二人の目がある瞬間一点に止まった。)『手紙』

환유의 결심은 이것저것 쟀 끝에 그저 한번 던져 보는 것이 아니었다. (ファニ

의 결심은 あれこれ 計った末にただ一度投げてみるものではなかった。) 『手紙』

당신이 놀랄까 봐 그러지 않으려 해도 자꾸만 이것저것 잊어버릴 때가 많아. (あなたが驚くかもしれないからそうしないでおこうと思ってもいつも あれこれ 忘れる時が多い。) 『手紙』

여기저기 서 아이들이 떠들기 시작했다. (あちこち で子供達が騒ぎ始めた。) 『手紙』

여기저기 놓여 있던 빈 병과 술잔, 우동그릇, 냄비, 수저통... 모두가 비틀거리며 쓰러졌다. (あちこち に転がっていた空瓶とコップ、鍋、箸立て...全てが倒れた。) 『父』

다급하게 여기저기 책상 서랍을 뒤지던 정인이 난감한 표정을 지으며 환유 앞에 섰다. (急いで あちこち の机の引き出しを探したチョンインが困った表情でファニユの前に立った。) 『手紙』

하객들은 마치 피크닉이라도 나온 듯 ‘시가 있는 숲’ 여기저기 에 놓인 의자에 앉았다. (祝客はまるでピクニックにでも来たように ‘詩のある森’ あちこち に置かれた椅子に座った。) 『手紙』

정인은 원고를 손에 들고 여기저기 뒤적이기 시작했다. (チョンインは原稿を手を持って あちこち 見始めた。) 『手紙』

그들은 정인의 존재를 무시한 채 자기들끼리 이런저런 얘기를 하며 떠들고 있었다. (彼らはチョンインの存在を無視したまま あれこれ 話をしながら騒いでいた。) 『手紙』

대학원의 다른 아이들도 이런저런 핑계를 대며 빠지다가는 아예 학교에조차 나타나지 않는 경우가 많았다. (大学院の他の子達も あれこれ 言い訳を言って抜けて終には学校にさえ出てこない場合が多かった。) 『手紙』

또 다른 친구들은 얼굴만 알고 있을 뿐 정인보다도 이런저런 얘기를 할 만큼 가까운 사이가 아니었다. (他の友達は顔だけ知っているだけでチョンインとも あれこれ 話すほど仲良くはなかった。) 『手紙』

누나는 이모저모 아쉬운 점이 많았지만 둘이 푹푹 뭉쳐 진행해 나가는 것을 막을 도리는 없었다. (お姉さんは あれこれ 心残りが多かったが二人が力を合わせてやっていくのを止めることはできなかった。) 『手紙』

정인은 다시 한번 집안 이곳저곳 을 둘러보기 시작했다. (チョンインはもう一度家の中を あちこち 見回し始めた。) 『手紙』

설날이라고 다들 때때옷 입고 이집저집 오가는데, 당신 혼자 그 조용한 집에 틀어박혀 궁상떨고 있는 건 아닌지 몰라. (お正月と言って皆着飾って あちこち 行ったり来たりするのに、あなた一人でその静かな家に籠もっているんじゃないかな。) 『手紙』

잡지사에서 원고 청탁을 하나 받은 게 있는데, 이래저래 미뤄 뒀더니 월요일까지는 꼭 쥐야 한다고 난리지 뭐야. (雑誌社から一つ原稿を頼まれたが あれやこれや と延ばしてたら月曜日までは必ず出して欲しいと言われたんだ。) 『手紙』

공주는 이제나저제나 하고 왕자가 돌아오기만을 기다렸다. (姫は 今か今かと 王子が帰ってくるのを待った。) 『手紙』

이리 치이고 저리 치이며 환유를 찾아 두리번거리는 정인의 눈에 저 멀리 환유가 끌려가는 모습이 보였다. (あちこち に押されてファニユを探すのにきよるきよるしているチョンインの目の先にファニユが連れて行かれるのが見えた。) 『手紙』

환유가 라면을 먹는 틈틈히 바닥에 놓인 패종시계를 이리저리 만졌다. (ファニユがラーメンを食べる合間に床に置かれた掛け時計の あちこち を触った。) 『手紙』

정인의 앞에서는 입을 꼭 다문 채 움직일 줄 모르던 패종시계가 환유의 손길이 몇 번 닿자 보름달 같은 추를 이리저리 흔들기 시작했다. (チョンインの前では口をつぐんだまま動かなかった掛け時計がファニユの手がかかると満月のような振り子を あちこち

ちふりはじめた。)『手紙』

카메라를 보며 이리저리 고개를 기웃거리던 환유가 목소리를 고르는 듯 헛기침을 몇 번 했다. (カメラを見てあちこち見ていたファニユが声を整えるようにせきを何回かした。)『手紙』

의자에 앉아 이리저리 자세를 잡아 보던 환유가 물었다. (椅子に座ってあれこれポーズを取っていたファニユが尋ねた。)『手紙』

마당을 빙글빙글 돌며 도망치는 환유를 쫓아 정인도 이리저리 뛰어다녔다. (庭をぐるぐる回って逃げるファニユを追い駆けてチョンインもあちこち走り回った。)『手紙』

정인이 쓴 사각모를 이리저리 바로 잡아 주던 정인 어머니의 손이 어느 한 순간 얼어 붙은 듯 멈췄다. (チョンインがかぶった四角帽のあちこちを直していた母の手が一瞬凍ったように止まった。)『手紙』

노을에 물든 물결 위로 나뭇잎들이 이리저리 살랑이고 있었다. (夕焼けに染まった波の上に葉っぱがあちこち揺れていた。)『手紙』

정인이 이리저리 눈동자를 굴리다가는 명호의 눈을 뻔히 쳐다보았다. (チョンインがあちこちに瞳をぐるぐる回してミョンホの目をじっと見た。)『手紙』

병일이 건네준 편지 결봉을 이리저리 뒤적이며 보던 수경이 말했다. (ピョンイルが渡してくれた手紙の封筒をあちこち見たスギョンが言った。)『手紙』

명호는 정인의 얼굴을 이리저리 살피며 말했다. (ミョンホはチョンインの顔をあちこち見ながら言った。)『手紙』

편지의 발신인을 찾아 이리저리 헤매느라 정작 그 편지 속에 담겨 있는 환유의 깊고 깊은 마음을 잃어버리고 있는 건지도 몰랐다. (手紙の差出人を探してあちこち探して本当にその手紙の中に込められているファニユの深い深い心を忘れてしまっているのかも知れない。)『手紙』

日本語の「こ／そ／あ」にほぼ対応するダイクシス¹⁴に係わる区分が韓国語にもあり、「이」/i/(この)／「그」/kû/(その)／「저」/chô/(あの)がそれである。上の例はそのうちの「이」と「저」とを交替させたものである。¹⁵ このタイプの並列表現は日本語よりも韓国語の方が多様で、上の例の他に次のようなものがある。

- | | |
|------------------|--------------------|
| (93) 이날저날(今日明日) | 이냥저냥(どうやらこうやら) |
| 이래라저래라(ああしろこうしろ) | 이랬다저랬다(ああしたりこうしたり) |
| 이러고저러고(あれこれと) | 이러니저러니(どうのこうの) |
| 이러저러하다(しかじかだ) | 이러쿵저러쿵(なんだかんだと) |
| 이럭저럭(どうにかこうにか) | 이렇성저렇성(あれやこれや) |

¹⁴ ダイクシス(deixis)とは、発話の場面との関連でなされる時間的・空間的概念規定を指す。人称代名詞や、日本語の「こそあ」などがダイクシスにより規定される言語現象の例である。

¹⁵ 日本語では「あ」、「こ」の順になり韓国語では「이」、「저」の順になるというように配列の順が逆になっている。このことに関しては、飯田(1993)、田守(1993)などを参照。

이렇저렇(どうやらこうやら)	이렇다저렇다(ああだこうだ)
이렇든저렇든(どうでもこうでも)	이리쿵저리쿵(ああしようこうしよう)
이쪽저쪽(あちらこちら)	이탓저탓(ああだこうだ)
이편저편(あちらこちら、敵味方)	

さらに、多少方言的な感じがするけれども、「요」/yo/(この)／「조」/cho/(あの)の交替による並列表現もある。

(94) 요날조날	今日明日	요래라조래라	ああしろこうしろ
요래조래	どうやらこうやら	요랬다조랬다	ああしたりこうしたり
요러니조러니	どうのこうの	요력조력	どうにかこうにか
요렁조렁	どうやらこうやら	요렇다조렇다	ああだこうだ
요리조리	あちこち	요모조모	あれこれ

別なタイプとしては、「가다」/kada/(行く)と「오다」/oda/(来る)の交替に基づく並列表現がいくつか慣用的に使われる。

(95) 오나가나	どこへ行っても
오다가다	行き来のついでに
오너라가너라	来いと言ったり行けと言ったり
오락가락	行ったり来たり、降ったりやんだり
오면가면	行き帰りに
온다간다는 말없이	一言の挨拶もなく
온데간데없다	跡形もない
왔다갔다	行ったり来たり
올지갈지하다	行こうか行くまいかためらう

その他、次のような慣用的並列表現がある。

(96) 앉았다섰다	立ったり座ったり
열었다닫았다	開けたり閉めたり
앉으나서나	いても立っても
자나깨나	寝ても覚めても
비가 오나 눈이 오나	雨が降っても雪が降っても
읽고 쓰고	読んだり書いたり
안고 지고	抱いたり負ったり

이기고 지고	勝ったり負けたり
알게모르게	知らず知らず
앞서거나 뒤서거나	後になたり先になったり
오르락내리락	上がったたり下がったり
울고불고	泣いたりわめいたり
울며불며	泣き泣き

以上に見たように、日本語でも韓国語でも非常に多様な並列表現が慣用表現として頻繁に用いられている。このように並列表現が慣用化し好んで用いられるのはなぜか。この疑問に答えるには次のような表現がヒントになると思われる。

- (97) 「だども……」「だども 子ども みどももあるか…『吉里吉里』
 もともと記憶していないのだからハテナも アテナもありゃしないのだ。『吉里吉里』
 こうなってはもうマン氏も ヘチマもない。『航海記』

これらの並列表現は、形式的には「イエスもノーもない」とか「好きも嫌いもない」と同じ性質のもののように見えるけれども、並列構造を構成する要素の性格を考えると同じではない。「イエスもノーもない」の「イエスも」と「ノーも」はそれぞれが独自の明確な意味を持っており、それが対比的な意味を持つように並列されている。それに対して(97)の例では、そのような並列要素間に意味的な関係はなにもない。「だども」と「子ども」と「みども」の間には何の意味的な繋がりも見出すことができない。「ハテナ」と「アテナ」、「マン氏」と「ヘチマ」も同じである。では、このような意味的に何の関連性もないような語がどうして並列されるのかというと、最初の語との語呂合わせのために第2、第3の語が置かれているのである。つまり、意味とは無関係に、単に口調のよさ、聞こえの面白さをねらった表現なのである。「マン氏」と「ヘチマ」の場合は語呂合わせというには音の配列が違いすぎるけれども、「～もヘチマもない」は「～も蜂の頭

もない」、「～もへったくれもない」、「～もくそもない」などと同様、パターン化した表現である。

語呂合わせ的な並列構造に関しては、(89b)の「何だかんだ」などの表現についても触れたが、慣用的な並列表現の中にはこのような語呂合わせによって生じたと解釈されるものが他にもいくつかある。

- (98) 一体全体 一切合切 ためつすがめつ 手取り足取り
 なかよしこよし 似たり寄ったり 待てど暮せど 無理矢理
 目茶苦茶 夕焼け小焼け
 うんともすんとも(言わない) にっちもさっちも(行かない)

「うんともすんとも(言わない)」の「すんとも」は明らかに語呂合わせのために添えられたものである。「うん」という返事はあっても「すん」という返事はないからである。「一体全体」、「一切合切」、「なかよしこよし」、「夕焼け小焼け」、「無理矢理」、「目茶苦茶」などは、それぞれ、前半部の要素だけで同じ意味が十分に表わせる。後半部は、前半部の意味を強めたりあるいは単に口調のよさをねらって添えられたものと考えられる。「待てど暮せど」は「いくら待っても」の意味であって「暮す」こととは直接関係がない。したがって、「暮せど」もやはり語呂合わせの要素の印象が強い。「手取り足取り」は「丁寧に教えるさま」を意味するが、手を取って教えることはあっても足を取ることは普通はないのではないか。「足取り」は「手取り」と対句的に、つまり語呂合わせの効果をねらって添えられた可能性が高い。「似たり寄ったり」の「寄ったり」もこれらと同様である。「ためつすがめつ」と「にっちもさっちも(行かない)」は、それぞれ、「矯めつ吵めつ」、「二進も三進も」のように漢字表記される。語源的にはこの漢字表記に示される通りであったであろうが、現代ではほとんどそのような語源意識なしに使われている。口調がいいので慣用句として定着したものと考えられる。

このように、慣用的並列表現の中には語呂のよさ、口調のよさが主たる存在

理由になっているものがある。しかし、語呂のよさ、口調のよさというのは慣用的並列表現全体に共通する特徴であって、一部の表現にのみ見られるものではない。つまり、並列表現のうち口調のいいものが好んで使われているうちに慣用表現化し、口調のいい表現を指向する力が(97)や(98)のような非分析的な表現を生んだと考えられるのである。

韓国語では、日本語の(97)や(98)の例のような口調のよさを追求するという理由だけで生じたと思われる並列表現が極めて少ない。上に挙げた例の中では、わずかに「오나가나」/ona-gana/(どこへ行っても)だけが該当するように思われるに過ぎない。これは、その意味から考えて「오다」/oda/(来る)とは関係のない表現であり、単に語呂合わせのためだけに「오다」と「가다」/kada/の交替を用いているだけのことであり、と考えられる。しかし、語呂合わせのためだけの理由で生じた表現はほとんどないにしても、韓国語の慣用的並列表現も、口調のよさ、語呂のよさという共通の性質を持っており、そのために慣用表現として定着したと考えられることは、日本語の場合と変わりがない。

そして重要なことは、慣用的並列表現の語呂のよさ、口調のよさというのが、§ 3.1.1で扱った「야키もき」、「あたふた」、「うろちよろ」、「허둥지둥」/hōdung-jidung/(あたふた)、「우물쭈물」/umul-jumul/(もじもじ)、「싱글빙글」/shinggûl-pōnggûl/(にこにこ)などの類音反復形オノマトペのそれと本質的に同じであるということである。類音反復形は「反復性」と「多様性」を併せ持つ形式であるが、この特徴はまさに慣用的反復表現の特徴でもある。

3.5 並列構造と反復表現

以上に例示したように、日韓両語において並列構造は文構造の主要部分、名詞句、形容詞句、副詞句に広く活用され、その一部は口調のいい表現として慣用句化されている。一般語の反復表現はこの並列構造を構成する要素が同一で

あるという特殊な場合であると考えられる。上に、日韓両語の反復形オノマトペは一般表現の反復形が持つ「音楽的特性」、「口調のよさ」、「聞こえのよさ」が昇華される形で発達してきたのではないかと述べたが、一般表現の反復形が持つ「音楽的特性」はまた、両言語において並列構造が可能であるということに由来すると考えられるのである。要するに、日韓両語において並列構造が可能であることからその特殊な場合として反復表現が生れ、その反復形式の象徴的意味を利用する形で反復形オノマトペが発達してきたのではないかと推測されるのである。

反復形を口調のいい表現として好むかどうかは言語によって異なる。日本語や韓国語が反復形を好む言語であるのに対して、英語などの言語では反復形はあまり高く評価されない。反復形式は幼稚な表現であるとして ‘choo-choo’ (汽車ポッポ)、『puff-puff’ (汽車ポッポ)、『pee-pee’ (ピヨピヨ、ひよこ)、『quack-quack’ (ガアガア、あひる)、『poo-poo’ (うんち)、『coo-coo’ (べらぼうな)、『too-too’ (極端な)、『bon-bon’ (菓子的一种)、『tom-tom’ (太鼓的一种)などのような幼児語、俗語、外来語に限られるようである。一般語における反復形の例としては、話し言葉で ‘very very old’ のように強調語のが反復される例とか、決まり文句として ‘long long time ago’ (昔々)のような表現が見られる程度に過ぎない。日本語や韓国語で反復形が好まれるのは並列構造が許されることに起因すると述べたが、その主張を裏付けるように英語は並列構造を許さない言語である。

英語では統語機能的に等価な2つの要素AとBを結合する場合、‘A and B’、‘A or B’、‘A but B’、‘both A and B’、‘either A or B’などのように何らかの明示的な結合要素を介在させなければならず、並列構造は通常許されない。‘First come, first served.’ (早い者勝ち)や ‘No pain, no gain.’ (楽あれば苦あり)のような成句には並列構造が見られるが、これらは圧縮された特殊な文体の表現であり英語の統語特徴からは逸脱したものと考えるべきである。慣用句的な表現

であっても次のように結合要素が必要である。

(99)	little by little	(少しずつ)
	bit by bit	(少しずつ)
	drop by drop	(一滴一滴)
	step by step	(一步一步)
	one by one	(一つ一つ)
	day by day	(日々、日に日に)
	day to day	(一日一日)
	day after day	(来る日も来る日も)
	night after night	(一日一日)
	hand in hand	(手に手を取って)
	all in all	(全体として)
	face to face	(面と向って)
	mouth-to-mouth	(口移しの)
	door-to-door	(戸別の)
	more and more	(ますます)
	for ever and ever	(絶えず)
	rain or shine	(照っても降っても)
	out and out	(完全に)
	on and on	(引き続いて)
	on and off	(時々、不規則に)

3.6 漢文の影響

日本語と韓国語になぜ反復形オノマトペが多いかを推測する上で、考慮すべきと思われる事柄がもう1つある。それは漢文の影響である。日本も韓国も歴史的に長期間にわたって中国文化の影響を大きく受けてきた。その過程で日韓両語に大量の漢語が流入し、漢語は現代日本語及び現代韓国語の語彙の重要部分を占めている。そうした漢語の中には反復形式のものが多く含まれており、その一部は明らかにオノマトペである。このような反復形の漢語が日韓両語の反復形オノマトペの発達に何らかの影響を与えたのではないかと考えられるのである。

漢語は日本語と韓国語で独自の発達をした部分が少なくないが、両語で共通に使用されている反復形の漢語としては次のようなものがある。¹⁶

(100) 日本語	韓国語
殷々と	은은히 [殷殷-]
鬱々としている	울울하다 [鬱鬱-]
云々	운운 [云云]
延々と	연연 [延延]
往々	왕왕 [往往]
喜々として	희희 [喜喜]
汲々としている	급급하다 [汲汲-]
刻々と	각각으로 [刻刻-]
煌々と	황황 [煌煌]
昏昏と	혼혼히 [昏昏-]
諄々と	순순히 [諄諄-]
徐々に	서서히 [徐徐-]
上々	상상 [上上]
疊々と	첩첩이 [疊疊-]
種々	종종 [種種]
切々と	절절히 [切切-]
騒々しい	소소하다 [騷騷-]
続々と	속속 [續續]
代々	대대로 [代代-]
大々的	대대적 [大大的]
淡淡としている	담담하다 [淡淡-]
遅々として	지지 [遲遲]
着々と	착착 [着着]
転々とする	전전하다 [轉轉-]
等々	등등 [等等]
滔々と	도도히 [滔滔-]
堂堂としている	당당하다 [堂堂-]
半々	반반 [半半]
微々たるものだ	미미하다 [微微-]
飄々と	표표히 [飄飄-]
粉々と	분분히 [紛紛-]
茫々と	망망히 [茫茫-]

¹⁶ ここに挙げる例のすべてが中国語起源のものであるとは限らない。日韓両語に大量の漢語が借入されただけでなく、漢字の造語能力に基づいて日本あるいは韓国において造られた漢語が少なくない。そのような漢語が例の中に含まれている可能性はある。

脈々と	맥맥이 [脈脈-]
綿々と	면면히 [綿綿-]
黙々と	묵묵히 [黙黙-]
悠々と	유유히 [悠悠-]
揚々と	양양히 [揚揚-]
洋々と	양양히 [洋洋-]
凜々しい	늠름하다 [凜凜-]
歴々と	역력히 [歷歷-]
恋々と	연연히 [戀戀-]

必要に応じて固有語の語尾が付けられているが、語幹となっている部分が反復形漢語である。意味的には副詞として用いられるものがほとんどであり、しかもオノマトペと同様に様態副詞として用いられるものが多い。

反復形の要素が他の要素と結び付いた形式もある。

(101) 日本語	韓国語
威風堂々	위풍당당 [威風堂堂]
呵呵大笑	가가대소 [呵呵大笑]
興味津津	흥미진진 [興味津津]
個々人	개개인 [個個人]
虎視眈々	호시탐탐 [虎視眈眈]
自信满满	자신만만 [自信滿滿]
多士济济	다사제제 [多士濟濟]
不平满满	불평만만 [不平滿滿]
悠悠自適	유유자적 [悠悠自適]
和氣藹々	화기애애 [和氣靄靄]

この場合も反復形の部分はオノマトペに類似した機能を果たしているものが多い。

反復形式の特殊なタイプとして、次のようにAABB型に要素を配列するものがある。

(102) 日本語	韓国語
侃侃諤諤	간간악악 [侃侃諤諤]
三々五々	삼삼오오 [三三五五]

正々堂々	정정당당 [正正堂堂]
戦々恐々	전전공공 [戰戰兢兢]
年々歳々	년년세세 [年年歲歲]
唯々諾々	유유낙낙 [唯唯諾諾]
奇々怪々	기기괴괴 [奇奇怪怪]
虚々実々	허허실실 [虛虛實實]
子々孫々	자자손손 [子子孫孫]
時々刻々	시시각각 [時時刻刻]
是々非々	시시비비 [是是非非]
平々坦々	평평탄탄 [平平坦坦]
平々凡々	평평범범 [平平凡凡]
明々白々	명명백백 [明明白白]

「侃侃諤諤」から「唯々諾々」までの表現は反復形でしか用いられないが、「奇々怪々」以下の表現は、それぞれ「奇怪」、「虚実」、「子孫」、「時刻」、「是非」、「平凡」、「明白」という単一形式から反復過程により派生されたものである。日韓両語のオノマトペの中にも、数は少ないけれども「しゅっしゅっぽっぽ」、「がたがたごとごと」、「지지배배」/chiji-bæbæ/(びーちくばーちく)、「칙칙폭폭」/ch'ikch'ik-p'okp'ok/(しゅっしゅっぽっぽ)のようにAABB型のものがある。

類音反復形はABCB型に要素を配列するものであるが、これと同じ配列型の漢語表現もある。

(103) 日本語	韓国語
以心伝心	이심전심 [以心傳心]
右往左往	우왕좌왕 [右往左往]
有耶無耶	유야무야 [有耶無耶]
五十歩百歩	오십보백보 [五十步百步]
四苦八苦	사고팔고 [四苦八苦]
四方八方	사방팔방 [四方八方]

また、類音反復形のオノマトペにはない型であるが、ABACの配列型のものがかなりある。

(104) 日本語	韓国語
一挙手一投足	일거수일투족 [一舉手一投足]
一進一退	일진일퇴 [一進一退]
一朝一夕	일조일석 [一朝一夕]
一長一短	일장일단 [一長一短]
再三再四	재삼재사 [再三再四]
自給自足	자급자족 [自給自足]
自作自演	자작자연 [自作自演]
自繩自縛	자승자박 [自繩自縛]
自暴自棄	자포자기 [自暴自棄]
全身全靈	전신전령 [全身全靈]
全知全能	전지전능 [全知全能]
善男善女	선남선녀 [善男善女]
多事多難	다사다난 [多事多難]
多事多忙	다사다망 [多事多忙]
多種多樣	다종다양 [多種多樣]
適材適所	적재적소 [適材適所]
徹頭徹尾	철두철미 [徹頭徹尾]
獨立獨步	독립독보 [獨立獨步]
半官半民	반관반민 [半官半民]
半信半疑	반신반의 [半信半疑]
百發百中	백발백중 [百發百中]
不眠不休	불면불휴 [不眠不休]
不老不死	불로불사 [不老不死]
暴飲暴食	폭음폭식 [暴飲暴食]
無位無冠	무위무관 [無位無冠]
無為無策	무위무책 [無爲無策]
連戰連勝	연전연승 [連戰連勝]

日韓兩語の類音反復形オノマトペにはABAC型のものはないけれども、口調や語呂の点からはほとんど同じものである。

以上の例からだけでも漢語表現の中に反復形が多いことはある程度察せられると思われるが、長年にわたる中国文化の影響の中で、日本人や韓国人が接してきた反復形の漢語表現はこれらの例の何倍にも及んだはずである。上では、日韓兩語に共通のものだけに限って例を挙げたけれども、日本語ではまったくあるいはほとんど用いられないが韓国では用いられるという例にまで範囲を広げると、次のように多くの反復表現が使われている。

- (105) a) 겹겹하다 [劫劫-](短気だ) 공공연하다 [公公然-](公然だ)
 괴괴하다 [怪怪-](奇怪だ) 교교하다 [皎皎-](皓皓だ)
 급급하다 [急急-](非常に急だ) 도도하다 [陶陶-](なごやかで楽しい)
 등등하다 [騰騰-](元氣一杯だ) 막막하다 [寞寞-](静かで寂しい)
 막막하다 [漠漠-](広々と果てしない) 매매하다 [昧昧-](世事に疎い)
 사사롭다 [私私-](私的だ) 삼삼하다 [澁澁-](とても渋い)
 생생하다 [生生-](生き生きしている) 세세하다 [細細-](非常に詳しい)
 소소하다 [小小-](こまごましている) 소소하다 [昭昭-](明らかだ、明白だ)
 소소하다 [簫簫-](もの寂しい) 순순하다 [順順-](おとなしい)
 신선하다 [新新-](新鮮だ) 엽엽하다 [獵獵-](聡明ですばしこい)
 왕왕하다 [汪汪-](果てしなく広い) 위태위태하다 [危殆危殆-](大変危ない)
 은은하다 [隱隱-](明らかでない) 자자하다 [藉藉-](広まっている)
 잔잔하다 [潺潺-](静まり返っている) 잠잠하다 [潛潛-](静かだ、黙っている)
 쟁쟁하다 [錚錚-](玉が転がり響くように音がきれいにさえている)
 적적하다 [寂寂-](ひっそりと寂しい) 정정하다 [淨淨-](汚れなく清らかだ)
 조조하다 [躁躁-](とても焦っている) 진진하다 [津津-](豊かで活気がある)
 창창하다 [蒼蒼-](青々としている) 청청하다 [靑靑-](青々としている)
 청청하다 [淸淸-](明るく澄んでいる) 초초하다 [草草-](みすばらしい)
 충충하다 [忽忽-](慌ただしい) 충충하다 [葱葱-](生い茂っている)
 충충하다 [叢叢-](ぎっしり生えている) 침침하다 [沈沈-](うっとりしい)
 쾌쾌하다 [快快-](雄雄しくさわやかだ) 탄탄하다 [坦坦-](平らだ)
 팽팽하다 [膨膨-](膨れ上がっている) 평평하다 [平平-](平たい、平坦だ)
 함함하다 [含含-](つやつやしてしっとりしている)
 혁혁하다 [赫赫-](輝かしい) 훈훈하다 [薰薰-](ほかほかしている)
 혼혼하다 [欣欣-](実に喜ばしい) 흉흉하다 [洶洶-](荒波が立っている)
- b) 간간이 [間間-](時々、所々に) 누누이 [屢屢-](しばしば、しきりに)
 반반이 [班班-](各班ごとに) 방방이 [房房-](部屋ごとに)
 산산이 [散散-](ばらばらに) 색색이 [色色-](色とりどりに)
 염념이 [念念-](切々と、切に) 장장이 [張張-](一枚毎に)
 절절이 [節節-](一言一言に) 참참이 [站站-](時々)
 층층이 [層層-](階ごとに) 편편이 [便便-](つてのあるたびに)
 편편이 [片片-](ひらひらと)
- c) 각각 [各各](おのおの、それぞれ) 매매 [每每](毎度)
 모모 [某某](誰それ) 별별 [別別](いろいろな、さまざまな)
 영영 [永永](永久に、いつまでも) 점점 [漸漸](だんだんと)
 차차 [次次](だんだん、次第に) 호호 [戶戶](家ごと、各戸)
 겸사겸사 [謙辭謙辭](~かたがた) 겸지겸지 [兼之兼之](~かたがた)
 차례차례 [次例次例](順々に)
- d) 가가문전 [家家門前](家々の門前) 막막강병 [莫莫強兵](強力な軍隊)

독야청청 [獨也靑靑]((松の木のように冬でも)独り靑々としていること)
 만만다행 [滿滿多幸](千万多幸) 만만부당 [滿滿不當](不當千万)
 명명지중 [冥冥之中](知らず知らずのうち)
 백발성성 [白髮星星](白髮の混じっていること)
 사사불성 [事事不成](何をやってもうまくいかないこと)
 삭삭왕래 [數數往來](頻繁に往來すること)
 살기등등 [殺氣騰騰](殺氣がみなぎること)
 세세사정 [細細事情](細かい事情) 심심산천 [深深山川](非常に奥深い山川)
 신신당부 [申申當付](何度も繰り返して頼むこと)
 신신부탁 [申申付託](何度も繰り返して頼むこと)
 장장추야 [長長秋夜](長い長い秋の夜) 장장하일 [長長夏日](長い長い夏の日)
 전전걸식 [轉轉乞食](各地を転々としながら物ごいの生活をする事)
 허허탄식 [虛虛歎息](ため息をつきながらひどく嘆くこと)
 현현장부 [軒軒丈夫](益荒男) 혈혈단신 [子子單身](天涯孤獨)
 호호백발 [皓皓白髮](真っ白くなった白髮)

- e) 가가호호 [家家戶戶](家ごとに)
 계계승승 [繼繼承承](子孫代々に代を継ぐこと)
 공공사사 [公公私私](公私を区別すること)
 기기묘묘 [奇奇妙妙](非常に奇妙なこと)
 방방곡곡 [坊坊曲曲](津々浦々)
 사사건건 [事事件件](すべての事)
 사사물물 [事事物物](あらゆる物事)
 소소명명 [昭昭明明](明々白々)
 을을창창 [鬱鬱蒼蒼](鬱蒼としたさま)
 중중색색 [種種色色](種々さまざま)
 중중첩첩 [重重疊疊](幾重にも重なるさま)
 청청백백 [淸淸白白](淸廉潔白であること)
 탕탕평평 [蕩蕩平平](不偏不党)
 형형색색 [形形色色](色とりどり)
 호호막막 [浩浩漠漠](限りなく広大なさま)
 호호탕탕 [浩浩蕩蕩](果てしなく広いこと)
 희희낙낙 [喜喜樂樂](喜んで楽しむこと)
- f) 각양각색 [各樣各色](色とりどり、様々)
 각인각색 [各人各色](十人十色)
 다재다병 [多才多病](多才な人は病弱なことが多いということ)
 동생동락 [同生同樂](共に生き共に楽しむこと)
 동성동본 [同姓同本](姓も本貫も同じであること)
 막상막하 [幕上幕下](互角、伯仲)
 백인백색 [百人百色](十人十色)
 옥의옥식 [玉衣玉食](ぜいたくに暮らすこと)
 요산요수 [樂山樂水](自然を愛すること)

- 왈시왈비 [曰是曰非](是非を論ずること)
 유시유종 [有始有終](初めはあって終わりがあること)
 지정지미 [至精至微](きわめて精微なこと)
 호의호식 [好衣好食](ぜいたくに暮らすこと)
- e)

감지덕지 [感之德之](非常にありがたがるようす)

기진맥진 [氣盡脈盡](疲労困憊)

노발대발 [怒發大發](かんかんになって怒ること)

산전수전 [山戰水戰](海千山千)

애지중지 [愛之重之](大変愛して大切にすること)

이열치열 [以熱治熱](力には力をもって対すること)

좌지우지 [左之右之](思うままにすること)

차일피일 [此日彼日](一日また一日と延期すること)

휘지비지 [諱之秘之](うやむやにすること)

(105a)は反復形漢語を語幹とする形容詞の例である。多くは副詞語尾を付けることによって副詞としても用いることができる。(105b)は反復形漢語語幹に副詞語尾「-이」を付けたものであり、(105c)はその他の反復表現の例である。(105d)は反復形と他の語との組み合わせ、(105e)はAABB型の反復形の例である。(105f)と(105g)は、それぞれABAC型およびABCB型の表現の例である。

日本語にも韓国語にも定着しなかった表現にまで範囲を広げれば、反復形の漢語表現の数は極めて多いと思われる。日韓両語は、それぞれの発達過程において、このように豊富に反復表現を含む漢文の影響を強く受けてきた。その過程において、漢語の反復表現が日韓両語の反復表現や反復形オノマトペの発達に影響を与えたのではないかと考えることは、決して無理な推測であるとは言えないであろう。

しかしながら、その推測を証明することは容易なことではない。漢文の影響があったことを証明するためには、日韓両語について漢文との接触以前と以後の実態が明らかになっていなければならない。ところが、いずれの言語においても、文献的には漢文との接触よりはるか後の時期までしか遡ることができない。韓国では百済が日本に漢学を伝えたのが405年、仏教を伝えたのが552年

とされている。そして、日本語の文献が登場するのは8世紀以降である。日本語の文献が現れる以前に漢文の流入は大規模に始まっていたと推定されるが、漢文流入以前の日本語の姿を知る手がかりがないのである。韓国の場合にはさらに甚だしい。仏教の伝来は日本よりも早く、372年に高句麗に、384年に百済に伝わったとされているが、当時の東アジアの国際情勢から考えると、漢文との接触はそれよりもかなり古い時期から始まっていたと考えられる。しかし、韓国語の文献が現れるのは15世紀中葉のハングル創製後のことである。したがって、日韓両語の反復形オノマトペの発達に漢文の影響があったかどうかを文献的に確かめることは不可能である。しかしながら、このような事情は、漢文の影響があったことを証明できないということに過ぎないのであって、影響がなかったことを証明するものではない。

また、漢文の反復表現と日韓両語の反復形オノマトペは異なる言語レベルの表現であるので影響しあうことはないという主張がなされるかもしれない。漢文は政治の言葉、学問の言葉であり一部特権階級、知識階級だけの言葉であったのに対して、オノマトペは庶民が日常的に使う言葉に属する。現代においても漢語系の語彙と固有語系の語彙はかなり明確に区分されているが、身分の差、学問の差の大きかった時代においては、2つの言語レベルの差はさらに顕著であったと推測される。しかしながら、そうだとしても日常語に対する漢文の影響がまったくなかったということにはならない。実際、一部権力層・知識層の独占物であった漢語は、その後の両語の発達過程で次第に一般化し、現代の日本語や韓国語の語彙の重要部分を構成するに至っている。漢語は改まった文体に、固有語はくだけた文体にという使い分けはあるけれども、その区別は厳密なものではない。日本語と韓国語のいずれにおいても、日常的な会話の中で多くの漢語が使われている。また、日常的に漢字を使う日本語とは異なり、日常的な読み物でほとんど漢字を使わない韓国語では、漢語と固有語の区別が曖昧

になっている。(105)の(a)～(c)の例の多くは一般の韓国語話者には固有語と感
じられている。このように漢語が日本語や韓国語の中に浸透していく過程で漢
文の反復表現が固有語の反復表現の発達に影響を与えたと考えるのは決して無
理なことではないだろう。

反復形の漢語表現に接してはじめて反復形のオノマトペが登場し発達したと
いうのではない。そうであったかもしれないが、前述のようにそれを証明する
ことはできない。反復形のオノマトペの登場は、前節までに述べた理由による
日本語や韓国語に固有の発達過程であったかもしれない。しかし、それがオノ
マトペの典型的な形態として多様性を増し、使用頻度を増してきた背景には、
漢語表現に反復形が多いということが要因として働いてきたと考えられるので
ある。

日韓両語の反復形オノマトペには、例えば英語の反復形の場合とは違って、
幼稚であるというようなマイナスの語感はない。くだけた文体で用いられるこ
とが多いといっても、それは幼稚さとは別次元のものである。むしろ、生き生
きとした描写力があるというプラスのイメージでとらえられている語彙である。
知的な言葉としての漢文に反復形が多いということは、少なくとも反復形に対
する好ましさを醸成するには大きな影響があったと考えられる。

3.7 まとめ

本章では、まず、日韓両語の反復形オノマトペを形態、使用頻度と分布比率、
意味の観点から比較対照した。形態面に関しては、いずれの言語においても反
復形のタイプとして「くるくる」や「덜덜」/teol-teol/(ぶるぶる)のような完全反復
形、「あたふた」や「울긁불긁」/ulkeut-pulkeut/(色とりどりに)のような類音反
復形(不完全反復形)、「びりり」や「스르르」/seureureu/(うとうと)のような部分
反復形に分類される。

オノマトペ辞書の見出し語などに占める反復形の分布比率はいずれの言語においても50%を上回っており、反復形がオノマトペの典型的形態であることを示している。実際の用例における反復形の割合は日本語に比べて韓国語の方がかなり低いようである。これは韓国語には高頻度で用いられる1音節あるいは2音節の単純形オノマトペが多いことと、韓国語には原則として単純形オノマトペに付いて反復の意味を表す「-거리다」/keorita/という動詞形成語尾が頻繁に用いられることによる。

意味面に関しては、日韓両語のオノマトペの持つ形態象徴的意味はともに《反復・継続》、《複数》、《強調》に分類できる。また、類音反復形は「多様であること」、「均質でなく不揃いであること」、「整然としていないこと」などの象徴的意味を持つと考えられる。

反復形は日韓両語のオノマトペの最も重要な形態的特徴であるけれども、オノマトペだけに限って用いられる形態ではなく一般語彙の中にも「毎日毎日」、「おのおの」、「매일매일」/mai:il-mai:il/(毎日毎日)、「때때로」/ttai-ttai-ro/(時々)など多くの反復形がある。その象徴的意味を比較すると、一部一般語彙の反復形に特有の意味があるけれども、《反復・継続》、《複数》、《強調》の意味を持つことについてはオノマトペの場合と共通している。

日韓両語において一般語彙の反復形が頻繁に用いられることは、反復形式が口調のいい表現として好まれていることを示している。反復形式に対するこのような嗜好性がオノマトペという特異な語彙の中に言わば結晶化され、反復形オノマトペが大量に造り出されるようになったと考えられる。

日韓両語において反復形式が好まれるようになった原因は、両語の構造上の特質にあると考えられる。一般語彙の反復形のほとんどは並列構造、つまり統語機能的に等価な要素を一切の明示的結合要素なしに結び付ける構造を成している。並列構造は日韓両語の文構造の主要部分、名詞句、形容詞句、副詞句に

広く活用され、その一部は口調のいい表現として慣用句化されている。一般語の反復表現は並列構造を構成する要素が同一であるという特殊な場合であるとみなすことができる。要するに、日韓両語において並列構造が可能であることからその特殊な場合として反復表現が生れ、その反復形式の象徴的意味を利用する形で反復形オノマトペが発達したと推測される。

反復表現が日韓両語で好まれるようになったことについては、古くから両語に影響を与えてきた漢文においても「往々」、「着々」、「堂々」などの反復形がありこの種の漢語表現が両語に数多く取り入れられてきたことも、大きく作用していたと推測される。